

4. ユーラシアにおける交易網の復元と技術移転—金属器及び玉類の分析と文化資源化—

中村 大介

はじめに

本研究は『テーマ1：もの（物資・技術・経済）の研究』の分担研究であり、「ユーラシアにおける交易網の復元と技術移転」を検討課題としている。最終的には、東アジアにおいて漢帝国が形成されたのち、周辺社会が漢による外圧と交流によってどのように社会構造を変質させていったのかを、交易網の復元と変遷から解明することを目指した。また、本研究は、碧玉やヒスイといった石製装身具、ガラス製装身具を中心に、考古学的分析と理化学的分析の両方から確実性の高い交易網の復元を目指した点を特徴としている。

（1）研究の背景

日本列島では縄文時代からヒスイ製装身具が流通しており、弥生時代になると定形勾玉が成立し、各地に広まった。碧玉製管玉は弥生時代に朝鮮半島から製品を輸入していたが、やがて弥生時代前期末（前3世紀頃）に北陸地方の菩提・滝ヶ原産地が開発され、日本列島の東西に流通するようになった。ガラスは弥生時代前期末に入ってきたのち、弥生時代後期初頭（前1世紀初頭）から本格的な利用が開始され、後期後半までには関東平野まで流通するようになる。

ヒスイの産地は日本列島で約10カ所あるものの、縄文時代から古墳時代に製品として利用されたのはほぼ新潟県糸魚川産のみである。これに対し、碧玉は前述した石川県の小松市菩提・滝ヶ原産以外にも、豊岡市玉谷産、佐渡島猿八産、松江市花仙山産、朝鮮半島産と考えられる未定C群などが利用されてきた。そして、碧玉の流通に関しては後期後半に主要産地である菩提・滝ヶ原産が激減し、花仙産が増加するとされている。しかし、弥生時代後期の理化学的な産地同定の事例が少なく、議論すべき余地が残されている。

一方、日本列島に出現するガラスは、最初は朝鮮半島を経由して入ってきた鉛バリウムガラスであり、管玉や勾玉として利用された。鉛を扱う点で類似するためか、青銅器と同様に弥生時代中期初頭には生産技術ごと導入されている。また、近い時期にカリガラスとソーダガラスも数点みられるが、前述したように本格的に流通するのは弥生時代後期初頭からであり、カリガラスを中心として直径5mm前後の小玉が一つの墓から多いもので数千点出土するようになる。この時期に日本列島にもたらされたガラス小玉の重要な点は、全てインド・パシフィックビーズ（IPB）であり、引き伸ばし技法によりインドから華南（嶺南地方）で生産されたことにある。つまり、日本列島においては、国内や朝鮮半島産地から流通した石製玉類だけでなく、それを越えた遠方の玉類が恒常的に輸入される状況になったことを意味している。これらのガラスの詳細な産地の探求は世界のガラス研究の論題の一つである。日本列島に関わるのは、IPBがどのようなルートで来たかである。ガラス研究では中国南部の江南地方から東シナ海を越えてきたとする見解が示されている。ただし、東シナ海を横断するようなルートは実証されておらず、弥生時代後期に中国南部の遺物が行き交う状況は確認されていない。そのため、朝鮮半島も含めたガラスのルートの復元が必要である。

ガラスは、朝鮮半島や日本列島で多くみられるものの、元々南越国があった嶺南地方などの例外を除

き、漢では耳擋などの伝統的な形態をもつ装身具を除いてはほぼみられない。しかし、モンゴル高原の匈奴はガラス製品とガラス小玉を多数保有しており、丁度、漢の周辺にガラスが多く流通していた状況となっている。これらが朝鮮半島や日本列島のガラス流通とどのような関係にあるかも明らかにする必要がある。

以上のような研究の動向を受けて、本研究では弥生時代後期前後の碧玉とガラスの理化学的分析を基盤とした交易路の復元を行った。

(2) 研究組織と方法

①. 研究組織

中村大介（埼玉大学）を中心として、田村朋美（奈良文化財研究所）、藁科哲男（遺物材料研究所）、高野陽子（京都府埋蔵文化財センター）に共同研究者になってもらい、課題を遂行した。田村朋美と藁科哲男はガラスと石製品に対する理化学的分析と解釈、高野陽子は丹後地域の玉類の選定と考古学的解釈を担当した。

②. 研究方法

考古学的に方法については、サイズ計測と型式学的検討が中心である。理化学的分析に関しては非破壊で分析でき、藁科哲男と田村朋美がこれまで蓄積してきた分析データと比較可能な蛍光 X 線分析を採用した。ただし、本研究は海外だけでなく、日本の重要文化財に指定されている玉類を分析するため、所蔵機関に分析装置を持ち込んで分析する必要がある。そこで、携帯型蛍光 X 線分析装置（pXRF）で、ガラスやヒスイの分析においては必要なナトリウム（Na）などの軽元素計測のできるスペックが必要であった。いくつかの候補を比較しつつ、当時、東京理科大学の中井泉研究室で採用されていたアワーズテック社の Ourstex 100FA を購入した。

ガラスに関してはファンダメンタル・パラメータ法（Fundamental Parameter 法、FP 法）で基準を合わせて比較することに産地を推定した。碧玉やヒスイに関しては、石材ごとに着目する元素に差異があるが、複数の元素比値から原産地や遺物群と比較して産地同定を行った。

③. 分析対象

分析の対象とした地域は、中国の周辺地であるベトナム、モンゴル、朝鮮半島、日本列島であり、前漢から三国時代に併行する時期の玉類を扱った。そして、①日本列島における流通の変化、②ユーラシアにおけるガラス交易というマイクロ/マクロの両視点からの交易網の復元を試み、かつ①と②の関連について検討した。

(3) 日本列島の流通変化

①. 分析成果

pXRF を用いて弥生時代後期後半に碧玉製管玉を多く出土する地域について分析を行った。以下では地域ごとにその結果を述べていきたい。

【丹後地域】 丹後地域は多数のガラス小玉と碧玉製管玉が出土することが知られていたが、分析事例が少なかった。そこで、2015 年度と 2016 年度に弥生時代後期前葉から終末期の墳墓群出土資料を分析した。複数の墳墓があるため、表 1 にその結果を示す。

ガラス釦が出土した著名な墳墓である大風呂南1号墓第1主体部からは272点の管玉が出土しており、そのうち65点を分析した。また同第3主体部からは31点出土しており、全点を分析した。

表1 丹後地域出土碧玉製管玉の蛍光X線分析結果(藁科哲男作成)

大風呂南遺跡1号墓第1主体出土						大風呂南遺跡1号墓第3主体出土							
試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調	試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調
OM-32-1	女代南B遺物群(27%)	2.42	0.15	6.7	3.9	淡緑	OM-1-1		2.33	0.07	8.2	2.2	緑
OM-33-1	川向-No.3・5遺物群(0.5%)	2.34	0.11	8.1	3.1	淡緑(茶濁)	OM-2-1	石川・菩提-1(0.04%)		0.02	4.9	2.2	GT 淡緑
OM-34-1	女代南B遺物群(4%)	2.46	0.18	10.8	3.4	緑	OM-3-1	石川・菩提-1(0.001%)		0.05	8.4	2.1	淡緑 やや濃
OM-35-1	女代南B遺物群(0.002%)	2.30	0.22	9.3	4.2	淡緑	OM-4-1	石川・菩提-1(0.001%)	2.16	0.06	9.6	2.1	緑
OM-36-1	女代南B遺物群(0.008%)	2.39	0.19	8.1	3.9	淡緑	OM-5-1		2.09	0.07	8.7	2.7	淡緑
OM-37-1		2.46	0.24	11.9	3.6	緑(有緋)	OM-6-1		2.07	0.08	8.9	2.6	淡緑
OM-38-1		2.52	0.23	11.0	3.7	緑	OM-7-1		2.17	0.08	9.6	2.5	淡緑
OM-39-1		2.47	0.23	11.5	3.7	淡緑	OM-8-1	青谷上寺地B遺物群(0.01%)	1.90	0.05	8.1	2.2	淡白緑
OM-40-1		2.47	0.22	11.3	3.6	緑(淡緑緋)	OM-9-1	花仙山面白谷(8%)	2.38	0.08	13.9	2.6	淡緑
OM-41-1	川向-No.3・5遺物群(0.02%)	2.42	0.30	12.9	3.9	緑-淡緑	OM-10-1	兵庫・玉谷(0.03%)	2.46	0.08	7.1	2.6	濃緑色
OM-42-1		2.50	0.25	12.8	3.5	緑	OM-11-1		1.64	0.04	8.8	2.3	淡緑
OM-43-1	女代南B遺物群(0.2%)	2.35	0.34	14.3	4.1	淡緑	OM-12-1	花仙山面白谷(0.0002%)	2.08	0.05	10.1	2.1	淡緑
OM-44-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.44	0.22	9.0	4.0	淡緑	OM-13-1		1.98	0.05	7.6	2.2	淡緑
OM-45-1		2.50	0.26	10.7	3.8	緑	OM-14-1		2.12	0.07	9.0	2.3	淡緑
OM-46-1	女代南B遺物群(0.6%)	2.43	0.36	14.4	4.2	淡緑	OM-15-1		2.37	0.07	8.6	2.2	濃緑
OM-47-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.44	0.33	14.1	3.8	淡緑	OM-16-1	石川・菩提-1(0.0001%)	2.35	0.08	9.9	2.3	濃緑-緑
OM-48-1	滝ヶ原-2(2%)	2.38	0.30	13.0	3.9	淡緑	OM-17-1	女代南B遺物群(0.0001%)	2.29	0.08	11.0	2.3	濃緑
OM-49-1	女代南B遺物群(0.002%)	2.46	0.44	14.3	4.3	淡緑	OM-18-1	花仙山面白谷(0.002%)	1.97	0.07	9.6	2.3	淡緑
OM-50-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.48	0.31	12.3	4.1	緑	OM-19-1	女代南B遺物群(0.002%)	2.24	0.05	8.9	2.2	緑
OM-51-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.45	0.25	14.9	3.5	緑(やや淡)	OM-20-1		2.09	0.05	6.0	2.3	淡緑
OM-52-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.41	0.41	17.0	4.0	淡緑	OM-21-1	石川・菩提-1(0.1%)	2.14	0.05	7.6	2.1	緑
OM-53-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.47	0.19	8.6	3.7	淡緑	OM-22-1	女代南B遺物群(0.003%)	1.94	0.03	6.3	2.0	淡緑
OM-54-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.48	0.25	8.6	4.1	淡緑	OM-23-1	青谷上寺地B遺物群(0.01%)	1.68	0.03	7.9	2.2	淡緑
OM-55-1	女代南B遺物群(3%)	2.49	0.27	12.6	3.7	淡緑	OM-24-1		2.14	0.05	6.7	2.5	緑
OM-56-1	女代南B遺物群(2%)	2.44	0.25	13.0	3.6	淡緑	OM-25-1	青谷上寺地541遺物群(0.02%)	2.30	0.12	11.2	2.7	濃緑-緑
OM-57-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.44	0.24	11.8	3.6	淡緑	OM-26-1		1.93	0.07	10.5	2.3	淡白緑
OM-58-1		2.30	0.14	7.9	3.5	淡緑	OM-27-1		2.28	0.04	6.8	2.1	緑
OM-59-1	女代南B遺物群(0.8%)	2.34	0.14	9.0	3.3	淡緑	OM-28-1		2.12	0.06	6.9	2.6	緑
OM-60-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.51	0.25	12.3	3.6	緑(緋緋)	OM-29-1		2.33	0.08	10.8	2.2	緑
OM-61-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.44	0.29	10.8	4.3	淡緑	OM-30-1	青谷上寺地B遺物群(0.02%)	1.98	0.06	8.6	2.3	淡緑
OM-62-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.43	0.20	9.8	3.5	淡緑	OM-31-1		2.20	0.10	10.3	2.5	緑
OM-63-1	女代南B遺物群(0.5%)	2.35	0.28	9.9	4.5	淡緑							
OM-64-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.43	0.20	9.9	3.6	緑(やや淡)							
OM-65-1	新穂村B遺物群(0.1%)	2.38	0.21	10.6	3.6	淡緑							
OM-66-1		2.45	0.26	12.2	3.7	淡緑(マーブル)							
OM-67-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.50	0.28	14.3	3.5	緑(淡緑マーブル)							
OM-68-1	女代南B遺物群(0.2%)	2.50	0.23	10.8	3.5	緑(淡緑マーブル)							
OM-69-1	女代南B遺物群(0.01%)	2.51	0.31	12.5	3.8	淡緑							
OM-70-1	女代南B遺物群(0.001%)	2.19	0.20	9.8	3.8	淡緑							
OM-71-1	女代南B遺物群(0.001%)	2.46	0.22	9.8	3.8	緑							
OM-72-1	女代南B遺物群(3%)	2.31	0.16	10.4	3.4	淡緑							
OM-73-1	女代南B遺物群(0.03%)	2.34	0.16	10.2	3.3	淡緑							
OM-74-1	女代南B遺物群(0.2%)	2.40	0.19	10.3	3.5	淡緑							
OM-75-1	女代南B遺物群(2%)	2.51	0.19	9.3	3.4	緑(やや濃)							
OM-76-1	女代南B遺物群(0.3%)	2.42	0.05	7.7	2.3	淡緑							
OM-77-1	新穂村B遺物群(1%)	2.49	0.19	9.5	3.6	緑							
OM-78-1	女代南B遺物群(5%)	2.45	0.20	10.9	3.6	淡緑							
OM-79-1	石川・菩提-1(0.1%)	2.47	0.13	10.3	2.9	淡緑							
OM-80-1	女代南B遺物群(0.05%)	2.39	0.10	10.6	2.4	淡緑							
OM-80-1													
OM-80-2	石川・菩提-1(4%)												
OM-81-2	花仙山面白谷(0.06%)	1.62	0.06	12.3	2.4	淡緑							
OM-82-1	女代南B遺物群(9%)	2.38	0.11	10.7	2.6	緑							
OM-83-1	石川・菩提-1(7%)	2.37	0.08	9.4	2.4	淡緑							
OM-84-1	女代南B遺物群(0.6%)	2.42	0.23	16.7	2.8	淡緑							
OM-85-1		2.45	0.15	9.5	3.3	緑							
OM-86-1	女代南B遺物群(6%)	2.40	0.22	10.1	3.8	淡緑							
OM-87-1	女代南B遺物群(10%)	2.42	0.24	13.7	3.4	淡緑							
OM-88-1	女代南B遺物群(2%)	2.47	0.08	8.3	2.5	淡緑							
OM-89-1	女代南B遺物群(0.2%)	2.44	0.16	8.7	3.4	淡緑							
OM-90-1	女代南B遺物群(14%)	2.48	0.08	7.8	2.7	淡緑							
OM-91-1		2.50	0.10	8.3	2.7	緑							
OM-91-2	女代南B遺物群(7%)												
OM-92-1	女代南B遺物群(0.9%)	2.48	0.07	7.3	2.6	淡緑							
OM-93-1	女代南B遺物群(13%)	2.43	0.07	10.0	2.3	淡緑							
OM-94-1	女代南B遺物群(0.1%)	2.32	0.12	11.0	2.7	淡緑							
OM-95-1	女代南B遺物群(3%)	2.46	0.11	12.7	2.4	淡緑							
OM-96-1	女代南B遺物群(2%)	2.44	0.14	10.9	2.8	淡緑							

大山墳墓周辺第9主体出土						
試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調
OY1	兵庫・玉谷(0.2%)	2.63	2.82	14.1	10.7	濃緑
OY2	兵庫・玉谷(64%)	2.59	2.57	14.4	10.3	濃緑
OY3	兵庫・玉谷(22%)	2.58	2.88	15.6	10.2	濃緑
OY4		2.59	2.61	16.1	9.3	濃緑

大山墳墓8号墓第2主体出土						
試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調
OY5	石川・菩提-1(0.03%)	2.49	0.32	11.0	4.5	緑
OY6	兵庫・玉谷(20%)	2.59	0.27	10.4	4.0	濃緑
OY7		2.59	0.23	10.2	3.7	やや濃緑色

金谷墳墓1号墓出土						
試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調
KY1	岐阜・土岐(5%)	2.21	0.05	4.3	3.1	緑-淡緑
KY2		2.47	0.17	8.7	3.5	緑
KY3	青谷上寺地B遺物群(0.3%)	2.53	0.19	10.7	3.4	緑-淡緑
KY4	島根・花仙山-2(0.3%)	2.80	0.03	3.3	2.3	黒

三坂神社8号墓第1主体出土						
試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調
MJ1	女代南B遺物群(0.002%)	2.49	0.39	15.8	4.2	淡緑(白緋)
MJ2	青谷上寺地B遺物群(0.5%)	2.55	0.13	7.8	3.4	緑(緋緋)
MJ3	女代南B遺物群(0.6%)	2.49	0.07	4.9	3.2	緑

左坂墳墓						
試料番号	ホテリングT ² 検定結果	比重	重量(g)	長(mm)	径(mm)	色調
SS1		2.08	0.19	13.1	3.7	

テリングT²検定の確率は低いものの、二つの主体部を合わせて66/96が女白南B群などの菩提・滝ヶ原産に該当するものであった。また、花仙山産も数点みられた。これに対し、同時期の大山墳墓群では玉谷産が高い確率で確認されている。後期前葉の三坂神社8号墓の管玉が菩提・滝ヶ原産であることから、後期後葉まで継続してその産地の碧玉が利用される一方、玉谷産や花仙産が少しずつ入ってきたといえよう。ただし、同時期でも玉谷産が卓越している墳墓があることから、玉類の入手は墳墓群ごと

に異なっていた可能性がある。加えて、西日本に広くみられる朝鮮半島産の未定C群がことも注意される。

【岡山平野】 岡山平野は弥生時代後期に墳墓が発達し、古墳時代への変遷を考える上で重要な地域である。その中でも弥生時代後期後半に最大の規模を誇る楯築墳丘墓から出土した管玉47点を2016年度に分析した。なお、ここからは多数のガラス管玉も出土している。

楯築遺跡の管玉は丹後地域の管玉に比べて巨大であり、長さ4.8cmを最大として、2~4cmのものを中心とする。これらは出土した場所によって区分されており、棺上と考えられているA群(18点)、棺内の被葬者が身につけていたと考えられるB群(27点)に分かれる。B群には糸魚川産の勾玉と外来産と考えられるカーネリアン管玉が組み合う。碧玉の分析結果は、A群全てが玉谷産、B群の26点が菜畑遺物群を含む未定C群であった。つまり、カーネリアンを含む外来の管玉と糸魚川産のヒスイ勾玉を組み合わせて被葬者に装着させ、日本海産の管玉を棺上に置き、区別していたことがわかった。

サイズにおいては、産地の区別なく巨大なものを入力しており、被葬者の奢侈品の獲得力を物語っている。同時期の他地域ではこれほどのサイズの碧玉製管玉はみられない。若干規模が大きなカーネリアン管玉は糸島平野の平原1号墓にみられるが、これも長さが1.86~2.22で、楯築墳丘墓の碧玉製管玉を下回る大きさである。サイズの類似するのは、少し前の時代であるが、北関東から南東北の再葬墓に副葬されていた菩提・滝ヶ原産や猿八産で製作された管玉がある。これら再葬墓の管玉についても、藁科哲男のこれまでの研究や、本研究でpXRFによる分析を行い、産地を確認している。

【近畿地方】 古墳時代開始期の大和王権の玉類流通の掌握状況を把握するため、2015年度に桜井市埋蔵文化財センターが所蔵する纏向遺跡、赤尾熊ヶ谷古墳の碧玉製の管玉及び石製品の分析を行った。弥生時代中期後半の北部九州の王墓群、上述した弥生時代後期後半の楯築遺跡や、丹後地域の墳墓群では、ヒスイ製勾玉や碧玉製管玉は上位層の副葬品として重要視されてきた。しかし、近畿地方では考古学的な分析の結果、布留0式段階までは、大和王権は従来の装身具である碧玉製管玉や翡翠製勾玉を重要視していなかったことが判明した。

蛍光X線分析の結果、弥生時代以来の巨大産地である菩提・滝ヶ原産の石製品は大和盆地に入っているが、管玉ではなく、新しい形態の威信財の模索していたようである。また、布留1式段階になって、従来の管玉や勾玉といった形態を再度重要視し、流通を掌握したことも、今回の分析で明らかになった。

②. 小結

碧玉を中心とした分析を行った結果、従来いわれていた弥生時代後期後半の菩提・滝ヶ原産の減少については、丹後地域などで多く消費されていたことから、再考の余地が出てきた。また、当時最大の墳丘墓である楯築で玉谷産の管玉が保有されていたことから、但馬地域のある日本海西部が交易において重要性を増してきたことも明らかになった。古墳時代で重要な碧玉産地となる花仙産の隆盛はこの流れに沿ったものだろう。また、墳墓群ごとに保有する碧玉の産地が異なる傾向にあることから、弥生時代後期後半は流通が複雑化した時期ととらえるのが正確である。この前段階にガラス小玉が大量流入してくるため、この新たな流通が影響している可能性も十分に考えられる。

(4) ガラス交易ルートと主要消費地の変化

①. 楽浪郡のガラスと交易ルート

ガラスには基礎ガラスや着色料にバリエーションがあり、種類によっては産地も推定されている（表2）。主たる産地は地中海東部、中東から中央アジア、インドなどであるため、碧玉などの石製玉類より広い範囲の交流を読み取ることが可能である。

表2 ガラスの種類と推定産地(田村朋美作成)

材 質 分 類	製 作 技 法	生 産 地	
鉛ガラスグループ	鉛バリウム	巻き付け	中国北部
		振り巻き	中国南部
		包み巻き	中国
	鉛	巻き付け	中国
		巻き付け	韓国(百済)→日本
カリガラスグループ	中アルミナ	引き伸ばし・包み巻き・加熱貫入	南アジア
	高アルミナ	引き伸ばし	北ベトナム～中国南部
ソーダガラスグループ	ナトロン	包み巻き/連珠	地中海
		巻き付け(リング)	不明
		包み巻き	不明
		包み巻き・連珠	不明
	高アルミナ	引き伸ばし	南アジア・東南アジア
		引き伸ばし・包み巻き・連珠	南アジア・東南アジア
	植物灰	包み巻き	中東～中央アジア
		引き伸ばし・連珠・加熱貫入	中東～中央アジア
		変則的引き伸ばし	中東～中央アジア
	ナトロン主体	引き伸ばし	南アジア・東南アジア
	プロト 高アルミナ	引き伸ばし	南アジア・東南アジア
		連珠	不明
加熱貫入		不明	

さて、漢代に併行する時期において、漢の中心部はIPBをほぼ必要としていなかったが、外縁といえる地域で需要があり、前述した嶺南地方の他に、漢が衛氏朝鮮を滅ぼして設置した楽浪郡で多くの出土していた。楽浪郡は日本列島と関係の深いため、本研究では北朝鮮によって発掘された漢墓出土資料のほか、戦前に発掘されて東京大学の所蔵されている楽浪郡治の資料の観察を行った。理化学的分析に関しては、本研究では、2014年度にAR(AutoRadiography)分析を試みたが、芳しい結果は得られなかった。その後、2015年度に柳瀬和也らが蛍光X分析行っており、これを参考にした成果を述べたい。

まず、楽浪漢墓では前漢後期(前1世紀、弥生時代中期後半)にガラス小玉を入手しており、分析データはないものの、紺色が多くと引き伸ばしによるものとみられる外観をもつことから、IPBを中心としていたことがわかる。また、ゴールドサンドウィッチ・ガラスの小玉(GSB)もこの段階に入っている。GSBはソーダガラスのうちナトロンガラスで生産されたものならば地中海東部で生産されたものである。

楽浪郡治の資料は、後漢初頭(前1世紀初頭)を中心とするものであるが、漢墓とは若干異なるガラスが出土している。特に不透明赤色のいわゆるムティサラと呼ばれる小玉は現時点で漢墓からは報告されていない。ソーダガラスを主としながら、カリガラスが混じるという分析結果が出されている。日本列島でもムティサラは弥生時代では集落から出土するが墓には入らない傾向がある。

カリガラスで多くみられるコバルト着色の紺色ガラスについては日本列島のものと一致すると報告されており、銅着色の淡青色ガラスも概ね一致する。従って、日本列島にないものも多く含まれるものの、日本列島へのガラスの中継地点として楽浪郡はふさわしいといえる。ただし、考古学的にみた場合、楽浪郡治のガラス小玉は孔付近が強く丸まるという形状をしており、日本列島や朝鮮半島南部の IPB とは若干形状が異なる。単純に楽浪郡に来ていたガラス小玉がそのまま日本列島に流通するという状況ではないようである。

②. ベトナムのガラス

ハノイの国立歴史博物館で 2016 年度に前漢代のドンソン文化のガラス、後漢代の漢墓出土ガラス、ベトナム南部のサーフィン文化のガラスの計 63 点を分析した。小型塊状耳飾などはソーダガラスなどで製作された可能性があるが、当該地域で流通した IPB の多くが、高アルミナタイプのカリガラスに帰属する。

日本列島出土のカリガラスは材質と色調の間に明確な相関があるが、本研究で分析したベトナムの資料は、材質と着色剤の組み合わせがバリエーションに富む。青色系統が多いが、着色剤の銅原料の特徴が日本列島出土品とは異なるものが大半で、黄緑色半透明や紫色透明など日本列島では例外的にしか出現しない種類も多い。低アルミナのカリガラスも少量ながら確認されたが、赤色不透明やアクアマリン青色などが多く、日本列島で主体的なコバルト着色の紺色 IPB に一致する資料は稀であった。その中で、ベトナム南部ビンディン省のサーフィン文化に属するダン・クエン (Đông Cuôm) 遺跡には、高アルミナタイプの銅で着色された淡青色ガラスが 5 点あり、日本のものと一致した。田村朋美の他の調査ではやはりベトナム南部のサーフィン文化で低アルミナタイプの紺色ガラスが比較的日本のものに近いという。

ベトナム北部の事例を増やす必要があるが、南部で日本列島の二種類のカリガラスに一致或いは近似するものがある点は注目されよう。ただし、引き伸ばしという製作技法でも一致するものの、ベトナム以外でも東南アジアからインドの IPB は色調にバラエティが多く、日本列島や朝鮮半島でよくみる淡青色と紺色がどのように選択され、もたらされたのかについてはさらに検討を深める必要がある。

③. モンゴル高原の匈奴墓と鮮卑墓のガラス

モンゴルにおいては 2017 年度にモンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所、2018 年度にモンゴル国立博物館とウランバートル大学で調査を行った。大部分が匈奴墓から出土したものであり、前 1 世紀～後 1 世紀の資料である。鮮卑のものは 2 世紀頃と考えられる。

モンゴル北部のフブスブル県ノフティーン・アムではソーダガラスの GSB が出土し、アルハンガイ県でもシルバー・サンドウィッチガラス (SSB) や紺色のガラス小玉が副葬されていた。これらは全て連珠法で製作されたものであり、地中海東部で生産されたナトロンガラスであった。ところが、単于か王に類する階層の墳墓群と考えられるゴル・モド遺跡では、ナトロンガラスの SSB と紺色の大型小玉、植物灰ガラスの茶色の連珠玉、モザイク玉が副葬されていた。加えて、ローマングラスの中でも優品といえる器類も副葬されている。つまり、ゴル・モド遺跡では複数の産地のガラスが入手されていたといえよう。ゴビ砂漠北縁のバガ・ガズリィン・チョローではイラン高原でよくみられる三角形の茶色ガラスに青色と白色でラインを引いた垂飾が出土している。この三角形垂飾ほかにモザイク玉が出土しており、これらは全てナトロンガラスである。さらに SSB が出土しているが、こちらは植物灰ガラスのほ

か、植物灰とナトロンがミックスされたものが素材となっているようである。ウブス県のザミン・ウトゥグでGSB, SSBともに植物灰ガラスであり、ほかのガラスもほぼ植物灰ガラスで占められていた。ほかの遺跡にみられない特徴であり、墓地を営む集団ごとに交易路が確保されていた可能性も考える。また、少量ながらカリガラスも出土しており、前述のバガ・ガズリィン・チョローでは紫色の小玉が出土し、北部のボルガン県のブルハン・トルゴイからはオレンジ色の小玉が出土している。

鮮卑のガラスについては、オルホン県アイルギン・ゴズゴルでGSBと茶色の樽型のガラス玉が出土している。いずれもナトロンガラスであり、匈奴の交易網がそのまま引き継がれたようである。分析はされていないが、中国東北地方に接するホロンバイル高原でも蘑菇山墓地からGSBが出土しており、広く流通していたことがわかる。

④. 小結

日本列島と朝鮮半島南部ガラス小玉は本研究の分析の結果、IPBが南海路（海のシルクロード）を経て流通していたようである（図1）。また、匈奴へは現時点の分析成果から考えると、漢を通らず、地中海東部と中央アジアからシルクロードを通り、アルタイ脈を北上してもたらされていた可能性が高い。また、南海路に関わる地域にはゴールドサンドウィッチ・グラスはもたらされていないことから、モンゴル高原を経由して楽浪郡までもたらされたようである。このルートは、その後は鮮卑が継承し、楽浪郡が弱体下のちには朝鮮半島南部にまで通じるようになる。後漢の前半期までは楽浪郡が東アジアの交易網の結節点であった点も強調しておきたい。



図1 各地のガラス小玉と交易路(田村朋美の原図に加筆)

(5) 前漢末から後漢における交易と社会変化

前漢末から後漢初頭において、モンゴル高原の匈奴は、西方からのガラスを多量に獲得していたが、それだけでなくローマのプレートなど様々な文物を入手している。政治的には弱体化しているにも関わらず、シルクロード以北の草原の道を開拓していたといえる。前述したようにこれが楽浪郡にまで達している。楽浪郡はこの時期、漢でも富裕層がいたことで知られており、四川産の耳杯、江南の名木を入手していた。もちろん、これまでの分析で述べたように南海路を通じてさらに遠くからインド・パシフィックビーズを入手しており、あらゆる地域の文物を入手していた。こうした存在が朝鮮半島北部に形成されたことは、朝鮮半島南部や日本列島の政体に大きな刺激になってであろうことは想像に難くない。実際に日本列島まで南海路がつながり、IPBが大量に流入している。

こうした動向に碧玉のような国内流通の玉類が影響を受けたかどうかについては、まだ直接の証拠はない。ただし、後期前半は碧玉製管玉自体が西日本で減少し、ガラス小玉を保有する墓が急増する。その後は、朝鮮半島南部の馬韓や弁韓にガラス小玉が多く保有されるようになるため、碧玉製管玉が再増加するものの、ガラスが加わったことで装身具の選択肢が広がった点と新たな交易網が出来た点は無視できない。後期後半の碧玉産地の多様化による交易の複雑化の前段階として、ガラスの交易網の形成が影響している可能性は十分にあるといえよう。弥生時代後期後半は楯築墳丘墓を代表として、西日本全体で急激に階層化が進展する段階であることから、交易網の複雑化がこれを促したとみることも可能ではないだろうか。本研究により、弥生時代後期の社会変化がユーラシア全体の動向に深く関連していたことを、玉類の交易から理化学的分析の裏付けをもって言及できたことを一先ずの成果としてきたい。

5. 寺院資料および古代から探る古代の心性

牧野 淳司

はじめに

古代社会に生きる人々は、何をどのように考え生活していたのであろうか。物事や出来事に対する接し方、感じ方、受け止め方はどのようであったろうか。文学研究、とりわけ古典文学研究は、時代を越えて継承されるものに目を向け、強調する傾向が強い。すなわち、日本古典文学の中には現代にまで継承される日本人の心があり、それを読むことで我々は日本の伝統と文化を知ることができると考えられている。そのような目的で古典文学を読む時は、必然的に現代との共通性に目が向くことになる。「この時代も今と同じように考えていたのだ」とか「現代の我々に通じるところがある」ということを知って安心したり、素晴らしく思ったりするのである。しかし、これでは私たちと感じ方が異なる部分は「よくわからない」と切り捨てられ、無視されてしまう。実際には、古典文学には簡単には共感できない部分がたくさんある。現代との共通性が多いテキスト（共感できる部分が多い、または共感できる部分を発見しやすいテキスト）に目を向けているだけでは見落としてしまうことは多い。これは日本の古典文学を国民が誇る文学として読み、評価する傾向が強かった国民国家の学問としての日本文学研究が持っていた一つの傾向であったと言えよう。しかし、古典文学に向き合うことで人間という存在について、より深い洞察を導き出すためには、現代とは異なる部分（簡単には理解できないよくわからない部分）にこそ、注意していく必要があるのではないか。古代社会における文芸テキストから、人々の「こころ」（心性）を探る研究を実施して、あらためて感じることである。以下では、本研究の概要をいくつかの項目に絞って述べることにする。

1. 寺院資料から探る古代の心性

各地の寺社には膨大な書物・資料が残っているが、数百年の間、読まれないまま埋もれてきたものが多い。仏教学はインド・中国の思想研究と各宗派の教理研究を中心に発展してきたため、古代・中世の寺院資料は一部（各宗派の祖師のテキストなど）を除いて、ほとんど顧みられることは無かった。歴史情報を引き出すには一定の手続きが必要となるため歴史学から注目されることも少なかったし、仏教色が強い文学的読解の対象となることも稀であった。仏教学・日本史学・日本文学、いずれの分野からも忘れられかけていたのである。ところが、20世紀後半から、各地寺社の経蔵調査が本格化し、その成果として作成された目録が公開され、重文・国宝が相次ぐ状況になってきた（醍醐寺文書聖教・金沢文庫保管称名寺聖教など）。これらの寺院資料の調査と研究は、仏教学・思想史学・日本史学・日本文学・芸能史学・美術史学・建築史学など、関係する諸分野の研究者が力を合わせることで進展している。

寺院資料のうち儀礼テキストは文学的研究の対象となる一つである。特に、仏事法会場で読み上げられる願文や表白（法会の開催趣旨を述べたもの）は、神仏に向けて発せられる言葉であり、同時に法会場に参集した人々の心を動かすための言葉でもあったから、文学的修辞が凝らされたものが多い。また、仏の教えを分かり易く説く説経資料には、物語・説話を駆使したものも多い。これらには民衆の

心に訴えかけるための技術が駆使されていると言える。ゆえに、儀礼テキストは唱導（仏の教えを広く説く）資料と言うこともできるが、これらは仏教が人々の心に与えた影響を探るためにきわめて重要である。高度な思想体系を記した先徳・祖師の著作ばかりでなく、法会を通して触れる機会の多かった唱導資料から、人々の心性を追究する試みがなされてもよい。そのような考えから、平安時代末に活動した澄憲や弁暁（いずれも唱導の名手）の唱導資料を通して、古代の心性を追究する研究を行った。その際、『平家物語』という物語テキストを強く意識した。『平家物語』を生み出す原動力の一つが唱導であったと考えられるからである。唱導は『平家物語』という物語に生まれ変わることで、より多くの人々の心をとらえることになった面を持つ。唱導と『平家物語』との関係性を明らかにしつつ、それらから人々の心性を探ることを行ったのである。

以下は、その成果のうち、『平家物語』に描かれる後白河法皇像を軸として古代の心性を考えてみた結果をまとめたものである。『平家物語』諸本のうち、古態を比較的多く留めるとされる延慶本では、後白河法皇は乱世を統治するにふさわしい理想の法皇として描かれる側面を持っている。そして、このような法皇像は唱導を通して生み出されてきた可能性がある。つまり、唱導が生み出した後白河法皇像が『平家物語』へと展開している。物語は国を治めるにふさわしい王の姿を人々に提示した。それは物語としての強大な影響力をもって、人々の心性に作用したはずである。たとえば、人々は物語を通して、乱世にふさわしい王の登場を願う気持ちを持つようになった。国と王のあり方について、どのようなべきかを思考し、理想的な姿を探し求めようとする心性（気持ち）が物語によって作り出されていったと考えてみることができる。なお、本内容については、『明治大学人文科学研究紀要』第84冊（2019年3月）に発表した『『平家物語』と唱導文化との関わりについての総合的研究』をもとにしている。

（1）後白河法皇の心中

延慶本『平家物語』第三本（巻六）は高倉院の死去の記事に続けて、その死を嘆く後白河法皇の姿を描いている。すなわち、法皇が、二条院、高倉宮（以仁王）、新院（高倉院）を次々と亡くしたこと、契り深かった建春門院とも死に別れたこと、近臣の多くを失ったことを述べ、こういった境遇の中、「御心よわく」なり涙も乾かず、何事にも心を慰めることのできない様子が描かれている。その心中については、4代の帝王を子・孫から出したのに、政務を止められて年月を送らなければならないのはなぜかとも語られている。思い通りにならない状況に追い打ちをかけるように高倉院の死に見舞われて悲しみに沈む法皇の姿が描かれている。

ここで注意されるのが、後白河法皇のすぐ近くで活動した東大寺僧で唱導の名手であった弁暁の説経資料である。その「後白河法皇廻向」帖が、近親者を亡くした後白河法皇について述べている。すなわち、二条・六条・高倉・安徳の四代天皇はみな後白河法皇の子であり孫であったが、次々と世を去ってしまった。高松院・建春門院にも先立たれ、身近で召し仕っていた公卿侍臣地下北面も多くは死去してしまったと述べ、大勢の近親者に先立たれて無常を実感し、悲しみを抱いて生きる法皇の姿が述べられている。延慶本『平家物語』に述べられた法皇の心中は、弁暁によってすでに語られていたものであった。

弁暁の資料を考慮すると、物語の後白河法皇像は、おそらく以下のような流れで作られていったと考

えられる。そもそも、高倉院を失った際の後白河法皇の悲しみは周囲の人々に洩らされたであろう。あるいは、法皇の様子から周囲の人々が推し量った部分もあるかもしれない。弁暁はそのような法皇の気持ちや姿を見聞きすることができる立場にいた。そして弁暁は、法会場で、法皇の様子と心の内（悲しみ）を語ってみせた。法会に参列した人々は、弁暁の言葉で法皇の心中を理解したはずである。法会場で語られる言葉によって、弁暁が語る後白河法皇像が世間に広まっていく。『平家物語』の語り手は、このようにして共有された後白河法皇像を引き継いでいるのではないか。悲しみを抱き、無常を実感しながら生きる物語の法皇像は、唱導を出発点として生み出されていったと考えてみたい。物語により人々は、「死」という厳しい試練に曝されて、弱みを見せる人間的な王の存在を知ることになる。

（２）後白河法皇の仏道修行

延慶本『平家物語』には、悲しみに暮れる後白河法皇像があるのとは別に、熱心に仏道修行に励む法皇の姿も描かれている（第二本（巻三）に語られる法皇御灌頂の物語）。法華経読誦については「七万八千余部」、勤行内容は「両界の万だら・廿五壇の別尊法・三密瑜伽の行法・護摩八千の薫修・光明真言・尊勝だらに・慈救呪・宝篋印・火界真言・千手経・護身結界・十八道・仁王般若・五壇法」などと列挙されている。法皇の勤行内容を一々数え上げ、その修行ぶりを強調しているのである。このような仏道修行にのめり込む法皇の姿も、法会場で唱導により発信された法皇像を継承している。

弁暁の説経資料「後白川院 嵯峨釈迦堂八万部御経供養」帖は、仏教界における後白河法皇の功績を詳細に述べている。東大寺大仏殿と大仏を再興したこと、八万部の法華経を読誦したことに触れ、他国にも類を見ない空前絶後の功德であると称讃しているが、勤行内容は「法花護摩一万三百五十五座・日数八千四百八十ヶ日・法花懺法の御読誦一万一千五百卅卷・阿弥陀経御転読十六万六千九百六十六卷・百万遍御念仏二百餘度・諸尊護摩御供養法・率都婆造立・千手経御読誦・毎月御修法・或千日講御打聞」と列挙されている。老齢に到り体が弱っていく中、周囲の者が心配するのも聞かず、ますます修行にのめり込んでいく法皇の姿も語られている。

これほどまでに後白河法皇が仏道修行にうちこんだ理由の一つは、戦乱で命を落とす人が多く出たことであつたと思われる。歴史の流れ、周辺のさまざまな事情はあつたが、国を戦渦に巻き込んだ責任は法皇にあつた。亡魂に不安と怖れを感じ、それが浮かばれるように供養を営む法皇の姿も弁暁の唱導資料に描かれている。同時に、法皇は死者の霊魂が悪鬼・怨霊となって禍をなすことをいくつかの手段で阻止しようとした。その一つが、怨霊を寄せ付けぬ力を自分自身で手にすることである。仏道修行はそのために必要とされたのである。弁暁の資料には修行の成果を手にし、四天王寺で本物の釈迦仏のように拝される後白河法皇の姿も描き出している。四天王寺の千僧供養に参列し金堂へ向かう後白河法皇を、人々は釈迦を拝するように拝んだと述べているのである。弁暁は、厳しく困難な仏道修行を成し遂げ、四天王寺でそれを完成させた法皇の姿を、法会で発信していたのである。

このような法皇の姿も『平家物語』の後白河法皇像と響き合う。延慶本『平家物語』第二本「法皇御灌頂事」の章段は、熱心な仏道修行により天魔を克服し、四天王寺で「金剛仏子の法皇」、「即身成仏の玉躰」となる法皇の物語である。延慶本はこの章段で、天魔を寄せ付けぬ真の「法皇」が誕生したことを語っている。

数多くの戦乱が起こる世の中で、唱導者は、仏法を篤く信仰し、仏法の力で国を統治しようとする王

の出現を望んだ。後白河法皇をそのような王として誕生させようとしていたと言えるかもしれない。そのような法皇像が『平家物語』に投影され、そのような物語が人々の間に浸透することで、理想の法皇を求めようとする心性が作られていったと考えてみたい。

(3) 末代衆生を救済する法皇

理想の法皇像を生み出そうとする営みは延暦寺僧で唱導の名手であった澄憲の活動にも確認することができる。金沢文庫保管『釈門秘鑰』には、四天王寺で後白河法皇が逆修を行った時の澄憲の説法が含まれている。この時、法皇は阿弥陀像を造立して供養した。ここで澄憲は、西方極楽世界の阿弥陀如来（本仏）と新たに造立された阿弥陀如来像（新仏）とが顔を合わせ、法皇とこの国の人々を救済する手段を相語らう光景を語ってみせた。これは、世界最初の仏像とされる優填王の梅檀釈迦像（木像仏）が、切利天から釈迦（生身仏）が降りてきた時に、宝階の下に跪いて礼拝し、生身仏と種々の対話をし、衆生の救済を託されたという物語（優填王釈迦造像譚）を踏まえている。木像仏がまるで生きていくかのように動きだし生身の釈迦と対話する場面を語りながら、それと同じように、法皇の造立した仏像も西方の真仏と対話しているであろうと、澄憲は述べてみせているのである。このような語りにより、新造の阿弥陀如来像は単なる仏像ではなくなる。法皇とこの国の衆生を救済する力を持つ生身の仏像が出現するのである。

生きた仏像を生み出す澄憲の営みはさらに進んで、法皇自身を生身の仏とみなすまでに至る。建久2年（1191）8月、後白河法皇は清涼寺に参籠し法華八講を行った。金沢文庫保管『転法輪鈔』「嵯峨清涼寺御八講表白」「八講結願第八座 為聖覚已講草之」では、優填王釈迦造像譚に触れた後、釈尊が優填王像を撫でて滅後の衆生の救済を託したように、今、清涼寺の釈迦像は法皇を撫でて我朝の衆生の救済を託しているだろうと言ってみせている。このような澄憲の言葉により、後白河法皇自身が生身の仏と同等の存在となる。このような乱世の救済者となるような王を希求する心性も物語に継承され、人々に浸透していったのではないか。

以上、後白河法皇をめぐる唱導が物語に影響を与えていること、そこから発生したと想定される心性について述べてきた。だがこのことは、さらに大きな問題へ展開させなければならない。それは、古代において人々は死者にどのように向き合ったか（死者をめぐる心性はどのようなものであったか）ということである。後白河法皇をめぐる唱導と物語の問題が、なぜそのような考察へと接続するのか。そのことを、「鎮魂」という言葉を手掛かりに述べてみたい。

(4) 物語と「鎮魂」

「鎮魂」という言葉は、前近代の文献ではほとんどが鎮魂祭に関わる用例であり、「身体から遊離した、あるいは遊離しようとする靈魂を体内に呼び戻し、鎮めて、生命力を活発にすることで寿命の永続をはかる意」（『日本民俗大辞典』）という意味であったが、近代以降、「死者の靈を慰め鎮めること」

（『日本国語大辞典』「鎮魂」第三項）で用いられることが多くなった。したがって、物語の性質を「鎮魂」という言葉や概念で考察しようとする際には注意が必要だが、物語の研究史において「鎮魂」の概念が重要な役割を果たしてきたことは確かである。このような留保をつけつつ、佐伯真一氏は、研究史において大きく分けて二つの方向性が探究されたとしている。

一つは、死者の立場に立った語り—霊に語らせた上でそれを鎮める形の語り—を想定する方向性である。もう一つは、生者の立場に立った語り—死者の美化や死者への同情などを盛り込むことで死者を慰める語り—を想定する方向性である。ただ、どちらで考えても、現存の『平家物語』を全て説明することはできないと佐伯氏は指摘し、第3の「鎮魂」を考えてみる必要があるとしている。それは、「威圧・説得の鎮魂」である。例として、建久八年（1197）の源親長啓白文があげられている。ここでは清盛が行った南都焼討や法皇幽閉を批判しているが、趣旨は平家批判ではなく、恨みや悲しみを含んだまま戦乱で命を落とした軍兵の霊を鎮めることにある。その方法は、死者達を説得することである。すなわち、平家側で戦ったのは国家に叛く悪事であったのだから、源頼朝に討たれたのはしかたのないことだったと、死者達に死を納得させようとしている。その上で、頼朝体制はその罪を寛大な立場から恕すと宣言することで、怨みの連鎖を断ち切ろうとする。佐伯氏はこのような啓白文の構造は『平家物語』とよく似ていると言う。『平家物語』は清盛を徹底的に批判するが、滅びゆく平家の人々に対しては、滅びを当然のこととしつつもその罪を追及せず、むしろ救済を描いていく。

佐伯氏が指摘する上のような「鎮魂」（威圧・説得の鎮魂）は、現代の心性からは少しずれたところにあるのではないか。それは、「鎮魂」をめぐる研究史上、第3の鎮魂があまり考えてこられなかったことに現れている。『平家物語』が威圧・説得の鎮魂の論理を内包しているとするならば、それは近現代とは異なる古代の心性の一つとして把握していく必要がでてこよう。その際、寺院資料（唱導資料）は有効な導きとなるに違いない。なぜなら、威圧・説得の鎮魂は、唱導で展開された論理に通じると考えるからである。弁暁や澄憲の唱導は、勝者である後白河法皇の立場から繰り広げられた。そこに見られる「鎮魂」の論理が、『平家物語』に影響を与えている可能性は高いと思われる。唱導において、死者（亡魂）にどのように対峙したか、それは物語にどのように吸収されているか、さらに死者への向き合い方という面において、物語は人々の心性にどのような影響を与えたか。こういった問題を追究していくことができるであろう。この問題は、未だ十分に検討しきれていないが、唱導資料と物語の双方を行き来しながら、今後考察を深めていきたいと考えている。

2. 法会の場合と物語から探る古代の心性

明治大学日本古代学研究所では古代の心性を追究することができる可能性を秘めた資料をいくつか購入し、分析を行ってきた。そのような資料の一つが「源氏物語表白」であり、古代学研究所所蔵本は木下長嘯子「うなみ松」の紙背に本表白を写したものとなっている。新出の資料ではないが、両者が表裏に写されている事実は興味深い。「うなみ松」は娘の死を悼んだ文章であるが、『源氏物語』が踏まえられている。これも考え合わせると「源氏物語表白」を含む『源氏物語』の享受により生み出された心性が「うなみ松」執筆の原動力になった可能性があり、『源氏物語』という物語が作り出していった心性を考えていくにはよい資料と言える。

上記問題はまだ十分考察できていないが、それは、「うなみ松」と「源氏物語表白」および『源氏物語』をめぐる心性を考察するに当たって、まずは「源氏物語表白」の性質を明らかにする必要があるためである。本研究期間の最初の2～3年は「源氏物語表白」の注釈的読解を行った。その成果は未発表であるが、歌語・和語・仏教語・漢語を織り交ぜた文体は、諸文芸テキストのジャンルを交差する性質を持っており、平安時代末における新しい文芸テキストの出現として評価することができるのではな

いかと考えている。それと同時に、なぜこのようなテキストが平安時代末から鎌倉時代にかけて登場したか、すなわち「源氏物語表白」を生み出した心性はどのようなものであったか、ということに関心が向かった。『源氏物語』を享受することで、同時代の人々がどのような心性を育んだか（つまり、物語がどのような心性を作り出したか）を追究することができると考えたのである。探究の結果、「源氏物語表白」が体现する心性は、もともと『源氏物語』内に含まれているもので、それが一つの形になって現れたのが表白であり、源氏供養という営みであったと考えるようになった。もともと『源氏物語』に内包されており、表白や源氏供養という形で露わになった心性とは、端的に言えば「結縁」の心性である。このことについて、『古代学研究所紀要』第27号に「御法」の物語としての源氏物語—源氏供養の発生と結縁の心性—というタイトルで成果を掲載したが、以下はその要点を記すものである。

(1)

十二世紀中頃には、『源氏物語』は「古典」となりつつあった。「古典」は実社会に生きる人々の行動規範となり、美的価値の基準となる。人々は人生におけるさまざまな出来事に直面した時、どのように考えるべきか古典から学ぶ。「古典」となった『源氏物語』も一つの「ころ」（心性）を生み出した。源氏供養はその一例と言える。

紫式部が根も葉もないことばかりで好色めいた物語を書いた罪で地獄に堕ちているという説が『今鏡』などに記されるようになり、歌人たちは法華経を一品ずつ手分けして書写し、紫式部を供養した。そのような法会場で用いられたと考えられるのが天台僧澄憲による「源氏一品経供養表白」であった。類似のものとして澄憲の子息である聖覚が書いたとされる「源氏物語表白」がある。これは『源氏物語』の巻名を順に用いながら作成された仮名の表白文で、狂言綺語の誤りをひるがえして紫式部の六趣苦患を救い、源氏物語をもてあそぶ人が安養浄刹に迎えられることを願ったものである。

このような紫式部や源氏物語を供養する行為については、これまで仏教との関係性から論じられることが多かった。この時代、『源氏物語』の存在感が増す一方、仏教の影響力はますます大きくなっていった。そこに狂言綺語観が登場する。これによれば、物語は綺語、雑穢語であるが、仏道に帰依する縁となる。物語は罪であると同時に救済の契機であるとみなされた。紫式部墮地獄説は、紫式部観音化身説（紫式部は実は人々を仏道へ導く観音の化身であるとの説）と同時に登場している。仏教の価値観から物語を位置づけたものとして狂言綺語観があり、それに関係する一資料として源氏表白や源氏供養も取り上げられてきた。単純化して言えば、仏教が強くなる中で、物語を仏道への契機と位置づける必要があり、源氏供養もそのような風潮の中に登場したと考えられている。

だが、果たして源氏供養の登場を人々の心への仏教の浸透という要因のみで説明してよいであろうか。本研究を進めるにつれて、むしろ『源氏物語』自体が源氏供養の登場を生み出す要因を内包していたのではないかと考えるようになった。すなわち、源氏供養を生み出した要因は、物語の外の仏教にのみあったわけではなく、源氏物語内部に含まれていたと考えるのである。この時に重要な言葉となるのが「結縁」である。源氏供養は、紫式部・源氏物語を通して仏法に結縁する行為であり、源氏物語を媒介として法会に参集する人々がお互いに契りを結ぶ行為である。このような「結縁」を重視する心性が『源氏物語』に含まれ、それが『源氏物語』の古典化によって広がっていったと考えてみたい。このような立場からは、「源氏物語表白」は広い意味での源氏物語注釈（『源氏物語』の読み方の一つを示した

もの)とすることができる。そして、源氏供養とその場の表白により、『源氏物語』に由来する一つの心性が十二世紀後半以降の日本社会に広まっていったと見做すことができる。

(2) 「御法」への「結縁」

「結縁」とは、仏法(仏・菩薩、仏の教え、僧侶など)と縁を結ぶことを言うが、そのための重要な場の一つが仏事法会であった。人々は法会に出かけることで仏法に結縁した。その様子をよく示す言葉として「御法」に注目してみた。「御法」とは、広い意味では「仏法」(仏教に関する事柄全般)で、狭く限定すれば仏の教え(仏・法・僧のうち、法すなわち仏教、また教えを記した経巻)を指すと思われるが、用例を拾っていくと、仏事法会の場と深く関係する文脈で用いられている場合を多く確認できる。

『源氏物語』の「御法」の用例は3箇所である。巻名にもなっている御法巻の用例は、

絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを

結びおく契りは絶えじおほかたの残りすくなきみのりなりとも

という贈答の中に出現するが、これは紫の上が催した法華経千部供養の場で、紫の上と花散里により交わされたものである。「御法」に「身」が掛けられて「絶えぬべき身」「残りすくなき身」の意が生じているが、「御法」自体は、法華経千部供養の場そのもの、もしくはそこで説かれた法華経の教説を指している。さらにこの法会で、紫の上と花散里は、「世々」の「契り」を結んだと言っている。つまり、法会(法華経)を媒介として、二人がともに仏法に結縁したというのである。

2例目は藤裏葉巻の用例で、「今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪ゆるしてたまひてよや」とある。ここでは大宮の三回忌の法事を指しており、「御法の縁」は法事の場を共にする内大臣と夕霧の因縁(大宮の子と孫という関係)を意味し、「御法」(法事)の場で「縁」を確認し合い、その「縁」を強固なものにしようとする思いを読み取ることができる。

3例目は有名な蛭巻の物語論の中に出てくるもので、「仏のいとうるはしき心にて説きおきたまへる御法」とある。これは、仏の教説(経典・法文)を指しており、法会の場と直接関係するものではない。ただ、『源氏物語』の3例中、2例が仏事法会の場と関係していることは注意される。

これ以外では、『今鏡』むかしがたり第九に、「御法書き給へりける色紙の色」「御法の料紙」の用例がある。清和天皇女御藤原多美子が清和天皇のために、天皇の手書になる反故を漉きかえして料紙となして法華経を書写し供養したことを述べた場面で、「御法」は法華経(仏の教説)のことである。「御法」は「書く」対象であるが、追善のための書写で、法会で供養されており、ここからも平安時代の人々にとって、「御法」に出会うのに法会が重要であったことが見て取れる。

(3) 和歌の「御法」

和歌のうち、仏事法会に関係して「御法」が使用される例をいくつか拾うことも可能である。『紫式部集』の「妙なりや今日は五月の五日とていつつの巻にあへる御法も」には「三十講の五巻、五月五日なり。今日しもあたりつらむ提婆品を思ふに、阿私仙よりも、この殿の御ためにや、木の実もひろひおかせけむと、思ひやられて」という詞書がある。寛弘5年(1008)に土御門殿で行われた法華三十講の折のものである。「御法」は法華経提婆品に説かれる教えを指しているが、ここには、その経典を講

ずる講師の声があることに注意したい。講師の声により法華經の教説に出会うことができる、そのような法会場に参列し縁を結ぶことができた喜びを詠んだ歌と言えよう。

長保4年(1002)10月に、東三条院詮子追善のため法華八講が行われたが、『公任集』にはそれに先立つ8月に道長邸で行われた法華經二十八品和歌会での和歌が収録されている。

うちのるもさても種をし植ゑつればつひにみのりのむなしからぬを
めづらしくのぶるしたにてみのりをばまことのなかのまことをぞ知る
不軽品と神力品を詠んだもので、やはり法華經講説の場と関係している。

『和泉式部集』には「心にはひとつ御法を思へども虫の声々聞ゆなるかな」との和歌があるが、詞書には「秋頃、尊き事する所に詣でたるに、虫の声々なけば」とある。「ひとつ御法」は一乗の法(法華經)のことを言う。「尊き事する所」は仏事供養や説經などの場と考えてよい。

『後拾遺和歌集』所収の康資王母歌「咲きがたきみのりの花におく露ややがてころもの玉となるらん」には「太皇太后宮五部大乘經供養せさせ給けるに、法華經にあたりける日よめる」とあり、やはり法会場に関係している。

藤原俊成の『長秋詠藻』には六首の用例があるがある。

みなし子となに思けむ世中にかゝる御法のありける物を(譬喩品)
哀れけふ御法の末を聞く事もゆづり置きけるしるしなりけり(喩累品)
ほのかなる雲のあなたの笛の音も聞けば仏の御法なりけり
入りがたく悟りがたしと聞く門を開くは花の御法なりけり(方便品)
誰もこれ憂世のためと生れきてかくは御法を説くところ聞け(法師品)
はかりなく数なき代々をすぐしても一度聞はかたき御法を

「みなし子と」歌と「哀れけふ」歌は、ともに康治年間に待賢門院中納言が催した「法華經廿八品歌結縁」で詠んだものである。「入りがたく」歌と「誰もこれ」歌は、ある人が行った法華經一品經供養の際のものである。4例が仏事法会に関係して詠まれたものである。

これらの他、『高倉院升遷記』の用例も注意される。高倉院の死後、法華堂へ参る場面であるが、「ゆくゑなき知らぬ御法の師なれども君ゆへにこそ道びかれけれ」とある。法華三昧を修する僧を「御法の師」と言っているが、高倉院により「御法」へ導かれたというのである。また、「嗟峨にまいて、涅槃の有様を説きをきけるを聞きて」、詠まれたのが「説きをける御法の跡を聞くほども薪尽きにし夜はぞ恋しき」という和歌で、やはり涅槃会という仏事法会場と関係して「御法」という語が用いられている。

以上からは「御法」がしばしば仏事法会場と結びついていたことが確認できる。直接には仏の教説(とくに『法華經』)を指す場合が多いが、人々はそれに仏事法会場で接したのである。經典・經卷(書かれたもの)の教えは、仏事法会場における声として人々の耳に届いた。講説の場における講師の声は、經文を説いた釈迦の声と重ね合わされたであろう。そして、これらの和歌の根底には、仏事法会場を通して仏法と縁を結んだ悦びがあることを重視したい。和歌を詠む行為は御法への結縁であり、和歌を詠んで送ることは法会場を介してお互いの縁を確認し合うことであった。

(4) 仏事法会と現世での契り

人々が仏事法会の際に足を運んだ目的は、仏法に出会うためであった。だが、それだけではない。周りの人々と仏事法会の際を共有することも重要だったのではないか。人々は同じ場に居合わせることで、お互いの強い因縁（契り）を確認し、来世での救済を願う気持ちを共有し、揃って善処へ導かれることを願ったのであろう。法会を媒介としてお互いの契りを確認し合い、ともによい方向へ導かれようとする心性がたしかに存在したと思われる。

このことを考える上で手掛かりになる論文が佐伯真一氏の「「ひとつはちす」考」である。仏教の教義では本来、恩愛（夫婦・親子の愛執）は断ち切るべきものであったはずである。しかし、日本文学には現世での親密な関係を肯定する表現が登場してくる。例えば近松浄瑠璃などでは、現世で添い遂げることをあきらめ、来世、極楽浄土に生まれ変わろうと誓い合う男女の姿が見られ、我々はそれを違和感なく受け止めている。このように現世での情愛を肯定しつつ、来世での救済も願う態度を示す言葉が「ひとつはちす」であり、佐伯氏はこの言葉に注目して、仏教と文学との間に存在する問題の一断面を追究した。

一般的には「ひとつはちす」という和語は、仏教語の「一蓮托生」から発生したと考えられているが、氏の調査によれば「一蓮托生」の古い用例はなく、漢訳仏典にも出ていない。あるのは氏が〈同行の同蓮〉と呼ぶ考え方で、先に往生した者が現世で同じ修行に励む者達に呼びかけ、その往生を待つあり方（五会法事讃など）である。ただ、これは恋人同士が極楽浄土で「ひとつはちす」の上に生まれ変わろうとする発想（氏は現世における親しさ、近縁関係に基づいて来世を望む考え方を〈縁者の同蓮〉と呼ぶ）とは異なる。問題はこのような発想がどこから出て来たかということである。佐伯氏はそれを「ひとつはちす」という語を通して考察した。

佐伯氏によれば、〈縁者の同蓮〉という発想やそれを表現する「ひとつはちす」の語は、物語世界や和歌世界に登場している。物語の早い例としては『源氏物語』がある。鈴虫巻の「はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき」の和歌がそれで、「ひとつはちす」の語はないが、夫婦が来世を契る発想が確認できる。類例は他にもあり、朝顔巻では藤壺を慕って光源氏が「おなじ蓮に」と願い、若菜下巻では病床の紫の上に光源氏が「契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ある露の心へだつな」と詠み、御法巻では死期の迫る光源氏が紫の上と「後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契りかはし」ていた様子が語られる。つまり、『源氏物語』には、現世で恋人や夫婦、親族などの親しい関係にあったが故に、来世でも一緒にいたいという発想がたしかに見られるのである。

このような発想は和歌世界からもたらされたようで、佐伯氏は『為頼集』の「この世にて契りしことをあらためてはちすのうへの露とむすばん」を挙げている。これには「としごろあひそひたる人なくなりわたるころ、中つかさの宮のははの女御の御もとより」との詞書がある。為頼室が死去したころ、村上天皇女御莊子（為頼の母方の従姉妹）より贈られた歌だと言う。莊子と為頼の現世の縁を「蓮の上」に持ち越そうということで、夫婦ではないが類似の発想が見える。佐伯氏が修辭面で注意するのは『拾遺和歌集』の実方歌「今日よりは露の命も惜しからず蓮の上の玉と契れば」で、「蓮」「露」「契り」といった言葉が出揃っている。このような例に言及しながら佐伯氏は、現世での関係を来世にも保ちたいという素朴な心情が「蓮」「露」「契り」などの修辭に託されていく中で〈縁者の同蓮〉の発想が生まれたと考えた。

ここで本稿の問題意識から佐伯氏が提示した資料を見ると、いくつか共通点があることに気付く。

それは、仏事法会の場合との関係である。鈴虫巻の和歌は、女三の宮の持仏開眼供養の場面で詠まれたものである。法会に先立ち、開眼供養に合わせて供養する經典を準備したことが語られる。「経は、六道の衆生のために六部書かせたまひて、みづからの御持経は、院ぞ御手づから書かせたまひける。これをだにこの世の結縁にて、かたみに導きかはしたまふべき心を願文に作らせたまへり」とある。念持仏の開眼供養に合わせて、法華経六部を書写して供養したのであるが、女三の宮の御持経とするための經典は源氏自身が書写した。なぜそのようなことをしたか。それは、女三の宮のための法華経を書写し仏事を催すことで「この世の結縁」をし、お互いに（極楽浄土へ）導き合おうという願いがあったからである。そのような思いが「願文」に盛り込まれたとある点、注目すべきである。このように法会の準備が進行する中で、「はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき」と、来世には極楽で同じ蓮の台に生まれ変わろうという契りの和歌が詠まれた。さらに興味深い記述は、開眼供養の場面、講師の説経の様子が描写される中にある。「講師のいと尊く事の心を申して、この世にてすぐれたまへる盛りを厭ひ離れたまひて、長き世々に絶ゆまじき御契りを法華経に結びたまふ尊く深きさまをあらはして」とある。講師は、源氏と女三の宮が、未来永劫尽きることのない夫婦の契りを法華経（供養、すなわち仏事）を媒介にして結んだのだと述べている。さきほど、光源氏の思いは願文に盛り込まれたという記述があったが、講師はその趣旨をよく理解し、それを保証する説経を行ったのである。願文と講師の弁説で夫婦の情愛は肯定され、それが仏法へ進む道とされる。このような法会は、まさに契りを交わす場と言える。法会場で「縁者の同蓮」が一般化していったことが想像される。

次に『拾遺和歌集』の実方歌である。哀傷部に収められたその歌は、法会で詠まれたいくつかの歌に続いている。一三三七番歌は「女院御八講」の折のもの、一三三八番歌は天暦の御時、後の宮の追善のための「諷誦」の折のもの、一三三九番歌は普門寺での「経供養」の帰りに詠まれたもの、そして一三三〇番の実方歌の詞書には、「左大将濟時、白河にて、説経せさせ侍けるに」とある。

今日よりは露の命も惜しからず蓮の上の玉と契れば

和歌が法会を契機としていることは明らかで、実方は濟時主催の仏事に出向き、濟時と法会を媒介にして契りを結んだのである。

『為頼集』の「この世にて契りしことをあらためてはちすのうへの露とむすばん」という歌の詞書は「としごろあひそひたる人なくなりわたるころ、中つかさの宮のははの女御の御もとより」となっている。仏事との関係性は明示されないが、贈答の背景には、「としごろあひそひたる人」のための追善の法事があったと予想される。すると「この世にて契りしこと」は法事場での契りを指すのではないか。以上からは、仏事法会がまさに契りの場であったことを知ることができる。このような場が、法会に出かけて仏法と結縁し、そしてお互いに契りを結ぼうという心性を生み出していった。

（５）「御法」の物語

『源氏物語』に描かれる仏事法会をあらためて見直してみる。そこでは、場が集まった人々が、お互いの縁（夫婦の縁を始めとする現世での縁）を確認し合い、来世で共に救済されることを願う（契る）様子がしばしば描かれている。また、断片的ではあるが説経師や願文の言葉も描かれる。そこから分かることは、説経師が現世の縁を大切に考える人々の心情を突き放すのではなく、むしろそれに寄り添い、理解する立場から講説を行っていることである。『源氏物語』には御法の場に結縁し、お互いの契

りを確認し合う人々と、それを肯定し讃える説経師の姿がたしかに描き込まれている。

具体例として、御法巻の一節、紫の上の法華經千部供養の場面を見てみる。ここでは春のうららかな情景の中で執り行われる法会の景気の素晴らしさを描いているが、まるで仏の出現する所であるように感じて、参集した人々は罪が消えるようであるとまで言う。「薪こる賛嘆の声」や「鼓の声」などが響く中、明石の御方との贈答があるが、紫の上は、いつもならさほど目にとまるはずのない人々の顔までも、しみじみと悲しく見渡さずにはいられない。まして日頃から「情をかはしたまふ方々」とは、これで最後になるかと思うと悲しみに沈んでしまう。そのような中で、花散里と「御法」に契りを結ぶ和歌「絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを」が詠まれたのである。御返りは「結びおく契りは絶えじおほかたの残りすくなきみのりなりとも」というものであった。このような場面は、法会の中で現世で出会いともに同じ世を生きた人々への思いが高まっていく様子を描いているといえる。仏事法会が、まさにこの世の縁を確認しあう場であったことをよく示している。必ず別れが訪れるこの世の縁であればこそ、それをいとおしく思い、できることなら来世までも縁を継続したいという思いが、「御法」への結縁となった。

死を前にして執り行われる仏事法会や死者を弔う法事の場面など、物語には仏の教説を説く仏事場面が数多く描かれている。その場に響く「御法」の声は物語にとって重要な音風景である。そして、ここでは、登場人物が法会において「御法」に結縁し、お互いの契りを確認し合う姿を確認することができる。このような人々を描くという意味で、『源氏物語』は「御法」の物語としての一面を持つと言える。

(6) 源氏供養と「御法」の物語

院政期に登場した源氏一品経供養を考える上で、『源氏物語』自体が「御法」の物語としての性格を持つことは見逃せない。源氏供養は、法華經を一品ずつ分担して書写し、時には見返しに源氏絵を描くなどして紫式部を供養する行為である。ここには『源氏物語』をきっかけに、『法華經』という「御法」に結縁して、お互いの契り確かめ合いながら紫式部とともに救済されることを願う人々の姿がある。『源氏物語』が「御法」への結縁とお互いの契りを深める行為のきっかけとなっている。そのような発想は、『源氏物語』に描かれた法会自体の性格に由来するのではないか。物語は、法会による結縁を描く物語としての一面を持っていた。源氏供養は『源氏物語』を「御法」の物語として読んだ人々によって生み出されたのであり、まさに物語に導かれた行為（実践）であった。これにより、『源氏物語』は人々を「御法」（法事・法会）の場へ導く性格を持つ聖典としての姿を鮮明にする。人々を「御法」へ導く力を持つ物語として崇められることになったのである。愛執など現世での縁を仏道へ転換する発想（「ひとつはちす」を生み出した縁者の同縁）の発想は物語がはっきりと提示していたものであった。『源氏物語』という愛語を縁にしてそれに関係する人々の救済を祈る源氏供養の発想は、これと相似形を為す。『源氏物語』に示されていた「結縁」の心性が、源氏供養という営みを生み出し、それがまた「結縁」の心性を世に広めていった。物語が「結縁」の心性を作りだし、世の中に浸透させる力を持っていたのである。

おわりに

寺院資料（なかでも説経資料）から古代の心性を探りつつ、仏事法会の場合と『平家物語』や『源氏物語』が深い関係性を持つことを明らかにしてきた。仏事法会の場合で生み出された心性（死者の霊魂に対し説得・威圧を重んじる心性や、法会の場合で共に仏法に結縁し救済されようとする心性）が物語というテキストを織りなしていき、それが人々の心性にまた大きな影響を与えていく。そのような物語の力が本研究により見えてきた。

6. 『萬葉集』を用いた古代心性研究

山崎 健司

はじめに

文芸テキストとして『萬葉集』を取り上げるに当たり、鎌倉時代の学僧仙覚が校訂した複数の系統にわたる諸本間の関係を明らかにすべく、「萬葉集仙覚本データベース」の作成(1-(1)②参照)を行い、本文の基礎データを整備するとともに、『萬葉集』のテキスト分析を通して心性を探る研究を行った。本項では多岐にわたる研究成果の中から、仙覚本に関する研究成果の一部と、テキスト分析の成果として、類型的表現を讀解することによって得られる古代人の心性と、類型から逸脱した表現やことばの持つ意味を考察した成果を紹介することにしたい。

(1) 仙覚本に関する考察

はじめに

萬葉集の伝来を考えると、鎌倉時代の学僧・仙覚が果たした役割の大きさは、今さら言うまでもない。仙覚は生涯複数回にわたり萬葉集の校訂作業に従事、仙覚が校訂した諸本は大きく寛元本・文永本の名称によって分類される。

寛元本と文永本の違いは文永三年1266書写の奥書によってよく知られている。だが、文永本には数種類が存在し、文永十年1273書写の奥書をもたない文永三年本の西本願寺本(以下略称「西」)のほか、文永十年書写の奥書のある本として、治部丞頼直の正安三年1301書写の奥書をもつ温故堂本(略称「温」)・陽明文庫本(略称「陽」)、寂印の応長元年1311伝授の奥書と成俊の文和二年1353校点の奥書をもつ大矢本(略称「矢」)・京大本(略称「京」)などがあるが、それぞれの系統間における内容の違いについては手掛かりが少なく、従来ほとんど言及されておらず、両者の相違がどこにあるかも含めて検討することには意義があろう。

ここでは、寛元本系統の神宮文庫本(略称「宮」)と文永三年本(西)に対立する配列をもつものとして、新たに確認できた非仙覚本系の廣瀬本(略称「廣」)・紀州本(略称「紀」)と文永十年本の(陽・京)とが一致する巻第八の山部赤人歌四首(一四二五・一四二四・一四二六・一四二七)を取り上げて検討を加え、対立する配列本文の由来について述べてみよう。

①. 巻第八・山部赤人歌四首(一四二四～七)の場合

巻第八の「山部宿祢赤人歌四首」について、Aには国歌大観番号の順に歌を並べる仙覚寛元本系の宮と文永三年本系の西の状況を、Bには前半二首の配列がAとは異なる諸本(非仙覚本の廣・紀と、文永十年本系の陽・京)の状況をそれぞれ示してみよう。なお、AとBの双方に*印を附して、萬葉集の配列を崩して再構成している類の本文と訓の異同箇所を示しておく。

A【宮・西】の配列(原文の引用は西による)

- ④春野余須美礼採采等来師吾曾野乎奈都可之美一夜宿二来(一四二四)
- ⑤足比奇乃山櫻花日並而如是開有者甚戀目夜裳(一四二五)
- ⑥吾勢子尔令見常念之梅花其十方不見雪乃零有者(一四二六)
- ⑦従明日者春菜將採跡標之野尔昨日毛今日毛雪波布利管(一四二七) *毛:類「母」

- 訓 ④ハルノノニスミレツミニトコシワレソノヲナツカシミヒトヨネニケル
 ⑤アシヒキノヤマサクラハナヒナラヘテカクシサケラハイトコヒメヤモ
 ヒナラヘテ：宣「並」ノ左「ヲナメ」。＊類ひをなへて。
 ⑥ワカセコニミセムトオモヒシウメノハナソレトモミエスユキノフレハ
 ウメノ：宣ムメノ。＊類むめの。西ウ〔青〕。
 ⑦アスヨリハワカナツマムトシメシノニキノフモケフモユキハフリツハ
 アスヨリハ：＊類あすからは。

B【廣・紀・陽・京】の配列（引用は京による）

- ⑤足比奇乃山櫻花日並而如是開有者甚恋目夜裳（一四二五）
 ④春野尔須美礼採尔等来師吾曾野乎奈都可之美一夜宿二来（一四二四）
 ⑥吾勢子尔令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者（一四二六）
 ⑦従明日者春菜将採跡標之野尔昨日毛今日毛雪波布利管（一四二七）
 毛：廣紀＊類「母」。

訓 ⑤アシヒキノヤマサクラハナヒナラヘテカクシサケラハイトコヒメヤモ
 ヒナラヘテ：廣ヒヲナメテ。紀ヒヲナヘテ。京漢字ノ左緒ヒヲナヘテノ右ナヘテ。
 ＊類ひをなへて。サケラハ 廣サキテハ「キ」ノ右「ケ」。

- ④ハルノノニスミレツミニトコシワレソノヲナツカシミヒトヨネニケル
 ⑥ワカセコニミセムトオモヒシウメノハナソレトモミエスユキノフレハ
 ウメノ：廣紀ムメノ。陽京（矢）ウ〔青〕。京緒ニテ「ウ」ヲ消シソノ右ニ緒「ム」アリ。
 ＊類むめの。
 ⑦アスヨリハワカナツマムトシメシノニキノフモケフモユキハフリツハ
 アスヨリハ 京漢字ノ左緒アスカラハ ＊類あすからは。

説明の便宜上、歌本文と訓の頭に、歌番号の末尾の数字を丸囲みにして示した。

A・Bともに本文にほとんど異同はなく、訓において非仙覚本（特に類）と京緒が対応し、非仙覚本におけるヒヲナヘ（メ）テが仙覚寛元本からヒナラヘテに、非仙覚本・仙覚寛元本を通じてムメと表記されていたものが仙覚文永三年本以降ウメに、それぞれ交替していく様子が確認できる。

ここで注目すべきは、文永十年本に属する陽・京が非仙覚本の廣や紀（紀は仙覚祖本系に位置付けられる）の配列と一致している点で、仙覚は寛元本から文永三年本まで変えなかった本文の配列を最終的に文永十年本の段階で改めたと考えられる。

この配列については、「一首の冒頭に「春」を示した一四二四を、この四首の冒頭歌としてふさわしい」と指摘する清水克彦氏（「赤人の春雑歌四首について」『萬葉論集第二』桜楓社 1980（初出 1977））や、「来し我れぞ」と、野にやって来た目的を明示する歌が先にくる方が自然」と捉える伊藤博氏（『萬葉集釈注四』集英社 1996）のように、西や宣に見られるAの順が本来の在り方だとする見解がある一方、本文伝来の在りようから「広瀬本や紀州本の配列が原本の順であった」と注に示す『完訳』や『新編全集』があり、原文テキストでは『新校注』が国歌大観番号順を改めたBの形で載せる。Bの配列については、平舘英子氏による内容面からの説明がある（『萬葉歌の主題と意匠』第四章第一節の一、塙書房 1998（初出 1993））。平舘氏は「四首が構成意識に基づくとすれば、「桜」から「梅」へという素材の順が季節の推

移に逆行している点に素朴な疑問が生じる」としつつ、巻第十部立内の配列の在りようもふまえながら「日本古来の「桜」→外来の「梅」の順もありうる」とし、巻第十七の家持と池主の贈答歌群の展開と照応しているという橋本達雄氏の指摘（『山柿、拾穂の論』『大伴家持作品論攷』塙書房 1985（初出 1977））もふまえて⑤から④への一続きの構成を読みとり、この構成が麿や紀など古写本の異伝と一致することを指摘、四首全体としては時間と空間を対比する構成となっており、これを平舘氏は赤人自身によるものと捉えている。

…里人の我に告ぐらく 山辺には桜花散り かほ鳥の間なくしば鳴く 春の野にすみれ
を摘むと 白妙の袖折り返し 紅の赤裳裾引き 少女らは思ひ乱れて 君待つとうら恋
ひすなり…（17 三九七三）池主

この池主の歌における「桜→すみれ」の順は、第一義的には次に示す家持の三九六九を承けたものであろう。

春花の咲ける盛りに 思ふどち手折りかざさず 春の野の繁み飛びくく 鶯の音だに聞
かず 少女らが春菜摘ますと 紅の赤裳の裾の春雨ににほひひづちて 通ふらむ時の盛
りをいたづらに過ぐしやりつれ…（17 三九六九）

を並べてみると、当時病床にいた家持が「春花…／春菜…」と漠然とうたうのに対し、池主は具体的な情景として山辺では桜花が散り、野ではすみれを摘む時期を迎えているとうたって家持を屋外にいざなう。類聚古集の春の部立における掲載順が⑦若菜→⑥梅→⑤桜→④すみれであることを思えば、「桜→すみれ」は季節の推移に素直に従ったまでという見方も成り立つ。

では、春の終盤の摘み草の情景を描くのに際し、池主がわざわざ「すみれ」をとりあげたのは何故か。家持が三九六九で「春菜摘ますと」と詠んだのを承けて、池主が「明日よりは春菜採まむ」と待望する赤人の一四二七を想起、そこから赤人の一連に詠まれていた「すみれ」を持ち込んだ可能性が高い。「すみれを摘む」歌は、萬葉集中、赤人と池主の当該二首以外には見られない。家持の歌が病床で空しい時を過ごしていることを嘆く内容であるのに対し、池主は赤人の歌の「明日よりは」を言外に響かせて、たけなわの「すみれを（春菜として）採む」少女らが家持のお出ましを待ち焦れていると述べ、明日を期して家持を激励するのである。

清水氏や伊藤氏の見解は、連作の冒頭歌としてあるべき姿を重視したものだが、冒頭歌にふさわしいとする根拠はそれぞれ違っていた。④に詠み込まれている「すみれ」は、

山吹の咲きたる野辺のつほすみれこの春の雨に盛りなりけり（8一四四四）

茅花抜く浅茅が原のつほすみれ今盛りなり我が恋ふらくは（8一四四九）

において、春の後半に咲く山吹や茅花と取り合わされていることから、季節の推移を基準に据えたと四首の中では最後尾に置かれてもおかしくない（スミレの語源は形が墨入れに似ていることによると言われ、ツホスミレは墨壺の形に似ることに着目した呼称、スミレとは別種の植物ではない）。実際、歌題別に類聚されている類における春の部立中の順序は⑦→⑥→⑤→④のごとく萬葉のそれとは正反対であり、両氏がそれぞれに説く「連作の冒頭歌としてのあるべき姿」とは、恣意的な考えによっていると言わざるを得ない。

では、Bの配列が赤人の意図を反映した本来のものとした場合、Aの配列はいかにして生じたか。これは清水氏や伊藤氏のような解釈が伝来の過程でなされた結果、改められたことが想定されよう。いま

「伝来」と書いたけれども、赤人の手を離れた後という意味で、早く見積もって巻第八の編纂時であった可能性もある。付言しておく、池主が参照した赤人歌が萬葉集巻第八のそれであった保証はないのである。一方、『新大系』『岩波文庫』（2013刊）が注で指摘するように、『古今集』仮名序の「古注」には④が赤人の代表作として引用されている。一般に連作歌群の冒頭には重きをなす歌を配置する傾向が認められることを思えば、『古今集』仮名序「古注」の著者がすでに④を冒頭に記載した萬葉集のテキストを見ていた場合も想定される。もっとも、萬葉集とは別に赤人歌として伝誦されていたものをふまえて記したとも考えられる。⑦も『和漢朗詠集』や『新古今和歌集』に載っていることから、人口に膾炙した④と⑦を冒頭と末尾に置いて再構成されたということも考えうる。この場合は、『古今集』仮名序「古注」の成立以降、仙覚寛元本までの間に再構成された可能性が高かろう。問題は、『古今集』仮名序の「古注」の施された時期がいつ頃であったかであるが、「古注」においては仮名序の六義の説明に挙げられた例歌に、天曆期に活躍した平兼盛(?~991)の「山桜飽くまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に」があり、遍昭の「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」（古今4二二六「題知らず」）に対して、「嗟峨野にて馬より落ちてよめる」という後世の附会の説をふまえているとみられる詞書が添えられているなど、成立からはやや下った頃の執筆かと思われる点が見られるが、「古注」がすべて同時期に同一人物によって記されている保証はなく（西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本』笠間書院1977によれば、静嘉堂文庫蔵為相本・高野辰之博士本には「古注」がないが六義の例歌は載せているという）、時期の特定は困難である（なお、仮名序の「古注」に対し、藤原公任が真名序に附した「公任注」があり、両者の関係について、別人の作とする説（契沖『古今余材抄』他）と同一人の作とする説（香川景樹『古今和歌集正義』他）がある。また、六義の条に付せられた古注は公任注と密接な関係にあるという小沢正夫『古代歌学の形成』第一編第四章、塙書房1963の指摘もあり、西村加代子『平安後期歌学の研究』和泉書院1997（初出1993・1995）は、仮名序古注の成立は11世紀前半、筆者は公任と断じている）。

ともあれ、寛元本とそれに続く文永三年本の段階において、配列に変更が加えられなかったのは、清水氏や伊藤氏のような理解、もしくは赤人の代表作として④と⑦が首尾を整えるAの形がそれなりに安定感をもって受け入れられ、複数の伝本に継承されていたということを窺わせているが、陽・京において、Bの形に変更されているのは、仙覚がさらなる証本の蒐集と検討を進めていく過程で、廣・紀に見える⑤桜→④すみれの順序に由来を認め、文永十年本（陽・京の祖本）に至ってそれまでの配列を改めたことが考えられる。文永三年本から文永十年本に至る間に仙覚がいかなる本を参照したかは知られていないけれども、このような想定によって、非仙覚本系の廣や非仙覚本で仙覚祖本系に属する紀と配列が一致するテキストを参照していたことが窺える。

②. 文永三年本に対し、文永十年本と非仙覚本とが対立する他の事例

このほか、巻第十・夏雑歌の詠鳥歌群（一九四八・一九五〇・一九四九・一九五一（元・類・廣・西別筆・京【陽は脱落】））、巻第十二・悲別歌群（三一九一・三一九二・三一九〇（紀・陽・京）、三一九〇・三一九二・三一九一（京緒））についても検討を加え、対立する配列本文の由来について考えるところを述べたが、ここでは省略する。本研究では従来とりあげられることが少なかった伝本による配列の異同が、単なる誤りではなく、それぞれの段階において配列の内容を理解したうえで成り立っているとみら

れることを明らかにした。

＊

本研究は、従来の原文テキストにおける本文校訂の在り方や、注釈書等における注釈の在り方そのものを問い直すことにもつながっていくものであり、「萬葉集仙覚本データベース」の成果と併せて、今後この方面の研究を大きく進展させていくことが期待される。

(2) テキスト分析による古代日本人の心性

①. 類型的表現に見る心性

作歌事情が似通った類型的表現は除外したうえで、元の歌の表現を利用しつつ、部立や題詞・左注の記事を通して異なる内容を表現したと判断される作を任意にいくつか取り上げて検討を加える。萬葉集中の類型的表現は類句を有するものだけでも膨大な数にのぼり、ここですべてを論じることはそもそも無理なので、表現の一致の度合いを問わずにさまざまな事例を取り上げてみよう。

A. 雑歌を相聞歌に作り替えた例

まずは先後関係が明白なものから。より新しい例をまず示し、その後に基となった表現を有する歌を掲げる。

1 柔田津に舟乗りせむと聞きしなへ如何そも君が見え来ずあるらむ

(12 三二〇二, 作者不明, 悲別歌)

・ 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎいでな (1 八, 額田王)

2 み吉野の御金の高に 間無くぞ雨は落ると云ふ 時じくぞ雪は落ると云ふ 其の雨の間

無きが如く 彼の雪の時じきが如 間も落ちず吾はそ恋ふる 妹が正香に

(13 三二九三, 作者不明, 相聞)

・ み吉野の耳我の嶺に 時無くそ雪は降りける 間無くそ雨は零りける 其の雪の時無きが

如 其の雨の間無きが如く 隈も落ちず念ひつつぞ来し 其の山道を

(1 二五, 天武天皇御製)

・ み芳野の耳我の山に 時じくそ雪は落ると言ふ 間無くそ雨は落ると言ふ 其の雪の時じ

きが如 其の雨の間無きが如く 隈も落ちず思ひつつぞ来し 其の山道を

(1 二六, 或本歌)

・ 小治田の年魚道の水を 間無くそ人は搦むと云ふ 時じくそ人は飲むと云ふ 搦む人の間

無きが如 飲む人の時じきが如 吾妹子に吾が恋ふらくは已む時も無し

(13 三二六〇, 作者不明, 相聞)

上記の二例は、雑歌を相聞(悲別歌)に作り替えた例。1のもととなった額田王の歌は、よく知られるように、斉明七年661の筑紫西征の途上、斉明天皇が率いる船団に向けて発せられた船出の宣言であり、天皇になり代わって額田王がうたった公的な場面での作である。これに対し、1は「舟乗り」を舟遊びの意で解し、舟遊びに誘っておきながら相手が見せないことを嘆く歌と解釈できそうだが、悲別歌(三一八〇～三二一〇)は端的に言えば「旅の送別の歌と旅中の人を思う歌」(岩波文庫2014)としてのまとまりをなすとみられることから、歌集の文脈としては旅先から船出して帰途に就いた報せを聞きながら帰宅が遅いことを嘆く、家で待つ妻の歌と解釈すべきであろう。悲別歌の定義に即して当初から制

作された歌か、制作の時点では旅の別れとは無関係で、萬葉集編纂の過程で「悲別歌」と解釈されたのかははっきりしないが、いずれにせよ私的な内容をうたっている。「悲別歌」の枠組みを離れ、柔田津で舟遊びをする意で解釈する場合、額田王の歌句を共有する意味は、地名の一致を契機として歴史的な出来事にかかわる額田王の歌句を私的な舟遊びに転用してそのズレを強調するところにある。一方、「悲別歌」として制作されたと考える場合、額田王歌の「熟田津」は斉明天皇西征の折の途中寄航の地であるから、悲別歌の「柔田津」は必ずしも旅先(目的地)ではなく、長旅からの帰途における通過地点の地名としての含みをもたせ、『釈注』が指摘するごとく、「額田王の1八の歌を踏まえ、そのように漕ぎ出したはずなのに、の意を含む」ようにして、共通の歌句をもつに至ったのではないかと考える。

2は天武天皇が吉野入りを回想してうたった御製および本歌との関係が複雑であるが、同じく吉野をうたいながら巻第一の二首の「耳我の嶺(山)」と2の「御金の高(岳)」とで異なっている点に注目すれば、「御金高」がどのような性格をもっているかが重要であろう。この地は『令義解』(僧尼令) 禅行条に「山居在 金嶺」と例に挙げられていることから窺えるように、禅行修道の地として知られる。これによれば、2はこれから山に入る修道僧を詠み手に想定して理解すべきかと思われる。天武の御製が萬葉集の形成過程の最初期(現・巻第一)に収録され、天武の没後、皇位継承の問題が発生するたびに、巻第一の天武御製が人々の意識にのぼり、宮廷内でくりかえしうたわれる中で、吉野入りの悲壮な天武の思いとは無関係に、歌謡がうたわれる集団的な場で地名と本旨を差し替えた「替え歌」が作られていったとみられる。

天武朝の小墾田舞でうたわれた歌謡に基づくものであれば、天武御製と年代的に近接し、先後関係は不明ながら両者に交渉があったことは容易に想定しうる。天武御製と同じ十三句で、異なる主題をうたいながら類似した内容の句を有する事情は、このようであったろう。一方、2の末尾の本旨部分に見られる「正香」は、その人自身を婉曲に指す語。巻第十三に他に二例(三三〇四、三三三三)見えるほかは、笠金村(9一七八七)、大伴俊見(4六九七)、大伴池主(17四〇〇八)という萬葉後期の歌人によって使われている、比較的新しい語であるらしい。しからば、この歌は、吉野入りを背景にもつ天武御製と、愛しい女性への絶え間ない思いをうたう「小治田の年魚道」の歌とをふまえつつ、修道僧が女性に道ならぬ思いを寄せる歌として、両者を念頭において作り替えられたものと解せよう。

以上、雑歌の表現を基に相聞に作り替えられた歌をとりあげ、制作の経緯を考えてみた。少なくとも1と2については、先行する表現の利用で誇張の効果を上げていることが分かる。

B. 相聞歌から雑歌に作り替えた例

3 橋の本に道履む八衢に物をそ念ふ人に知らえず(6一〇二七、豊島采女)

・橋の蔭履む路の八衢に物をそ念ふ妹に相はずして(2一二五、三方沙弥)

3は天平十年八月二十日に右大臣橋諸兄の宅における宴席上、右大弁高橋安麻呂が誦詠した歌で、左注に「右一首、右大弁高橋安麻呂卿語云、故豊嶋采女之作也」とあり、さらに続けて「但、或本云、三方沙弥恋 妻苑臣 作歌。然則豊嶋采女当時当所口 吟此歌 歟」と記す。高橋安麻呂は豊嶋采女の作と紹介したが、三方沙弥の歌の存在を示すことで、豊嶋采女が時と場にふさわしく古歌を手直しし、宴席で披露したことを明らかにしている。

三方沙弥の歌は、園生羽の娘を娶って間もなく、病に臥せて逢えない悩みを歌ったもので、「橋の木蔭を踏んでいく道のように、分かれ分かれのまま、あれこれと思い悩むことだ、あの子に逢わ

ないでいて」の意。一方、諸兄宅の宴席で高橋安麻呂が「人に知らえず」に替えて誦詠した歌の末尾は、「この思いを人に知られることなく」の意となる。『古義』はこの歌全体に対し「暗に誦たがへたるならむ」と指摘するが、第二句の小異はともかく、末尾については采女としての立場から男から女への限定を外す意図をもって替えたのであろう。『総釈』（新村出）が「此歌を高橋虫麻呂が紹介したのは、唯単に前の諸兄の紹介を機縁として、更に同人の歌を出したといふのみでなく、歌中の『橘』が、諸兄の姓を思はせるので、其に因んで座興を添へようとしたのであろう」と述べるように、橘家での宴に掛けて誦むことにより諸兄への謝辞になるとともに、「八衢に」の部分には終宴とともに諸兄邸から別れ別れになって帰路に就く参会者が重ねられているようにも読める。とすると、「人に知らえず」には今日の宴の盛りあがり集うた我々だけのもの、というニュアンスを含んでいるかもしれない。これと似た表現をとるものとして、

4はつゆきはちへにふりしけこひしくのおほかるわれはみつつしのはむ

(20 四四七五, 大原今城)

・あわ雪は千重に零り敷け恋しくのけ永き我は見つつ偲はむ

(10 三二〇二, 冬相聞, 人麻呂歌集略体歌)

があり、これらは内容を異にする元の歌の表現をより多く一致させることによって、宴席で意表を突くことを狙っていたと思われる。

C. 東歌や防人歌に見られる類型的表現

Aかづしかのままのうらみをこぐふねのふなびとさわくなみたつらしも

(14 三三四九) 下総国歌

・風早の三穂の浦廻を榜ぐ舟の船人動く浪立つらしも (7 一二二八) 羈旅作・古集

B①あがおものわすれむしだはくにはふりねにたつくもを見つつしのはせ

(14 三五一五) 未勘国歌

②おもかたのわすれむしだはおほのろにたなびくもを見つつしのはむ

(14 三五二〇) 同右

③あがもてのわすれむしだはつくはねをふりさけみつついもはしのはね

(20 四三六七) 常陸国茨城郡防人・占部小龍

④わがゆきのいきづくしかばあしがらのみねはほくもをみととしのはね

(20 四四二一) 武蔵国都筑郡防人・上丁服部於由

・面影の忘るさざらばあづきなく男じものや恋ひつつ居らむ

(11 二五八〇) 正述心緒・作者不明

Cこひつつもをらむとすれどゆふまやまかくれしきみをおもひかねつも

(14 三四七五) 相聞・未勘国歌

・よしゑやし恋ひじとすれど木綿間山越えにし公が念ほゆらくに

(12 三一九一) 悲別歌・作者不明

ここには東歌・防人歌と、それと共通する表現をもつ他の巻の歌の組み合わせから一部を掲出した。

Aは東歌であるが、東国人が詠んだのではなく、都人が東国人の生活の一齣として捉えたもので、一二二八と同じ角度で詠まれている。Cは旅立つ夫を見送った直後の妻の歌、三一九一はCよりは後の段階

で詠まれた妻の歌、木綿間山の所在は未詳で、ふたつが同じ場所かどうかも定かでないが、旅立つ夫を送ったのちの妻の歌の型があったことを窺わせている。東歌・防人歌も含めていくつもの類歌をもつBは、④を除いて「私の顔を忘れそうなときは」という共通の型をもつ。民謡あるいはすでに流布していた防人歌などで、広く行われていた悲別歌の表現の型を用いて詠じていたことが窺えよう。これらは、これらは創作的要素よりも、旅立ちもしくは旅中の場面に普遍的な内容について、類型に則ってうたう側面がつよい。

従来、陳腐な表現として低く評価されることが多い類型表現であるが、個性を表す場面では誇張や意表を突くことが意図され、集団の場あるいは普遍的な場においては普遍的な心情をうたうのに類型が用いられることが確認できる。かくして、類型的表現が古代日本人の心性を解き明かす上での指標となりうることが示された。

②. 用例群から逸脱した個性的な表現

廿三日依興作歌二首（其の第一首）

春野尔 霞多奈毗伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母（19 四二九〇）

春の野に 霞たなびき うら悲し この暮影に 鶯なくも

天平勝宝五年 753 二月の相伴家持の作で、同じ題詞で統括される第二首ならびに二日後の「廿五日作歌一首」と題される歌とを併せて萬葉集卷第十九の卷末歌群を形成しており、これらは家持生涯の代表作として「春愁三首」あるいは「絶唱三首」と一括して論じられることが多い。

歌に使用されている語の意味は、同じ語の用例群を通して帰納的に理解される一方、用例群を仔細に検討すると、帰納的に説明される意味から逸脱した性格をもつと判断される場合もある。特に、特定の詠み手が同じ語を繰り返し使用する時には以前の使用例をどのように意識しているかを慎重に見極めることによって、微妙なニュアンスの違いや含みをもたせていることが明らかになる。

「春の野に霞たなびきうら悲し」についてみると、四二九〇以外に「春の野」を詠む家持の歌はわずか二例ではあるが、家持の「春の野」には、恋情表現の背景となる傾向が認められる。一方、萬葉歌に詠まれた「霞」について、「景としての霞と、恋情と結びついた霞とに大別される」という高野正美氏の指摘（『春』への愛惜『美夫君志』五十二号、1996・3）があるが、恋情と結びつく例は春・朝という季節や時間帯とかかわりが深い。ここにあらためて家持の四二九〇（⑳）を置いてみると、「春の野にたなびく霞」と「春霞」とは、霞がたなびくところを詠み手が野と意識しているかどうかの相違だけで、実体として両者は異なるものではあり得ない。よって、四二九〇も使用する語彙の次元では、「春霞」と同様、恋情にかかわる余地を残している。次に、萬葉集中「うら悲し」は全六例、うち家持の用例は三例。卷第十五の遣新羅使人歌群の悲別贈答歌（三五八四）や狭野弟上娘子の中臣宅守への贈歌（三七五二）、「相聞」の部立に二首（8 一五〇七、14 三五〇〇）といった具合に男女間の相關的文脈の中で使用されることが多い語だが、家持の三例のうち四二九〇を含む二例は、状況から見るかぎり、男女間のやりとりとは無関係である。しかるに、家持の三例のうちの「四月三日贈 越前判官相伴宿祢池主 霍公鳥歌。不レ勝 感旧之意 述レ懐一首」と題する長歌（19 四一七七）では、隣国越前の掾に転出した池主に向かって、家持が「わが背子と手携はりて」とうたう。この表現について、芳賀紀雄氏は「手携はる」が漢語「携手」に拠ること、さらに「携手」は『毛詩』（邶風・北風）の「恵而好レ我、携レ手同行」に基づき、親

しい友と行動を共にする意とともに男女間のことにも用いられ、家持の表現が恋情的な意味合いを滲ませていると説く（『家持の春愁の歌』『萬葉集における中国文学の受容』塙書房 2003, 初出 1995）。一見、男女間のやりとりとは無関係と思われる四一七七の表現も、恋情表現と無縁ではあり得なかったものであり、その文脈で「うら悲し」を理解すべしということになる。家持における「うら悲し」の初出は「大伴家持攀_二橘花_一贈_二坂上大嬢_一歌」（8一五〇七）、家持の長歌として最初期のものである。この歌は、清らかな月の晩に坂上大嬢に見せようと思っていた庭の橘花を、ホトトギスが明け方のもの悲しいときにやって来ては鳴いて地面に散らすので、仕方なく引き寄せて手折り、吾妹児に贈るという内容。前に引用した池主に贈った霍公鳥の歌も併せて見ると、「うら悲しき」状況下に霍公鳥がやってきてしきりに鳴くさまが描かれている。その「うら悲しき」状況とは、一五〇七では暁の静寂の中であり、四一七七では山には霞がたなびき谿には海石榴が咲く、穏やかな春景が広がる状況である。家持の四一七七を除いたツバキを詠む二例についても、「奥山の八つ峯の椿」（四一五二）、「あしひきの八つ峯の椿」（四四八一）とあり、あらためて四一七七を見ると「八つ峯には霞たなびき 谿へには海石榴花咲き」とあるので、これも谷間に咲く山椿である。四一七七において「うら悲し」き情感の生じる背後にも深閑とした山中の静寂があることは間違いない。そこに霍公鳥が現れ、にわかには騒がしくなる。四二九〇も、霞たなびく春の野の夕景に、ふと気づくと鶯がやって来て鳴いているという構図で、「うら悲し」と感じるまでの静けさと、鳥の声によって生み出されるその後の動的な展開との対照が共通する。このような状況設定の共通点を捉えると、家持にとって「うら悲し」とは、静まりかえった中で内省して懐かれる悲哀感と解せよう。家持以外の「うら悲し」の例と比較して見ると、悲哀の根源に静寂がかかわることも、悲しみを懐いた後に鳥が現れることもなく、家持の三例はかれ独自の特異な用法と言える。

四二九〇においては、春の野の霞たなびく情景と鶯の鳴き声との間に脈絡はなく、霞たなびく情景を「うら悲し」と感じていたところ、いつしか薄暗くなっていて、そこで鶯が鳴いたという構図になっている。その構図は、「この暮影」の指示語コノが作りだしているらしい。夕方以降の時間帯を表す語にコノが上接する例を見ると、指示語コノはそれまでとは何らか異なる状況を認識した時点を指し示す。このことを四二九〇に当てはめると、認識に対応する内容は「霞たなびくさまを「うら悲し」と感じるこの時の家持の心情でしかあり得ない。そのような感じ方の変化にふと気づいた薄暮時の淡い光の中に、鶯の鳴く声が聞こえてくる。鶯の属性から暗くなって鳴くことはほとんどなく、声に導かれてその姿を求めてもすでに見えない。

鶯については、「友鶯」という語が人麻呂歌集略体歌にある。芳賀紀雄氏は「友鶯」の表現について『毛詩』「伐木」によるとし、作者が「伐木」の「鳥鳴くこと嚶嚶たり」の句を、「鳥」を「鶯」とする当時の解釈に沿って取り入れていることを指摘され（『毛詩と萬葉集』前掲『萬葉集における中国文学の受容』初出 1984）、渡瀬昌忠氏は四八首にのぼる万葉集の鶯歌には、すべて友を求める鶯が下敷きになっていると見て大過はない、と言う（『人麻呂歌集略体歌の新世界—「友鶯」と漢文学—』『萬葉歌人論』明治書院 1987）。家持は鶯が友を求めて鳴く鳥であることを人麻呂歌集の友鶯の歌や漢籍を通じて知っていたと思われる。友を求めて薄暗がりの中で鳴く鶯は、越中守から少納言に転じて帰京した後、大納言藤原仲麻呂の下で次第に孤立化していく家持自身の姿に重ねられているように思われる。萬葉集に詠まれた鶯の鳴き声を聞く歌の多くが鶯の生態を視覚的に捉えているのに対し、四二九〇にそれが無いのは、鶯がどこにいるのか分からないものとして表現されているからであろう。家持は薄暗がりの鶯にみずからを投

影することで孤絶の感を深めている。友を求める鶯の声は、恋情を匂わす表現と響き合い、家持の鬱悒を韜晦していると読み取ることができる。

③. ことば・表現への詠み手のこだわりと、ことば・表現の時代的変遷と

廿五日作歌一首

宇良宇良尔 照流春日尔 比婆理安我里 情悲毛 比登里志於母倍婆 (19 四二九二)

うらうらに 照れる春日に ひばりあがり 情悲しも ひとりしおもへば

前項で取り上げた二月二十三日作の四二九〇と上記二十五日作の四二九二とは、ともに大伴家持の作で、春の日差しの中で鳴く鳥の声とそこに抱かれる悲しみとを描くという共通点を持っている。もっとも、両者に共通とは言っても、鳴いている鳥の種類は鶯とヒバリで異なるし、悲しみをうたう際に用いている言葉は「ウラガナシ」と「ココロガナシ」で微妙に違う。本研究はこの点に注目し、家持が「～カナシ」の形状を持つ形容詞を、あえて近い位置に並べて表現した意味を考えてみた。

形容詞カナシには「切ない・つらい」意と「いとしい・可愛い」意の、大別してふたつの用法が知られている。西郷信綱氏によれば、いとしい意の「愛(かな)し」の語は東国の歌の性愛的表現にしか見られないと言い、「同じ恋の歌でも、東歌の方は男女が相寝るといふ方向でうたひ、卷十一・十二は逢へずにつらいといふ方向でうたつてゐる」と指摘している(『万葉の相聞』『萬葉集大成5』平凡社1954)。萬葉集のウラガナシについて、家持のそれは意味の上では「切ない」意で他の歌と大差ないものの、使用する場面設定に注目すると、他の詠み手の歌とは異なる情景を繰り返し描く点で、際立った特徴を持っていた(前項参照)。

そこでウラ～の形をもつ、ウラガナシとウラサビシ(ウラサブ)を例に挙げ、萬葉集と八代集を中心とした平安朝の用例とを比較したところ、平安朝以降の「うら～」においては葉の裏や裾の裏、塩釜の浦や難波の浦など掛詞を伴うものや秋を悲哀の季節と捉える中国的季節観に直結させるものなど、類型的な表現が多くを占めるのに対し、萬葉の用例は浦や葉などの景物や季節とは無関係に、率直に心情を表現している。

率直な悲哀の表現として、～ガナシの形をとる形容詞の例を見ると、前述のウラガナシのほか、モノガナシは萬葉(2例)だけでなく平安朝以降の用例も確認できるが、ココロガナシ(3例)、オモヒガナシ(1例)などは萬葉にしか見られない。しかも、モノガナシは家持と叔母坂上郎女、ココロガナシは大伴旅人・家持父子と遣新羅使、オモヒガナシは遣新羅使というように、家持の周辺で使用されており、家持自身、それぞれの語の微妙なニュアンスの違いを使い分けていたことが察せられる。

残された歌数が多く、制作事情を明らかにする情報に恵まれていることによって可能なことであるが、家持は類似する場面設定では同じ言葉をくり返し用いる傾向が見られるとともに、微妙に異なるニュアンスにもこだわりつつ言葉を選んで使用していることが知られた。春愁歌の四二九〇と四二九二は、まさに家持のそうした特徴がよく現れている作品と言える。

四二九二のココロガナシは、オモヒガナシのように想起された事柄に対する悲しみを言うのではなく、モノガナシのようにはっきりと説明できないような悲しみでもない。四二九〇のウラガナシはモノガナシと近いように捉えがちであるが、家持の場合はこれらとは異なり、静寂の中で内省して抱かれる悲しみをうたう。これに対して、四二九二のヒバリは、鳴くとはうたわれていないけれども、ヒバリの習性

として高く一気に飛び上がり、特徴のある鳴き声を伴っている情景は織り込み済みである。つまり、静寂の中から唐突に鶯が鳴くさまをうたう四二九〇とは逆で、ヒバリのかしましい鳴き声の下で悲しみを感じる家持がいる。しかも夕暮れ時の視覚的にぼんやりとした状況でうたう四二九〇に対して、四二九二はうららかに照っている春の日中に生命力を感じさせるヒバリの姿をはっきり捉えながら抱く悲しみであり、置かれた状況の中で多くの人が抱くであろう明るい方向とは逆の方向に向かっている。前者が内省的だとすれば、後者は外発的ということになる。外発的な要因によって、また通常とは違う捉え方で悲しみを感じるこの意味は、あらためて問われなければならないが、古代萬葉人の抱いた悲しみの表現が、平安朝以降の類型的な表現とは違い、かくも多彩であったことは、萬葉の歌ことばの捉え方とともに記憶にとどめるべきであろう。

IV. 成果の総括と今後の展望

本項では、以上の研究成果を総括するとともに、残された課題や今後の展望を述べる。なお、文中カッコ内の*数字は、Vに掲示した研究業績番号と対応するものである。

1. 研究成果の概要

【日本古代学研究の世界的拠点形成】

明治大学所蔵研究資料群の文化資源化、明治大学所蔵研究資料群に関する研究実践、海外の研究組織・研究者との研究交流の恒常化、の3点に重点を置いた研究活動によって<日本古代学研究の世界的拠点形成>に努めた。そして毎年度、国際学術研究会<交響する古代>（V～IX）を開催してその総合化を図った（*76・77・81・85・87）。

明治大学日本古代学研究HP（<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/>）参照。

【テーマ1～3横断】本学所蔵の研究資料群の文化資源化

1. 学際的・国際的視野に立つ日本古代学研究の拠点形成を目的に、本学所蔵古代学関係資料群（杉原荘介・岡正雄・井上光貞資料）の文化資源化を進めるため、杉原関係資料 5,755、岡関係資料 6,986 コマ、井上関係資料 10,281 コマからなるデジタルデータを生成しサーバー上に搭載し、これとリンクする検索用データを作成し、古代学検索データベースシステムを構築した。そのプロセスと意義についても研究報告した（*51・52）。【達成度 100%】

2. 古代学研究所が保管する古典籍についてデジタル撮影も行き、古代学検索データベースシステム上に古典籍デジタル画像資料を加え、『花鳥芳囀』61 コマ、『源氏物語聞録』483 コマ、『うなみ松』22 コマ、『文殊の本地(梵天国)』44 コマの画像資料を、このシステム上から閲覧可能とした。【達成度 90%】

【テーマ1】「もの」（物資・技術・経済）の研究

1. <東アジア考古遺物の蛍光X線分析・交易圏解析>については、日本・モンゴル・ベトナム各地で分析を行い、日本列島の弥生時代におけるガラス製品の原料がインド・東南アジアに由来することを確認した。しかし、ベトナムでは南アジア一帯と関連する多彩なガラス製品の組成をもっており、直結しないことも判明した。一方、モンゴルの資料分析によって、朝鮮半島から北方草原地帯を経て中央アジア以西にまで広がる物流の実態が把握できた。（*6・57～60・88）【達成度 100%】

2. <「漢委奴國王」金印関連資料の検討>については、従来モノ資料としての検討が十分でなかったことから形態情報の詳細な分析を行った。「漢委奴國王」字形は細部まで後漢前期の特徴をよく示しており、四半世紀あまり遡る王莽代の封泥の文字と比較しても、わずかに新しい特徴が見出せる。従来まったく見過ごされてきた鈕孔も後漢代の特徴をもつと断定できた（*1～5）。また、真贋論争もあることから、公開で両者議論を交わす場を設けて、公正を期した（*80）。【達成度 100%】

3. <杉原荘介資料>については、明治大学博物館所蔵杉原資料の目録作成を終了し、デジタル公開する条件を整えた。杉原が果たした日本考古学界の組織化および、アジアと欧米との研究連携（国際化）についてもその体系化を果たした（*53～56・75・84）。特に2018年5月開催の日本考古学協会創設70周年記念第84回総会で、石川が杉原資料に基づいて同学会設立に関する詳細を記念講演した（*56）。

【達成度 90%】

4. <岡正雄資料>については、目録作成・写真撮影を終了し、デジタル公開する条件を整えた。2015年度に国際シンポジウムを開催し（*78）、同年度内に英文報告書（*43）を発行し、2016年度には欧州の研究者による学術誌レビュー（Antweiler, Christoph 2018 *Antropos* 113, pp. 316-318）が実現した。

また、岡の学位論文の邦訳についても2018年度内に完了した。【達成度 90%】

5. <日本古代学の国際化手法の検討>においては、特に古墳時代・古代（国家形成期）を対象として、日本古代史を世界史になかになら位置づける研究を実践した（*8~10・44・61~67）。そのため、北アメリカとヨーロッパ中部の墳丘墓の現地調査を行って、日本の古墳との比較検討を行い、その特異性を認識した。また、古墳・古代寺院研究に関する講演やワークショップをアメリカ合衆国・イギリス・ドイツで重ね、相互の研究手法をめぐる議論の活性化に努めた（*63~67）。さらに、明治期のお雇い外国人・W. ガウランドが収集した考古資料・調査データ（大英博物館所蔵）の資源化を行った。杉原資料の検討と関連して、杉原荘介が戦後早い段階で欧米の考古学・人類学者との交流を行ったことから、USAで資料調査を行い、交流の実態を確認した（*11・68）。【達成度 80%】

【テーマ2】「こと」（文字・律令・制度・都市）の研究

1. 1次史料の研究のうち<文字瓦>については、データ量が多い武蔵国分寺関係の国分寺瓦を明確にするため、島根県が保管する平塚瓦コレクションにおける武蔵国関係の国分寺瓦の悉皆調査を実施した。その結果は、『古代学研究所紀要』25に報告（*13）し、現在最終報告を準備中である。島根県分の武蔵国分寺瓦の特徴が明らかになったので、武蔵国分寺の文字瓦の全貌を解析する手立てができた。なお、下総国分寺については、『市川市史』歴史編Ⅲ（*46）の第3章第2節3「国華，七重塔」において、研究成果の一部を取り入れることができた。【達成度 90%】

2. 明治大学所蔵「除秘鈔」については、特別協力者である田島公東大史料編纂所教授の積読文があるので、「除秘鈔附の積読作業を研究会方式で行い、成り立ちの研究を継続しながら、現在ほぼ全文の積読が終わった。現在は、2020年度に八木書店から積読文を含め、解説・研究の成果を刊行すべく準備中である。【達成度 90%】

3. 好太王碑（広開土王）の初期石灰拓本（剪装本・全紙本）の積読、解題・解説、研究については、明治大学広開土王碑拓本刊行委員会を組織し、『明治大学図書館蔵高句麗広開土王碑拓本』（八木書店、2019年3月）として刊行した（*47）。第一部「史料編」が[第1章]整紙本（写真版）、[第2章]剪装本（写真版）、[第3章]校訂本文、第二部「論考編」とからなり、吉村武彦と加藤友康が委員として刊行に尽くした。【達成度 100%】

4. 井上光貞『令集解』関係資料群については、文化資源の項で記したように、ホームページにおいて「令集解研究」と「その他資料」として公開の準備を進め、その重要性も喚起した（*83）。現在、「解説」を準備中であり、2019年度中には公開予定である。「東山文庫本令集解」の公開は、公開申請書を提出して折衝中である。井上資料群と関係する「日本古代官制関係研究文献目録」は稿本をホームページで公開済みである。【達成度 90%】

5. 墨書土器データベースについては、科学研究費補助金基盤研究（A）とも分担しつつ、拡充に努めている（古代学研究所HP）。全国墨書土器・刻書土器横断検索データベースのオンライン版（試行版）としては、すでに実績を評価されており、今後も継続的に補充していきたい。文字瓦データベースにつ

いては、平塚瓦コレクションの調査に重点がかかり、当面はこのデータベースを公開できるように努めたい。【達成度 100%】

6. 総括的研究としては、文字使用の問題がある。加藤友康「文字による支配」(『市川市史』歴史編Ⅲ (*46))において地域における文字使用と情報伝達という面の研究を説明した。また、吉村武彦「出土木簡の『歌詞』と『日本書紀』歌謡」は、音仮名の木簡を手がかりとして、『古事記』『書紀』の素材となった「帝紀」「旧辞」研究の再構築を企図したものである (*69)。また、国家の形成過程の古墳時代におけるヤマト王権については、吉村武彦「歴史学から見た古墳時代」(『前方後円墳』岩波書店、2019年5月刊行予定)において、研究成果の一部を提示した (*12)。また、国家成立と密接な関係がある大化改新については、吉村武彦『大化改新を考える』において、研究の現状を示すとともに、今日段階の研究成果を叙述した (*45)。【達成度 90%】

【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究

この部門では、[1]歌・物語などの文芸テキストを用いて古代の心性世界を探究することを中心に研究を進めた。その際、[2]明治大学所蔵資料のいくつかについて基礎的研究を進めてデータベース化し、古代心性研究に活用することを目指した。また、[3]韓国・中国・ベトナムなど東アジア漢文文化圏における文芸テキストを視野に入れて、日本古代の心性を比較文化論的立場から考察することを試みた。以上3つの柱のうち中心となるのは[1]であるが、この主要な内容は以下の5つとなっている。①『万葉集』を用いた古代心性研究、②『古事記』の歌と散文および宮古島に伝わる旧記類と口承神歌から古代心性を探る研究、③『源氏物語』を中心とする平安朝物語文学を用いた心性研究、④『平家物語』と仏事儀礼テキストを用いた心性研究、⑤時代・ジャンルを越えた古代心性研究の可能性の探求で、①～④はプロジェクト・メンバーが個々に研究を進め、それぞれの研究を突き合わせ止揚することを目指して、共同で⑤の研究を行った。以下、[1]の①～⑤、および[2][3]について、その成果を略述する。【達成度 90%】

[1]-①については、『万葉集』仙覚本系統諸本(主に寛元本・文永三年本・文永十年本の3段階の諸本)の比較を可能とする「万葉集仙覚本データベース」を整備する作業を行い、これを完成させた (*22)。また、本文の基礎データを整備する作業と並行して『万葉集』のテキスト分析を通して心性を探る研究を進めた (*18)。具体的には、『万葉集』における類型的表現を精緻に読解することで古代の人々が持つ心性を明らかにできることを示し (*17)、類型を通して作品が生まれる場の実態を解明する試みを、天平二年正月に大宰府で大伴旅人が開催した「梅花の宴」について行った (*19)。また、大伴家持の絶唱とも評される巻十九巻末の春愁歌の表現や歌ことばの持つ意味を追究した (*20・21)。さらに、『万葉集』を中心に上代における漢字の使用について、「咲」の字を譬喩的に使用する例を取り上げて論じた (*49)。

[1]-②については、『古事記』の歌・散文と宮古島の神歌との間を往還しながら研究を実施した。古事記について、「古事記神話の歌と散文」というテーマで、その表現空間を解読し注釈する作業を実施した。『古事記』中巻の神武から応神では、皇位継承の争いに歌が集中することに注目し、従来言われている歌の会話性という機能を見直し、歌がもつ現実性・事実性を指摘した。下巻については、仁徳記の歌と散文について14首の歌に注釈を加えた。そこでは恋の歌のうたい交わしが多くなる点に注目し、歌と散文の文体が人間的な天皇像を確立するために機能することを示した(以上のテキスト注釈作業の成

果は居駒論文（*30~38）。宮古島の神歌の分野では、宮古島市狩俣集落において神歌の調査研究を実施してきた。主たる作業は神歌資料の収集のほか、祭祀と神歌の構造や神歌表現の分析である。継続的聞き取り調査により、夏穂祭りのタービ（祖先の神々を顕彰する神歌）と祖神祭のフサ（神や祖先の事績をうたう神歌）が構造的な関係をもつことなどがわかってきた。また、歌の原初の段階に神々が自ら一人称でうたう叙事歌の存在が想定されることを指摘した。これは神の自叙に文学発生を認める折口信夫の学説を補強する具体的事例として注目される。その他、「宮古島の神と森を考える会」において、宮古島市の祭祀と神歌を復活させる活動を行ってきた。毎年11月にシンポジウムと神歌の実演を行い、近年は参加者が次第に増え、60名を超えるようになった（*39~42・48）。

[1]-③については、『源氏物語』「蛩巻」に記される物語論を通して、物語と古代社会との関係性について考察した（*23）。源氏物語の立后と皇位継承のあり方について、史実を視野に入れて考察した。その結果、史上における立后と皇位継承との密接な関係が物語にも投影されていることを指摘した（*25）。同様に、『うつほ物語』が史上の事件を投影させつつ、物語独自の立坊争いを描くことも明らかにした（*26）。源氏物語の古注釈書『花鳥芳轉』について、全文の翻刻を発表し（*24）、その注釈方針・内容等を検討し結果を報告した（*28）。本書の写本は、岡山大学附属図書館（池田家文庫）のみが知られるが、調査を実施し比較検討した（*29）。平安時代の心性を示す重要な言葉である「心の鬼」について、先行研究では「自らの心を見つめる語」と指摘されるが、『源氏物語』を中心に詳細な分析を行った（*27）。

[1]-④については、表白など仏事儀礼テキストを読解することで、儀礼の場で生み出された心性が『平家物語』に大きな影響を与えていることを明らかにした（*17）。また、「源氏物語表白」の注釈的研究を進め、『源氏物語』が法事の営みを介して仏法へ結縁する場面を描く物語としての側面を持つことを示した。さらに仏事法会研究の立場から『源氏物語』を分析した。『源氏物語』に描かれる仏事場面の分析から、仏教で本来否定されるはずの親子や夫婦の情愛が肯定され、現世での縁を媒介として来世での救済を求める心性が存在することを明らかにした（*15）。このような「結縁」の心性を僧侶は積極的に唱導していたこと、和歌や物語における「御法」という言葉は「結縁」の心性をよく表すことを示した。

『平家物語』について、平安時代・鎌倉時代の仏事法会の場で展開した言説が物語に強く影響を与えていることを明らかにした。後白河法皇をめぐる唱導が『平家物語』という物語を生み出す契機となり、そこに死者の霊に対する古代的心性がうかがえることを示した（*16）。

[1]-⑤については、古代の「こころ」（心性）を追究する際の、着眼点と方法、想定される問題点について、時代とジャンルを越えて議論するために研究集会の場を設け（*86）、この分野について示唆的な研究業績を出している研究者（上野誠・荒木浩）を外から招聘して、個別報告と討論を行った。古代心性研究の課題と方法を示すものとなった（古代学研究所紀要27号：*16・21・27）。

[2]については、研究所で購入した逸名の巻物の解読作業を進めた。読解の結果、本書は木下長嘯子「うなる松」であることが判明した。娘の死を受け止めるための文章が『源氏物語』を踏まえて書かれており、物語が人間の感じ方を左右する力を持つことが分かった。『源氏物語』の注釈書『花鳥芳轉』について、業者（ナカシャクリエイティブ）と幾度か打ち合わせをし、画面構成の提案、書誌データ等を作成した。『源氏物語』の講義録である『源氏物語聞録』（江戸時代）全九冊についても、翻刻修正作業を行った上でテキストデータと合わせて撮影データを作成、それらをデータベースとして公開した。古代学

研究所所蔵「うなみ松」(紙背「源氏物語表白」)、「梵天国」についても、業者と打ち合わせた上で画像データを作成し、データベースとして公開した。明治大学図書館所蔵『除秘抄 付』(仮題)については、解読と釈文作成、および文献学的研究と関連資料の調査を進め、解読作業をほぼ終えた。2019年度中に翻刻見直し作業と解題執筆を進め、2020年度に書籍として刊行する予定である。

〔3〕については、ベトナムにおける古代関係諸資料の予備的調査を行った(2016年8月)。また、日本における古代の「こころ」の性質を東アジアという視座から比較研究するために、韓国漢文小説の研究を進めた(*82)。いくつかの作品について、訓読文と訳文を作成した。2017年度には、研究集会を開いて成果を世に問うとともに(成果は、古代学研究所紀要26号)、韓国の財団から翻訳出版助成金を得て、2019年度の出版を予定している。

2. 優れた成果が上がった点

【日本古代学研究所の世界的拠点形成】

明治大学所蔵研究資料群の文化資源化、明治大学所蔵研究資料群に関する研究実践、海外の研究組織・研究者との研究交流の恒常化による<日本古代学研究所の世界的拠点形成>はおおむね計画通りの成果を上げることができた。

【テーマ1～3横断】本学所蔵の研究資料群の文化資源化

古代学検索データベースシステムを古代学研究所のHPから一般公開し、日本古代学研究所の共通の基盤を形成することができた。これと並行して、この研究資源を対象として、2015年度には国際シンポジウム『Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship』(岡正雄の人類学的学問の形成過程)(*43・78)、2017年度には、井上光貞生誕100周年記念シンポジウム「日本の律令と令集解研究」(*83)、公開シンポジウム「戦後日本考古学と杉原荘介」(*84)などを開催し、杉原荘介・岡正雄・井上光貞3名の学問形成過程をはじめ、学術的評価の検討も進めた。

また、文化資源化の進展状況について、2017年度開催の国際学術研究会『交響する古代Ⅷ』<古代文化資源の国際化とその意義 vol.3>で「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(新大型研究)における統合型検索システムの開発と文化資源化」(*51)、2018年度開催の国際学術研究会『交響する古代Ⅸ』<古代文化資源の国際化とその意義 vol.4>「文化資源の研究資源化と統合型検索システムの開発」(*52)の報告を行ない、システム開発の現状と課題を確認した。

【テーマ1】「もの」(物資・技術・経済)の研究

1. 東アジア考古資料の蛍光X線分析で、西暦紀元前後のアジアにおける雄大な物流の実態が見えてきた。日本列島弥生時代のガラス製品の原料が東南アジアに由来するが直結はせず、中国南部を考慮する重要性が認識された。一方、モンゴルの資料分析によって、朝鮮半島から北方草原地帯を経て中央アジア以西にまで広がる物流の実態が把握できたことは、大きな成果である。研究成果は、2018年度に国際シンポジウムを開催(*88)して相互評価した。

2. 「漢委奴國王」金印研究は従来考古学的な検討が不十分であったが、鈕の形態や印面文字細部の特徴の検討によって後漢初期の特徴をもつと断定できた。この金印については、近年江戸時代贋作説があるが、それが全く成立しえないことを証明した。

3. 杉原荘介資料の検討から、従来不詳であった戦後日本考古学界の組織化の過程が明確になった。そ

れは現在の考古学界の組織・運営の基礎となっていることも注目される。また、日本の考古学者による海外交流の先駆者として杉原を再評価すべきことも可能となった。

4. 岡正雄資料の検討と国際シンポジウムの開催によって、岡正雄が日本民族学の形成と幅広い国際学術交流に果たした役割を再評価すべきことが明らかとなった。

【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究

1. 大学所蔵の広開土王碑拓本((剪装本・全紙本)について、『明治大学図書館蔵高句麗広開土王碑拓本』の刊行は、明治大学所蔵の文化資源を広く学界に提供することに第一の意味がある。しかし、それに留まらず、広開土王碑は4世紀末の日本列島における倭国をめぐる高句麗・百済・新羅との外交関係を記す一級資料である。これまで、重要な史料であるにもかかわらず、原石拓本と初期石灰拓本とを写真で比較することが難しかった。本書によって、正確な釈読文を作成できるツールが提供され、解説と研究を提示したことは、学界に寄与する点大きい。

2. 地域連携として、国府・国分寺が所在する市川市地域の研究に取り組み、『市川市史』歴史編Ⅲ「まつりごとの展開」の刊行に協力することができた。同市史は地域に根ざした市史を目標としており、古代学研究成果を地域に発信できたことは、研究成果の公開・還元という意味でも大きな成果である。

3. 「除秘鈔」「除秘鈔附」は、年中行事に関する「天下の孤本」であり、ほぼ釈読を終えたことは大きな成果である。2019年度は研究を継続させ、2020年度の写真・釈読・研究の刊行をめざしたい。

4. 全国墨書土器・刻書土器横断検索データベースのオンライン版(試行版)は、各地域の埋蔵文化財センター、博物館等で墨書土器の釈読に活用されているので、さらに拡充を強化していきたい。

5. 井上光貞『令集解』関係資料群のデータベースの公開は、古代史学界に寄与するところが大きい。ただし、一部に未完成の部分を残した。

【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究

1. 特に優れた成果として、「萬葉集仙覚本データベース」を挙げることができる。『万葉集』の従来の本文研究では仙覚本系統諸本と非仙覚本系統諸本の対立ばかりが注目され、仙覚本系統諸本間の本文の分析はほとんど行われていない状況であった。しかるに、複数回にわたる仙覚の校訂作業の存在に注目し、仙覚本系統同士を検証すると、仙覚自身の読みの展開を含む伝来間の本文の変遷を捉えることができる。今回完成させたデータベースは、仙覚本系諸本の詳細な本文異同が一覧でき、これにより『万葉集』本文のより精緻な分析が可能になり、『万葉集』研究におけるその意義は非常に大きいといえる。

2. 『源氏物語』研究の成果として、湯淺幸代の研究が著書となった『源氏物語の史的意識と方法』(*50)。本プロジェクトの成果のいくつかを収録し、体系化して示したもので、『源氏物語』研究の新たな重要な一局面を開くものである。

3. 課題となった点

【日本古代学研究の世界的拠点形成】

<日本古代学研究の世界的拠点形成>はおおむね計画通りの成果を上げることができたが、研究期間終了後のデジタル公開システムの維持管理・拡充については、個別プロジェクトでは対応しきれない部分があり、大学を挙げて検討する必要がある。

【テーマ1～3横断】本学所蔵の研究資料群の文化資源化

1. 杉原荘介・岡正雄・井上光貞関係資料の文化資源化について、古代学検索データベースシステムによって、検索項目を指定した画像とテキストデータ検索の一般公開の体制が完了した。しかし、その補訂・維持・管理については、本事業終了後十分な体制を取るうえで課題を残している。

2. 古典籍データについて、画像データと翻刻をリンクしたデータベースとして構築すること、また万葉集データベースも仙覚本の校本データベース残された巻次のデータを追加していくこともこれからの課題である。さらに画像の閲覧にとどまる「源氏物語聞録」「うなみ松」「文珠の本地」に関しても、文化資源の情報化という観点から、引き続きデータベースの構築に取り組むことも必要であろう。

【テーマ1】「もの」(物資・技術・経済)の研究

1. 東アジア考古資料の分析については、蛍光X線分析は大きな成果を上げたが、なお測定サンプル数は限定的である。日本国内および韓国・中国・モンゴル・東南アジアの測定データの蓄積が必要である。

2. 「漢委奴國王」金印研究も、古代中国印の駝鈕と亀鈕の形態的特徴や墓葬における各種印の扱われ方などの詳細研究を要することが明確となった。中国璽印考古学というジャンルの構築を要する。

1・2ともに西暦紀元前後の東アジア世界の歴史動向を具体的資料の分析から再構成する取り組みを継続する必要がある。

3. 日本古代学の国際化および国際比較研究は、本研究の過程でその重要性が認識されるようになったが、それだけに再度、基本情報の収集から徹底することが必要なことが痛感された。

【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究

1. 国分寺文字瓦データベースは、島根県保管の武蔵国分寺平塚運一コレクションの調査は終了したが、武蔵国分寺瓦の総括的研究が完遂できなかった。

2. 井上光貞『令集解』関係資料群のデータベースには、一部に未完成の部分があるので、早急にデータベースを補訂する必要がある。

3. 総括的研究である日本の国家形成と文字の利用については、百済との関係を含め、学界全体の研究課題である。天智・天武朝における律令法の施行、文字の利用法などを含め、天智・天武朝の歴史的意義を明確にし、浄御原令と大宝令との比較研究が必要である。

【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究

時代・ジャンルを越えた古代心性研究の新局面を開くことの難しさを知ることとなった。上記【1】(5)の成果はあるが、個別研究が多く成果を出したのに比して、総合的研究は弱かったと評価せざるを得ない

<自己評価と対応状況>

【日本古代学研究の世界的拠点形成】

<日本古代学研究の世界的拠点形成>に関する研究期間終了後のデジタル公開システムの維持管理・拡充が課題として残ったと自己評価しており、国際日本古代学研究クラスターを2019~20年度の2か年更新を大学に申請して了承を得たので、検討を継続する。

【テーマ1~3横断】本学所蔵の研究資料群の文化資源化

岡正雄・井上光貞・杉原荘介関係資料の文化資源化について、デジタル撮影とサーバー上へ搭載し、これとリンクする検索用データを作成しつつ、年度ごとに既存のデータを点検し修正を施してきた。シ

システム開発について、メタデータ作成の経験をもとに、画像データ取得済み分から検索システムの検討・修正を進め、2016年度までに古代学検索データベースシステムとして構築することができた。さらに古代学研究所が保管する古典籍の各種画像と内容テキストを同時に検索・閲覧できるシステムが必要であると判断し、既存の岡正雄・井上光貞・杉原荘介関係資料と統合した検索システムとするようシステムの改良修正も行った。所期の目的を達成できたと考える。

【テーマ1】「もの」(物資・技術・経済)の研究

ポータブル型蛍光X線分析装置を用いた国内外での分析は、資料所蔵機関との事前の手続き等にかなりの手間を要するが、国内のみならず、ベトナム・モンゴルでの分析を行い、10年前には想定していなかったような東アジアにおける広域にわたる交易の実態が把握できた点は評価してよい。なお測定数の蓄積を図る継続が必須である。

「漢委奴國王」金印研究については、真贋論争もあって学界およびマスコミの関心も高く、報道機関からの取材や講演依頼も少なくない。研究成果の独自性と相まって、一定の外部評価を得ていると自負する。今後一層分析の制度と多角性を担保して研究レベルの向上を図る。

【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究

墨書土器や文字瓦のデータベースは、各都府県の埋蔵文化財センターや博物館において、現実に活用されており、研究成果が実際に有効に機能している。これらは本来、国立の研究機関で行うべき仕事であるが、プロジェクト研究の成果として活用されていくことは評価されて良いと考える。また、各種のデータベースの公表も歴史学・考古学等の人文科学研究に資することが少なくない。最近では、研究論文や調査報告に引用されており、本プロジェクトが社会的に認知されてきたと思われる。東山文庫本『令集解』等の公開については、引き続き努力していきたい。

広開土王碑拓本研究の公刊は研究期間の最後になったが、すでに研究を前進させるツールとして高い評価が寄せられている。4世紀末の日本列島の状況を示す史料は他になく、広開土王碑の研究をめぐることは、日本・韓国・北朝鮮・中国間の「歴史認識」の問題でもあった。比較可能な写真の公開と研究発信は、事実から出発する歴史学・考古学にとって、誰もが共有可能な素材の提示であり、歴史学界のみならず、今後の日朝韓中における共同研究の出発点になると確信する。歴史教育においても必須の研究・教育史料となる。

また、明治大学リバティアカデミーにおいて、「古代学研究の最前線」シリーズを毎年開催してきたが、受講生と懇談することによって、研究の社会的発信については常に考えてきた。今後は、『古代史をひらく』(岩波書店刊)、『新版 古代史の基礎知識(仮)』(角川書店刊)、『7世紀史の研究』(八木書店予定)などの出版というかたちで社会的評価を受けるようにしたい。

【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究

歌や物語など文芸テキストから古代の心性を探る研究はプロジェクトメンバーの個々の研究により大きな成果を挙げた。特に優れた成果としても挙げたが、『源氏物語の史的意識と方法』と題する著書が刊行されたことは、物語研究の場として明治大学が重要な役割を担うことを示している。また、心性研究資料の文化資源化という面でも、重要なデータベースを完成することができた。「萬葉集仙覚本データベース」は萬葉集に関心を持つ者に有用な情報であり、『源氏物語聞録』ほかの古典籍データベースは、古典籍に関心を持つ者の関心を集めている。一方、個々のジャンル・時代を超えた総合的心性研究体制の

構築という面では、メンバー間の連携が不十分であった。それを打開するために、2017年度に外部からの研究者も招聘して研究集会を実施して、一定の効果を挙げたが、まだまだ展開の余地は残されている。東アジアを視野に入れた心性研究については、ベトナムの資料については予備的調査を行うのみとなった。しかし、韓国漢文小説については、3年ほどの間、毎月1回の研究会を継続できた。その成果も出版する予定であり、東アジア心性研究の重要な拠点と認識されるようになっている。

4. 外部（第三者）評価と対応状況

第三者評価は計画したものの経費の問題から実現できなかった。

ただし、研究成果の社会発信として多くの公開シンポジウムを重ねているが、その開催については事前にホームページやダイレクトメールなどで周知を図り、開催した折には会場で専門家および一般の方々の批判や評価をじかにいただいている。しかし、それ自体では第三者に評価内容が分からない問題があるので、今後は参加者アンケートを徹底し、それへの対応情報をHPに掲載するなどによって開示する方策を取りたい。

なお、日本古代学研究は、日本各地の地域の歴史認識と直結しており、地方自治体との連携によって地域住民に研究成果を還元することが外部評価につながる面をもつと考える。

5. 研究期間終了後の展望

【日本古代学研究の世界的拠点形成】

<日本古代学研究の世界的拠点形成>およびデジタル公開システムの維持管理・拡充については、個別プロジェクトでは対応しきれない部分があり、大学内の他セクションと共同して検討する必要がある。

【テーマ1～3横断】本学所蔵の研究資料群の文化資源化

1. 古代学研究所HPを介して一般公開された杉原荘介・岡正雄・井上光貞関係資料については、資料の追加や資料の補訂を要するという課題はあるものの一応の完成を見た。今後は、この資料群を用いた共同研究こそが次に進められるべきであり、その組織化を図る必要がある。

2. もっとも重要なのは、本プロジェクトの課題<日本古代学研究の世界的拠点形成>であり、古代学検索データベースシステムの完成を土台として、これまで実績あるアジア・欧米各地の研究組織・研究者との交流を継続発展させるための課題の検討を行うことが求められている。

3. それをより具体化するために、中国の中国社会科学院・南京大学、韓国の高麗大学校・忠南大学校・慶北大学校、アメリカ合衆国の南カリフォルニア大学など、研究連携機関との重点化と制度化（研究協力協定締結／一部実現済み）を進める計画である。

【テーマ1】「もの」（物資・技術・経済）の研究

1. 蛍光X線分析装置による玉類・ガラス製品の分析は、国内および東アジア各地で測定データを蓄積する必要がることは言うまでもない。科研費研究費の立案実施により実現する。

2. 「漢委奴國王」金印は、もはや金印のみの検討ではなく、中国璽印考古学というジャンルの構築が必要な段階にきている。そのためには中国の研究組織との連携・協力が必須であり、相互交流を通じて、その実現を図る。

3. 日本古代学の国際化プロセスの研究には、日米欧の研究者からの情報収集と資料・データの収集が

必須である。他大学研究者との連携を行いながら、組織的な取り組みができる体制を構築する。

4. 岡正雄に関する取り組みで本研究の重要な成果の一つに、日本民族学形成期の重要業績である岡正雄の学位論文の邦訳がある。邦訳自体はほぼ終了したが、その刊行は物理的に困難であったことから、早い段階での刊行を実現する予定である。

【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究

1. 国分寺文字瓦データベースについては、武蔵国分寺瓦の総括的研究が完遂できなかったため、今後は、科研費の応募を含め、データベースの拡充をはかりたい。

2. 井上光貞『令集解』関係資料群のデータベースには、一部に不備があるようなので、2019年度中に補訂して、公開するデータベースを整備したい。新年度から作業を再開したい。

3. 総括的研究である日本の国家形成と文字の利用については、倭国と百済との関係、天智・天武朝における律令法の施行、文字の利用法などを含め、天智・天武朝の歴史的意義を明確にし、浄御原令と大宝令との比較研究など引き続き研究を進めていきたい。『七世紀史研究(仮称)』の出版企画に結びつけて研究を継続する。

【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究

1. 萬葉集のデータベースについて、科研費の取得を目指し、より充実したものとなるよう拡充を図る。

2. 『除秘鈔』については明治大学図書館と連携し、影印と翻刻の刊行に向けて準備を進めている。2020年12月の刊行に向けて、翻刻を完成させる研究会を継続し、図書館・出版社と連携・調整を行っている。本書は除目作法について他に存在が知られない貴重書であり、刊行が実現すれば、日本史研究・日本文学研究で大きな注目を集める。

3. 韓国漢文小説については、韓国の財団からの助成金を獲得した。2019年度に白帝社から書籍として成果を刊行するために、現在、原稿の最終チェックを行っている。日本で紹介されていない韓国漢文小説の積文と注釈および現代語訳を提供するものであり、前近代社会における人々の心性をアジア規模で研究するための有用な資料を提供することになる。

4. 古代心性研究について、プロジェクト期間中、メンバー間の連携が不十分だった面がある。学内外の研究者と連携して研究会を開催し、実績を積んだ上で科研費などに応募して心性研究を継続していく。

IV. 研究成果一覧

1. 雑誌論文

【テーマ1】「もの」（物資・技術・経済）の研究

- *1: 石川日出志「漢委奴國王」金印的再検討『大衆考古』2015.05（総第023期），江蘇人民出版社有限公司，査読無，pp.51-57，2015年5月
- *2: 石川日出志「漢委奴國王」金印と漢代尺・金属組成の問題『考古学集刊』第11号，明治大学文学部考古学研究室，pp.93-103，査読有，2015年5月22日。
 - ・石川日出志「金印と弥生時代研究—問題提起にかえて—」『古代学研究所紀要』第23号，明治大学日本古代学研究所，pp.99-109，査読無，2015年11月18日。
 - ・鈴木勉・高倉洋彰・大塚紀宜・石川日出志（司会）2015「公開研究会<「漢委奴國王」金印研究の現在>：質疑応答」『古代学研究所紀要』第23号，明治大学日本古代学研究所，pp.145-153，査読無，2015年11月18日。
- *3: 石川日出志「東夷印の中の「漢委奴國王」金印」（黄曉芬・鶴間和幸編）『東アジア古代都市のネットワークを探る—越・中の考古学最前線—』，汲古書院，pp.197-204，査読無，2018年2月26日
- *4: 石川日出志「漢委奴國王」金印の複眼的研究『第5回“弧山証印”西泠印社印学峰会』，和文 pp.1544 - 1551・中文 pp.1552 - 1563，査読無，2017年11月
- *5: 石川日出志「複眼的日本古代学研究—金印をめぐる実践—」『古代学研究所紀要』第28号，明治大学日本古代学研究所，pp.3-25，査読無，2019年3月29日
- *6: 中村大介「楽浪郡以南における鉄とガラスの流通と技術移転」『物質文化』95号，pp.4-19，査読有，2015年
 - ・中村大介・藁科哲男・福辻淳「大和盆地東南部出土の石製玉類の産地同定」『纏向学研究』第4号，桜井市纏向学研究センター，pp.89-115，2016年3月。
 - ・中村「環日本海における石製装身具の変遷」『古代学研究所紀要』第24号，明治大学日本古代学研究所，pp.3-24，査読無，2016年3月。
 - ・藁科哲男・中村大介「ポータブル蛍光X線分析装置を用いた碧玉製玉類の分析」『古代学研究所紀要』第24号，明治大学日本古代学研究所，pp.25-42，査読無，2016年3月。
 - ・中村大介・藁科哲男・忽那敬三「明治大学博物館所蔵の碧玉製玉類の産地同定」『明治大学博物館研究報告』第22号，査読有，2017年3月。
 - ・中村大介「楯築墳丘墓出土玉類の産地同定」『埼玉大学紀要（教養学部）』53巻第1号，pp.113-132，査読無，2018年2月9日
 - ・佐々木憲一・小野寺洋介・尾崎裕妃「茨城県石岡市佐自塚古墳再測量調査報告」『考古学集刊』第11号，明治大学文学部考古学研究室，pp.105-119，査読無，2015年5月
 - ・佐々木憲一・田中裕・岩田薫・阿部芳郎・木村翔・小野寺洋介・尾崎裕妃「茨城県小美玉市塚山古墳発掘調査報告」『古代学研究所紀要』第24号，明治大学日本古代学研究所，pp.43-77，

査読無, 2016年3月.

- *8: 佐々木憲一 “Kofun Era and the State Formation in Japan.” *Routledge Handbook of Premodern Japanese History*, Karl Friday (編), 査読無, Routledge, pp. 68-81, 2017年
- *9: 佐々木憲一 “Social Stratification and the Formation of Mounded Tombs in the Kofun Period of Protohistoric Japan.” *Burial Mounds in Europe and Japan*, edited by Thomas Kopf, Werner Steinhaus and Shin’ya Fukunaga, pp. 87-99, Archaeopress, Oxford. 2018年10月
- *10: 佐々木憲一 Adoption of the Practice of Horse-Riding in Kofun Period Japan: With Special Reference to the Case of the Central Highlands of Japan. *Japanese Journal of Archaeology*, Vol. 6, No. 1, pp. 23-53. (日本考古学協会, 2018年9月)
- *11: 佐々木憲一 「杉原荘介とアメリカ人考古学者との交流」『古代学研究所紀要』第27号, 明治大学日本古代学研究所, pp. 23-36, 査読無, 2019年2月
- ・ 佐々木憲一 「古墳時代考古学による欧米国家論の検証」安斎正人(編)『理論考古学の実践』, 同成社, pp. 81-99, 査読無, 2017年6月5日
- ・ 佐々木憲一 「茨城県行方市大日塚古墳発掘調査報告」『明治大学人文科学研究所紀要』第82冊, pp. 31-77, 査読有, 2018年3月31日
- 【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究
- ・ 加藤友康 「吉田晶氏と日本古代社会論—『日本古代村落史序説』・村落首長制論を中心に—」『歴史科学』220・221, pp. 120 - 132, 査読有, 2015年5月
- ・ 加藤友康 「平安期における鞠智城—9世紀～10世紀の対外関係と「菊池城院」「菊池郡城院」—」『鞠智城東京シンポジウム2015成果報告書 律令国家と西の護り, 鞠智城』, 熊本県教育委員会, pp. 73-90, 査読無, 2016年3月
- ・ 加藤友康 「古代法と「国例」」, 出口雄一・神野潔・十川陽一・山本英貴編『概説日本法制史』弘文堂, pp. 111～114, 査読無, 2018年3月30日
- ・ 加藤友康 「尊経閣文庫所蔵『小右記』解説」(『小右記 9』[『尊経閣善本影印集成』64]), 八木書店, pp. 171-183, 査読無, 2018年11月25日
- ・ 吉村武彦 「「古代史からみた王権論」『日本古墳時代研究の現状と課題』(韓国語版), Zininzin Co.Ltd, 2016年9月
- ・ 吉村武彦 「東アジアにおける日本古代国家形成の諸問題 (覚書)」『日本古代学』第8号, 明治大学日本古代学教育・研究センター, pp. 71-87, 査読無, 2016年3月.
- ・ 吉村武彦 「田中良之の家族論・親族論と古代史学」『骨からみた古代日本の親族・儀礼・社会』, すいれん舎, 査読無, pp. 493-509, 2017年6月
- ・ 吉村武彦 「王権と交通」『日本古代の道路と景観』, 八木書店, pp. 514-519, 査読無, 2017年5月
- ・ 吉村武彦 「大宝田令の復元と『日本書紀』」『明治大学人文科学研究所紀要』80, 明治大学人文科学研究所, 査読有, 2017年3月

- ・吉村武彦「出土木簡の「歌詞」と『日本書紀』歌謡『萬葉』227, 萬葉学会, 査読無, pp. 1-22, 2019年3月
- *12: 吉村武彦「歴史学から見た古墳時代」『前方後円墳』岩波書店, 2019年5月(予定)
- ・川尻秋生「船を操る技術」館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流3, 遺跡と技術』, 吉川弘文館, pp. 300-321, 査読無, 2016年9月
- ・川尻秋生「古代東国の在地社会と仏教—村落寺院・開発・双堂—」『民衆史研究』93号, pp. 31-50, 査読無, 2017年5月
- ・川尻秋生「九世紀における唐制受容の—様相—中世文書様式成立の史的前提—」『日本史研究』667号, 査読有, pp. 1-23, 2018年3月
- ・川尻秋生「使者と文書」新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』勉誠4版, 査読無, pp. 111-127, 2018年1月
- *13: 山路直充・矢越葉子「平塚運一古代瓦コレクション 武蔵国分寺文字瓦の調査—中間報告—」『古代学研究所紀要』第25号, 明治大学日本古代学研究所, pp. 23-95, 2018年3月30日.
- ・井上和人「唐長安城(隋大興城)形制規格復元試論」『条里制・古代都市研究』第32号, pp. 51-72, 査読有, 2017年3月.
- ・井上和人「日本列島古代山城の軍略と王宮・都城」『日本古代学』第9号, 明治大学日本古代学教育・研究センター, pp. 1-33, 査読有, 2017年3月.
- 【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究
- *14: 牧野淳司「表白論の射程—寺社文化圏と世俗社会との交錯—」『アジア 遊学』174号, pp. 128-139, 査読無, 2014年6月
- *15: 牧野淳司「唱導資料から見る堂舎建立と造仏の営み」『説話文学研究』53号, pp. 6-20, 査読有, 2018年8月
- *16: 牧野淳司「「御法」の物語としての源氏物語—源氏供養の発生と結縁の心性—」『古代学研究所紀要』第27号, 明治大学日本古代学研究所, pp. 右25-右35, 査読無, 2019年3月
- ・牧野淳司「『平家物語』と唱導文化との関わりについての総合的研究—後白河法皇をめぐる唱導の観点から—」『明治大学人文科学研究所紀要』第84冊, pp. 1-12(縦), 査読有, 2019年3月
- *17: 山崎健司「萬葉歌の類型的表現における表現性」『文芸研究』第126号, pp. 39-50, 査読有, 2015年3月
- *18: 山崎健司「仙覚本における「読み」の展開—文永三年本と文永十年本の異同をめぐって—」『萬葉』第221号, pp. 24-43, 萬葉学会, 査読有, 2016年3月31日.
- *19: 山崎健司「梅花歌三十二首再読」『萬葉集研究』第36集, 塙書房, pp. 53-82, 招待有, 2016年12月
- *20: 山崎健司「うら悲しき景—大伴家持の春愁歌の表現をめぐって—」『国語と国文学』第94巻第4号, pp. 3-17, 査読有, 2017年4月.
- *21: 山崎健司「萬葉の歌ことばと古代人のこころ—「かなし」をめぐって—」『古代学研究所紀要』第27号, pp. 3-12, 査読無, 2019年2月

- *22: 山崎健司「萬葉集仙覚本データベースの概要と可能性」『古代学研究所紀要』第 28 号, pp. 45-54, 査読無, 2019 年 3 月 29 日
- *23: 湯浅幸代「『源氏物語』 蜩巻の物語論—物語と史書との関わりを中心に—」『明治大学古代学研究所紀要』第 23 号, 明治大学日本古代学研究所, pp. 1-10, 査読無, 2015 年 11 月 18 日.
- *24: 湯浅幸代・関恭平・小滝真弓「明治大学日本古代学研究所所蔵 土肥経平『花鳥芳囀』 解題・翻刻」『明治大学古代学研究所紀要』第 23 号, 明治大学日本古代学研究所, pp. 13-45, 査読無, 2015 年 11 月 18 日.
- ・湯浅幸代「『源氏物語』の注釈書はなぜ思想書となったか」松田浩ほか編『古典文学の常識を疑う』, 勉誠出版, pp. 100-103, 査読無, 2017 年 5 月
- *25: 湯浅幸代「『源氏物語』の立后と皇位継承—史上の立后・立坊例から宇治十帖の世界へ—」『中古文学』第 98 号, 中古文学会, pp. 75-89, 査読有, 2016 年 12 月
- *26: 湯浅幸代「『うつほ物語』国譲巻に見る氏族の論理—「かぐや姫」の見定める「心ざし」と『九条右丞相遺誡』の「一心同志」から—」『日本文学』第 66 巻第 2 号, 日本文学協会, pp. 1-12, 査読有, 2017 年 2 月.
- ・湯浅幸代「『源氏物語』住吉の浜」(鈴木健一編『浜辺の文学史』三弥井書店, pp. 71-87, (査読無), 2017 年 2 月
- ・湯浅幸代「普遍性と親和性—古典文学を学ぶこと—」『文芸研究』132 号, 明治大学文学部, pp. 97-102, 査読無, 2017 年 3 月.
- *27: 湯浅幸代「『源氏物語』の「心の鬼」—「鬼」の表現をめぐる—」『古代学研究所紀要』第 27 号, 明治大学日本古代学研究所, pp. 9-14, 査読無, 2019 年 2 月,
- ・湯浅幸代「物語は離婚と財産分与をどう書いたか」松田浩ほか編『古典文学の常識を疑う II』, 勉誠出版, 頁数未定, 2019 年 5 月刊行予定
- ・湯浅幸代「『源氏物語』住吉の浜」(鈴木健一編『浜辺の文学史』三弥井書店, pp. 71-87, 査読無, 2017 年 2 月
- ・湯浅幸代「『源氏物語』の注釈書はなぜ思想書となったか」松田浩ほか編『古典文学の常識を疑う』, 勉誠出版, pp. 100-103, 査読無, 2017 年 5 月
- *28: 湯浅幸代「江戸中期の源氏物語注釈書・土肥経平『花鳥芳囀』について—明治大学日本古代学研究所所蔵本の紹介とその位置づけから—」(原岡文子・河添房江編)『源氏物語煌めくことばの世界 II』翰林書房, pp. 675-695, 査読無, 2018 年 4 月
- *29: 湯浅幸代・関恭平・上村茉由「明治大学日本古代学研究所」所蔵土肥経平『花鳥芳囀』校異表—池田家文庫本との比較—」『古代学研究所紀要』第 28 号, pp. 1-16, 査読無, 2019 年 3 月
- *30: 居駒永幸「出雲・日向神話の歌と散文—歌の叙事による表現世界とその注釈—」(『明治大学人文科学研究所紀要』第 74 号, 2016. 3)
- ・居駒永幸「神武記の久米歌と散文—天つ神御子説話の方法とその注釈—」『明治大学経営学部人文科学論集』第 63 号, 2017 年 3 月
- *31: 居駒永幸「記・紀の歌のヴァリエント—異伝注記を通して—」『古代文学』第 56 号, 査読

無, 2017年3月

- *32: 居駒永幸「神武記の立后と謀反—歌と散文の方法とその注釈—」『明治大学教養論集』第529号, pp. 1-2, 査読無6, 2017年9月30日
- *33: 居駒永幸「景行記の歌と散文(I)—表現空間の解読と注釈—」『明治大学教養論集』第532号, pp. 101-151, 査読無, 2018年3月31日
- *34: 居駒永幸「景行記の歌と散文(II)—表現空間の解読と注釈—」『明治大学教養論集』第534号, 査読無, pp. 111-123, 2018年9月30日
- *35: 居駒永幸「仁徳記の歌と散文(I)—表現空間の解読と注釈—」『明治大学教養論集』第537号, pp. 69-104, 査読無, 2018年12月25日
- *36: 居駒永幸「仁徳記の歌と散文(II)—表現空間の解読と注釈—」『明治大学教養論集』第539号, 査読無, 2019年3月
- *37: 居駒永幸「崇神・仲哀記の歌と散文—表現空間の解読と注釈—」『明治大学経営学部人文科学論集』第65号, 2019年3月
- *38: 居駒永幸「応神記の歌と散文」『明治大学人文科学研究所紀要』第78号, 査読有, 2019年3月
- *39: 居駒永幸「仲屋まぶなりと多良間大司の悲劇—史書とアヤゴと伝説のあいだ—」『海の宮』第10号, 査読無, 2015年9月
- *40: 居駒永幸「宮古島狩俣のウヤガン祭マトガヤーと神歌—「マトガヤー」と「タラマウプツカサ」—」『明治大学教養論集』第516号, 査読無, 2016年3月
- *41: 居駒永幸「宮古島の二つの壺」『海の宮』第12号, 査読無, 2016年11月
- *42: 居駒永幸「魂のゆくえ—柳田国男と谷川健一—」『海の宮』第16号, 査読無, 2018年12月

2. 図書

【テーマ1】「もの」(物資・技術・経済)の研究

- *43: ISHIKAWA Hideshi, Josef KREINER, SASAKI Ken' ichi, YOSHIMURA Takehiko (eds.) 2016 *Proceedings of the International Symposium on ORIGINS OF OKA MASAO'S ANTHROPOLOGICAL SCHOLARSHIP*. Meiji University, November 27, 2015. Bonn, Bier'sche Verlagsanstalt. (239pages). (国際シンポジウム「岡正雄の人類学的学問の形成過程」報告書(全文英語・要旨・引用文献のみ日本語))
- ・佐々木憲一(編著)『霞ヶ浦の前方後円墳』明治大学文学部考古学研究室・六一書房, 2018年2月28日
- *44: 佐々木憲一(Mark E. Byington, Martin Baleと共編著, 佐々木2番目) *Early Korea-Japan Interactions*, 共編, Korea Institute, Harvard University刊, 査読有, 佐々木担当は pp. 10-14, pp. 271-371, 2018年5月

【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究

- ・吉村武彦『蘇我氏の古代』, 全276頁, 岩波書店, 2015年12月18日
- *45 吉村武彦『大化改新を考える』1-244頁, 岩波新書, 2018年

- *46: 吉村武彦・加藤友康他 (共編著)『市川市史 歴史編Ⅲ』市川市, 2019年1月
- *47: 吉村武彦・加藤友康他 (共編著)『明治大学図書館所蔵 高句麗広開土王碑拓本』八木書店, 2019年3月
- ・井上和人『日本古代の都市と条里』(共著) 条里制・古代都市研究会編, 2015年4月, 吉川弘文館.
- ・鈴木靖民・川尻秋生・鐘江宏之編『日本古代の運河と水上交通』全458頁(川尻秋生「古代の運河と交通」pp. 3-24), 八木書店, 2015年5月.
- ・川尻秋生『古代の東国2 飛鳥・奈良時代』, 吉川弘文館, 総266頁, 2017年2月
- 【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究
- *48: 古橋信孝・居駒永幸編『古代歌謡とは何か』笠間書院, 2015年2月
- ・金山秋男編『日本人の魂の古層』全192頁(居駒永幸「魂の還る処—民俗学者, 谷川健一さんとの対話」pp. 49-88), 明治大学出版会, 2016年3月.
- *49: 村里好俊編著, 山崎健司, 半藤英明, 五島慶一ほか全10名, 『女性・ことば・表象—ジェンダー論の地平—』, 大阪教育図書, 全267頁(山崎健司「萬葉歌の女性表現としての「ゑむ」 「ゑまふ」をめぐって」pp. 1-30), 2017年9月
- *50: 湯淺幸代『源氏物語の史的意識と方法』新典社, 全398頁, 2018年1月

3. 学会等発表

【テーマ1～3横断】本学所蔵の研究資料群の文化資源化

- *51: 加藤友康「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(新大型研究)による統合型検索システムの開発・と文化資源化」, <交響する古代Ⅷ>, 明治大学古代学研究所・明治大学大学院文学研究科主催, 明治大学AC2階A4・5会議室, 2017年12月1日
- *52: 加藤友康「文化資源の研究資源化と統合型検索システムの開発」国際学術研究会<交響する古代Ⅸ>, (於: 明治大学駿河台キャンパス・グローバルホール), 2019年1月12日
- 【テーマ1】「もの」(物資・技術・経済)の研究
- ・石川日出志「漢委奴國王」金印と漢～魏晋代の古印」, 第5回高麗大学校・明治大学国際学術会議, 高麗大学校 BK21Plus 韓国語文学未来人材育成事業団・韓国史学未来人材育成事業団・明治大学大学院文学研究科, 於: 韓国・高麗大学校韓国学館, 2015年9月11日
- *53: 石川日出志「Post-WWII Japanese Archaeology and the Founding of the Japanese Archaeological Association in 1948」(世界考古学会議第8回京都大会 WAC8 公開講演会), 同志社大学室町キャンパス, 2016年8月28日
- *54: 石川日出志「日本考古学界の組織化と共同研究」<公開シンポジウム<戦後日本考古学と杉原荘介>, 明治大学日本古代学研究所, (於: L1123教室), 2017年11月11日
- ・石川日出志「漢委奴國王」金印研究の到達点」<東北アジア考古学研究会月例会>, (於: 東京大学法文学部1号館3階316教室), 2017年11月15日
- *55: 石川日出志「杉原荘介と中韓考古学交流」<交響する古代Ⅷ>, 明治大学古代学研究所・明治大学大学院文学研究科主催, (於: AC2階, A4・5会議室), 2017年11月30日

- ・石川日出志「漢委奴國王」金印駝鈕再加工説を評価する」＜古代における日中交流＞明治大学・中国社会科学院学術交流会，（於：明治大学グローバルフロント・グローバルホール），2018年3月21日
- *56：石川日出志「日本考古学協会の設立と初期の活動」＜第84回日本考古学協会総会70周年記13公開講演会＞，於：明治大学・リバティホール，2018年5月26日
- ・石川日出志「漢委奴國王」金印からみた東アジア社会」＜古代研国際シンポジウム＜社会変化とユーラシア東西交易—考古学と分析科学からのアプローチ—＞＞，於：明大L1011教室，2019年2月23日
- *57：中村大介 ‘Trade route of the glass beads around the Yellow Sea from 1st century BCE to 3rd century CE’，15th international conference of the European Assn of Southeast Asia Archaeologists(E u r A S E A A,)，2015年7月6-10日.
- ・藁科哲男・中村大介・福辻淳「纏向遺跡出土の石製装身具の産地同定」（日本文化財化学会第33回大会），奈良大学，2016年6月4日
- *58：TAMURA Tomomi, NAKAMURA Daisuke, EREGZEN Gelegdorj, Archaeometrical Approach to Glass Beads Trade in the Xiongnu Period, Eighth Worldwide Conference of the SEAA, Nanjing University International Convention Center, 10th of June, 2018.
- *59：中村大介「青銅器時代から匈奴時代における遊牧社会の長距離交易」＜古代研国際シンポジウム＜社会変化とユーラシア東西交易—考古学と分析科学からのアプローチ—＞＞，（於：明大L1011教室），2019年2月23日
- *60：中村大介・田村朋美「漢代における草原と海上のガラス交易」＜復旦大学東アジア考古学講演会＞（招待講演），復旦大学博物館（中国・上海），2019年3月25日.
- *61：佐々木憲一 “Introduction of a Practice of Horse-Riding in Fifth-Century Japan and its Political Significance.” アメリカ考古学会 Society for American Archaeology, 第80回総会での発表（於サンフランシスコ）2015年4月16日，
- *62：佐々木憲一 “Regional Difference in Elite Symbolism during Kofun Period Japan.”（第8回世界考古学会議WAC8），同志社大学，2016年8月29日.
- *63：佐々木憲一 “Archaeological Investigations into the Omuro Cairn and Earthen Mound Group, Central Highlands of Japan (5th to 7th Centuries A.D.).” アメリカ合衆国ペンシルベニア大学，2016年10月3日
- *64：佐々木憲一「State Formation in Japan: A View from Eastern Periphery」，＜Asian Archaeology Seminar＞，ハーヴァード大学人類学研究科・東アジア言語文明学研究科共催，アメリカ合衆国ハーヴァード大学CGIS地下1階，2017年6月22日
- *65：佐々木憲一「Distributing the “Standard” of Mound Construction to Local Elites as an Example of Inalienable Wealth」，＜第2回European Association for East Asian Art and Archaeology＞，スイス連邦チューリッヒ大学，2017年8月25日
- *66：佐々木憲一「Periodization in Japanese Archaeology: Case of the Yayoi-Kofun transition」＜European Association for Japanese Studies＞，ポルトガル・リスボン新

大学, 2017年9月1日

*67: 佐々木憲一「Center and Periphery in the Early State Formation in Japan」<Roundtable Discussion: Archaeology and the Early Japanese State>, プリンストン大学考古美術史学科・東アジア学科共催, プリンストン大学, 2017年10月12日

*68: 佐々木憲一(明治大学文学部教授)「杉原荘介の北アメリカ研究者との交流」<交響する古代Ⅷ>, 明治大学古代学研究所・明治大学大学院文学研究科主催, (於: AC2階, A4・5会議室), 2017年11月30日

【テーマ2】「こと」(文字・律令・制度・都市)の研究

・吉村武彦「日本歴史学における時代区分の問題」, <European Association for Japanese Studies>ヨーロッパ日本学会, ポルトガル・リスボン新大学, 2017年9月2日

・吉村武彦「倭国の政治的・文化的発展と百済・高句麗」明治大学・高麗大学校学術交流研究会, 明治大学, グローバルフロント, 2017年11月10日

・吉村武彦「井上光貞の令集解研究」井上光貞生誕100周年記念シンポジウム<日本の律令と令集解研究>, 日本古代学研究所, 明治大学グローバルホール, 2017年9月30日

・吉村武彦「大化改新と社会生活の改革—愚俗の改廃—」<中国社会科学院・明治大学学術交流>, 明治大学大学院・文学部共催, 明治大学グローバルホール, 2018年3月21日

*69: 吉村武彦「出土木簡の「歌詞」と『日本書紀』歌謡」第71回萬葉学会全国大会, 熊本市国際交流会館ホール, 2018年10月27日

・吉村武彦「歌木簡と旧辞論の再構築」国際学術研究会<交響する古代Ⅸ>, (於: 明治大学駿河台キャンパス・グローバルホール), 2019年1月12日

・山路直充「『香取の海』をめぐる郡家と寺院・神社の造営」史学会例会 シンポジウム「古代東国の地方官衙と寺院」, (於: 東京大学), 2015年9月.

・加藤友康「古事談における古記録の抄録—貴族たちが共有した「世界」—」, 国際日本文化研究センター共同研究「説話文学と歴史史料の間に」2015年度第6回研究会報告, (於: 国際日本文化研究センター), 2016年3月5日.

・加藤友康「古事談の情報源—古記録が筆録した情報と「言談」への変容の検討を通して考える—」(国際日本文化研究センター共同研究「説話文学と歴史史料の間に」2016年度第3回研究会報告), 国際日本文化研究センター, 2016年9月11日

・加藤友康「平安時代とは(コメント)」, <European Association for Japanese Studies>ヨーロッパ日本学会, ポルトガル・リスボン新大学, 2017年9月2日

・加藤友康「東アジアのなかの平安文化」, <南京大学歴史学院“考古名家講壇”第11期>, 南京大学歴史学院主催, 南京大学仙林校区: 仙I-108教室, 2017年11月2日

・川尻秋生「古代東国の在地社会と仏教」(民衆史研究会2016年度大会シンポジウム), 早稲田大学, 2016年11月27日

・川尻秋生「九世紀における唐制受容の—様相—中世文書様式成立の史的的前提—」2017年日本史研究会大会(個別報告), 2017年9月14日(土), 京都学園大学

【テーマ3】「こころ」(文芸・心性)の研究

- ・牧野淳司「唱導における翻訳の想像力」(The 2nd East Asian Translation Studies Conference), 明治大学, 2016年7月10日
- ・牧野淳司「平安時代後期の日本仏教と高麗」(第7回明治大学・高麗大学校国際学術会議), 韓国・高麗大学校, 2016年9月7日
- ・牧野淳司「唱導資料から見る堂舎建立と造仏の営み」, 説話文学会大会, 名古屋大学, 2017年6月24日
- ・牧野淳司「安居院澄憲の唱導と西国の仏法興隆」, 公開研究会<靈驗寺院の書物と言説—西国三十三所霊場を中心に>, 紀州地域学共同研究会+和歌山大学地域活性化総合センター紀州経済史文化史研究所共同主催, 四天王寺大学, 2017年10月1日
- ・牧野淳司「僧侶による説経の隆盛と平家物語の誕生」, 研究集会<The Take of Heike and other warrior tales:a a Japanese epic?>, パリ・ディドロ大学, 2017年10月19, 20日
- ・牧野淳司「源氏物語注釈の諸相」, 国際学術研究会<交響する古代VIII—古代文化資源の国際化とその意義 Vol. 3—>, 明治大学古代学研究所主催, (明治大学), 2017年12月1日
- ・牧野淳司「仏事と物語・和歌—「御法」の文学の意義—」, 研究集会<文芸テキストから探る古代社会の“こころ”>, 明治大学古代学研究所主催, 明治大学, 2018年3月11日
- ・牧野淳司「日本中世の唱導における女性の問題—澄憲の『法華経釈』の検討—」第9回明治大学・高麗大学校国際学術会議, 韓国高麗大学校, 2018年9月6日
- ・牧野淳司「日本中世における女性と仏教—唱導の言説とその評価をめぐって—」USC-Meiji University Research Exchange in Japanese Historical Studies, 2018年11月2日, USC
- *70: 山崎健司「萬葉集仙覚本データベースの概要と可能性」, 国際学術研究会<交響する古代IX>, (於, 明治大学グローバルホール), 2019年1月13日
- ・湯浅幸代「『竹取物語』の英訳比較—かぐや姫の描き方を中心に—」(The 2nd East Asian Translation Studies conference), 明治大学, 2016年7月10日
- ・湯浅幸代「江戸中期における源氏物語注釈書・土肥経平『花鳥芳囀』について」国際学術研究会<交響する古代VIII—古代文化資源の国際化とその意義 Vol. 3>, 明治大学日本古代学研究所, 明治大学, 2017年12月1日
- ・湯浅幸代「『源氏物語』にみえる「心の鬼」考」明治大学日本古代学研究所研究集会<文芸テキストから探る古代社会の“こころ”>, 明治大学, 2018年3月11日
- *71: 居駒永幸「歌の原初へ」<宮古島市宮国, 宮古島の神と森を考える会シンポジウム>, 2015年11月22日
- *72: 居駒永幸「宮古島の神歌とは何か」, 公開講演会『宮古島の神々の世界—神と人と海・森—』<琉球を相対化するもうひとつのオキナワ>, 明治大学リバティホール, 2016年4月16日
- *73: 居駒永幸「宮古島の祭祀・神歌—古層の2季観—」<宮古島市新里, 宮古伝承文化シンポジウム>, 2017年11月26日
- *74: 居駒永幸「琉球からみた太陽の信仰と文学」, 浜松市, 2019年3月26日

4. シンポジウム・公開研究会等の実施状況

【2014年度】

- *75 : (1) 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「日本古代学研究の世界的拠点形成」採択記念シンポジウム『明治大学の文化資源と岡正雄・杉原荘介・井上光貞』, (於:明治大学リバティータワー3階・1031教室), 2014年11月22日(土)
 - ・石川日出志(明治大学文学部・研究代表)「杉原荘介と日本考古学界」
 - ・吉村武彦(明治大学文学部・研究所長)「井上光貞の律令法研究」
- *76 : (2) 文部科学省・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業・明治大学大学院文学研究科・明治大学日本古代学教育・研究センター・明治大学研究クラスター・国際共同研究プロジェクト 共催国際学術研究会『交響する古代V—日本古代学研究の国際展開—』, (於:明治大学グローバルフロント・グローバルホール), 2015年2月27日・28日

□基調講演

石川日出志(明治大学)「考古学者 杉原荘介—日本考古学の組織化と国際化」

□報告

中村大介(埼玉大学)「楽浪郡存続期の交易と競合」

川尻秋生(早稲田大学)「出土文字資料からみた総武河口論」

Jason P. Webb (USA・南カリフォルニア大学)「『文華秀麗集』における「梵門」詩の検討」

鄭雨峰(大韓民国・高麗大学)「朝鮮通信使朴安期と江戸知識人の交流について」

沈慶昊(大韓民国・高麗大学)「三国遺事と偈頌, 詩歌, 讚」

山崎健司(明治大学)「萬葉歌における類型的表現」

湯浅幸代(明治大学)「『源氏物語』蛭巻の物語論」

春成秀爾(国立歴史民俗博物館名誉教授)「楯築墳丘墓から箸墓古墳へ—龍神祭祀からたどる—」

Robert F. Wittkamp (ドイツ・関西大学)「英語圏における万葉集の注釈本—Jan L. Piersonの「Manyosu」とAlexander Vovinの「Manyoshu」: 紹介, 比較, 批判」

神野志隆光(明治大学大学院)「テキストがあらしめた「古代」・「歴史」・「歌」—方法として」

黄正建(中華人民共和国・中国社会科学院)「唐代訴訟文書の格式—辞, 牒, 状を中心として」

陳登武(中華民国・台湾師範大学)「敦煌出土「文明判集残巻」の法律と社会の問題」

□大学院生セッション

土井翔平(明治大学大学院生)「東日本における弥生・古墳時代移行期の墓制の変遷」

五十嵐基善(明治大学大学院生)「古代日本の軍事施設について—対外防衛問題と対蝦夷問題—」

桜田真理絵(明治大学大学院生)「「後宮」の形成とその意義」

小滝真弓(明治大学大学院生)「『浜松中納言物語』における転生譚の基底—弥勒信仰との関わりから—」

【2015年度】

- *77 : (1) 明治大学大学院文学研究科・明治大学研究クラスター・日本古代学研究所・明治大学
日本古代学教育・研究センター共催国際学術研究会『交響する古代VI—古代文化資源の国際化とその意義—』(於:明治大学グローバルフロント多目的室), 2016年1月20・21日
- ・石川日出志(基調講演)「座談会<日本民族の起源>1948 とその後の日本考古学」
 - ・牧野淳司(研究発表)「源氏物語表白と院政期の文化状況」
 - ・佐々木憲一(研究発表)「在外日本考古資料の資源化」
- *78 : (2) 明治大学日本古代学研究所主催<岡正雄シンポジウム“Origins of Oka Masao’s Anthropological Scholarship”>(於:明治大学グローバルフロント・グローバルホール), 2015年11月27日.
- ・石川日出志(趣旨説明), 佐々木憲一(司会)
 - ・中生勝美: Clyde Kluckhorn: Political position and his tactics for applied anthropology in U.S.
 - ・Wolfgang Marschall: The Viennese roots of Oka Masao.
 - ・Andreas Schirmer: Korean students in Europe related to Oka Masao: Direct and indirect connections.
 - ・全京秀: Why GHQ brought Oka Masao’s dissertation from Vienna to Tokyo?
 - ・Sepp Linhart: From a myriad of gods to one single almighty god belief: Oka Masao meets Wilhelm Schimidt and Wilhelm Koppers.
 - ・Hans Dieter Olschleger: Oka Masao and Alexander Slawik: Mutual Influences between Japanese and German-speaking ethnologies.
 - ・角南聡一郎: Oka Masao’s Study for Material Culture.
 - ・中村大介: Oka Masao and Sea People.
- (3) 文部科学省・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業, 明治大学大学院主催: 公開研究会『日本民族起源論と岡正雄』, (明治大学リバティータワー1086 教室), 2015年7月10日
- ・石川日出志(講演)「岡正雄学説を考古学者はどう受け止めたか」
- (4) 文部科学省・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究の世界的拠点形成」公開研究会『伊勢神宮・出雲大社の遷宮をめぐって』, (於:明治大学リバティータワー1021 教室), 2015年9月26日
- ・吉村武彦(コーディネーター)

【2016年度】

- *79 : (1) 2016年4月16日(土) 13:30~16:30, 講演会『宮古島の神々の世界—神と人と海・森—<琉球を相対化するもうひとつのオキナワ>』, (主催:明治大学日本古代学研究所, 共催:宮古島の神と森を考える会・宮古伝承文化研究所, 後援:毎日新聞社), 於:リバティータワー
- ・講演:居駒永幸(明治大学経営学部・教授)「宮古島の神歌とは何か」
 - ・ビデオ報告:佐渡山安公(宮古伝承文化研究所 所長)「宮古島の神々の世界」
 - ・対談:居駒永幸・佐渡山安公「神と人と海・森~祭祀のゆくえ~」

□写真展：2016年4月9日（土）～16日（土）／場所：明治大学駿河台キャンパス・アカデミーコモン1階展示スペース）

*80：（2）2016年12月3日（土）13:30～17:00、公開シンポジウム「ふたたび「漢委奴國王」金印を語る」、（主催／明治大学日本古代学研究所）、於：リバティタワー1階 1012教室

- ・石川日出志（明治大学文学部） 開会あいさつ・趣旨説明
- ・石川日出志（明治大学文学部）「金印「漢委奴國王」の字形」
- ・大塚紀宜（福岡市経済観光文化局）「古代中国駝鈕印の形態的属性による検討」
- ・本田浩二郎（福岡市博物館）「漢委奴國王」金印一鈕孔に関する視点」
- ・コメント：鈴木勉（NPO工芸文化研究所理事長）・三浦佑之（立正大学文学部）
- ・討議

*81：（3）2017年1月13日（金）・1月14日（土）10:00～17:00、国際学術研究会『交響する古代Ⅶ—全体テーマ：古代文化資源の国際化とその意義 vol.2—』、（共催：明治大学大学院文学研究科・文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業・明治大学国際日本古代学研究クラスター・明治大学日本古代学教育研究センター、後援：明治大学国際連携本部）、明治大学 グローバルフロント 1F 多目的室

□院生発表

- ・関恭平（明治大学大学院）『源氏物語』蜻蛉卷薫独詠歌について—「荻の葉に露ふきむすぶ秋風」を起点として—」
- ・ジリアン・バーント（USA・USC）「大学寮と勸学院：平安時代の教育を中心に」
- ・桜田眞理絵（明治大学大学院）「女帝「不婚」と「未婚」のあいだ」
- ・坂口彩夏（明治大学大学院）「皇位継承の変化と臨朝称制—持統天皇の即位・譲位前史—」

□報告

- ・及川 穰（島根大学法文学部准教授）・佐々木憲一（明治大学文学部教授）「資料学的アプローチによる北米の在外考古資料の資源化：近代化過程の分析と超克」
- ・牧野淳司（明治大学文学部教授）「源氏物語表白の文化史的研究」
- ・カール・フライデー（埼玉大学人文社会科学部研究科教授）「武士研究の研究史のなかでの日本と外国の相互作用」
- ・鄭雨峰（大韓民国・高麗大学校教授）「箴言集『呻吟語』の東アジアの伝播と受容について」
- ・中村成里（明治大学商学部専任講師）『栄花物語』巻二五の検討—後伏見天皇筆栄花物語切を端緒として—」
- ・植田 麦（明治大学政治経済学部専任講師）『古事記』における名と称の表現—大物主神を中心に—」
- ・小口雅史（法政大学文学部教授）「在欧敦煌吐魯番文書の調査成果とその文化資源化」
- ・久米雅雄（大阪芸術大学客員教授・寧楽美術館評議員）「アジア印章史の研究と方法論と印章文化資源の国際化—寧楽美術館所蔵古璽印等の印学的研究と海外での公表と刊行—」
- ・ジャンネット・グッドウィン（USC 東アジア研究センター）「近代以前日本史研究における共同研究と協力関係」

- ・鈴木卓治（国立歴史民俗博物館）「正倉院文書歴博複製資料の自在閲覧システムの開発とその展開」
- ・加藤友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）「日本古代における文書整理の営為」
- ・吉村武彦（明治大学名誉教授）「大宝令の復元と『令集解』『日本書紀』データベース—大宝田令の復元を通じて—」
- ・石川日出志（明治大学文学部教授）「二つの金印—「漢委奴國王」と「親魏倭王」—」

【2017年度】

*82 : (1) 2017年7月30日(日) 13:00~17:30, 『韓国愛情伝奇小説の世界—翻訳紹介の意義と研究の展望—』, (主催: 明治大学日本古代学研究所), 於: グローバルフロント2階4021教室

- ・日向一雅（明治大学名誉教授）「開会の辞：日本で韓国漢文小説を読むことについて」
- ・金孝珍（明治大学兼任講師）「『周生伝』に見える西湖世界」
- ・朴知恵（明治大学大学院博士後期課程）「『崔陟伝』の紹介と研究の展望—日韓の文学作品における戦争・仏教・女—」
- ・野崎充彦（大阪市立大学教授）「倭乱文学としての〈崔陟伝〉の位相」
- ・太田陽介（攻玉社就学高等学校教諭）「『王郎返魂伝』の諸問題—研究の展望—」
- ・李興淑（明治大学兼任講師）「『英英伝』の主人公の滑稽・色好み・知性をめぐって—日韓比較文学の観点から—」
- ・千葉仁美（明治大学大学院博士後期課程）「『憑虚子訪花録』のとその性格」
- ・講演：鄭雨峰（大韓民国・高麗大学校教授）「一七世紀小説史と日記の関係」
- ・講演：小峯和明（立命館大学名誉教授）「崔致遠の物語」
- ・全体討論, コメンテーター: 染谷智幸（茨城キリスト教大学教授）

（『古代学研究所紀要』第26号, 2018年6月8日）

- ・牧野淳司「韓国愛情伝奇小説の世界—翻訳紹介の意義と研究の展望—」, pp. 3 - 4
- ・野崎充彦「倭乱文学の位相—「崔陟伝」はどこに位置するか—」, pp. 5 - 22
- ・金孝珍「『周生伝』に見える西湖世界」, pp. 23 - 34
- ・朴知恵「『崔陟伝』紹介—韓国における先行研究を踏まえて—」, pp. 35 - 56
- ・鄭雨峰「17世紀朝鮮における日記文学と小説の関係」, pp. 57 - 66
- ・李興淑「『英英伝』における主人公の滑稽と色好みについて」, pp. 67 - 73
- ・千葉仁美「『憑虚子訪花録』の紹介—男女主人公の可変・不可変—」, pp. 75 - 80
- ・太田陽介「『王郎返魂伝』の諸問題—研究の展望—」, pp. 81 - 91
- ・小峯和明「崔致遠の物語」, pp. 93 - 99
- ・染谷智幸「両界曼荼羅としての『九雲夢』・『謝氏南征記』—南宗王の換局政治と、それに対する巖・愛の二法—」, pp. 101 - 110

*83 : (2) 2017年9月30日(土)13:00~17:30, 井上光貞生誕100周年記念シンポジウム『日本の律令と令集解研究』, (主催: 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究所の世界的拠点形成」・日本古代学研究所), 於: グローバルホール

- ・吉村武彦（明治大学名誉教授）「井上光貞の令集解研究」
- ・武井紀子（弘前大学）「律令制研究と井上光貞」
- ・黄 正建（中華人民共和国・中国社会科学院）「天聖令と令集解研究」
- ・大津 透（東京大学）「令集解研究の現代的意義」

*84 : (3) 2017年11月11日(土)13:00~17:00, 公開シンポジウム『戦後日本考古学と杉原荘介』, (主催: 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究所の世界的拠点形成」・日本古代学研究所), 於: リバティータワー1123 教室

- ・挨拶・開催趣旨: 石川日出志 (明治大学日本古代学研究所長/文学部教授)
- ・小田富士雄 (福岡大学名誉教授)「杉原弥生学と九州」
- ・安蒜政雄 (明治大学名誉教授)「岩宿遺跡の調査と先土器時代研究」
- ・石川日出志 (明治大学)「日本考古学界の組織化と共同研究」
- ・コメント: 大塚初重 (明治大学名誉教授)

*85 : (4) 2017年11月30日(木)~12月1日(金) 11:00~17:30, 国際学術研究会『交響する古代Ⅷ 全体テーマ《古代文化資源の国際化とその意義 vol. 3》』, (共催: 明治大学大学院文学研究科・文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業・明治大学国際日本古代学研究クラスター・明治大学日本古代学教育研究センター, 後援: 明治大学国際連携本部), 於: 11月30日: アカデミーコモン A5・6 会議室, 12月1日: 明治大学 グローバルフロント 1F 多目的室

【院生発表】

- ・里舘翔大 (明治大学大学院文学研究科博士後期課程)「筑前国嶋郡戸籍の造籍方針—嶋評戸口変動記録木簡に触れて—」
- ・関 恭平 (明治大学大学院文学研究科博士後期課程)「源氏物語末摘花巻における「葎の門」の話型と自然表現」
- ・橋本 剛 (早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)「格からみた律令国家の帰化政策」
- ・山口直美 (明治大学大学院文学研究科博士後期課程)「文学からみたタケウチノスクネ研究」

【研究報告】

- ・申敬澈 (大韓民国・釜山大学名誉教授)「加耶の情勢変動と倭」
- ・ヨハネス・ヴィルヘルム (慶應大学総合政策学部准教授)「岡正雄とウィーン大学における日本研究の発祥と流れ」
- ・石川日出志 (明治大学文学部教授)「杉原荘介と中韓考古学交流」
- ・佐々木憲一 (明治大学文学部教授)「杉原荘介の北アメリカ研究者との交流」
- ・井川史子 (Canada McGill University 名誉教授)「コメント: 杉原先生・岡先生と海外交流」
- ・湯浅幸代 (明治大学文学部准教授)「江戸中期における『源氏物語』注釈書・土肥経平『花鳥芳囀』について」
- ・牧野淳司 (明治大学文学部教授)「源氏物語注釈の諸相」
- ・志村佳名子 (明治大学研究・知財戦略機構研究推進員)「明治大学中央図書館所蔵『除秘鈔』『除秘鈔附』の「発見」とその意義」

- ・矢越葉子（明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）「日中古代史料群のデータベースとその活用」
 - ・加藤友康（明治大学大学院文学研究科特任教授）「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（新大型研究）における統合型検索システムの開発と文化資源化」
- *86:** (5) 2018年3月11日(日)13:00～17:30, 研究集会『文芸テキストから探る古代社会の“こころ”—時代とジャンルを越えて—』, (主催: 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本古代学研究所の世界的拠点形成」・明治大学日本古代学研究所), 於: グローバルホール
- ・基調講演: 上野 誠（奈良大学文学部教授）「歌と生活の古代学—そうじをめぐる—」
 - ・山崎健司（明治大学文学部教授）「萬葉の歌ことばと古代人のこころ」
 - ・荒木 浩（国際日本文化研究センター教授）「夢の表象と心の通い—『源氏物語』からフキダシまでを考える—」
 - ・湯浅幸代（明治大学文学部准教授）「『源氏物語』にみえる「心の鬼」考」
 - ・牧野淳司（明治大学文学部教授）「仏事と物語・和歌—「御法」の文学の意義—」
 - ・コメント・全体討論
- 【2018年度】**
- *87:** (1) 2019年1月12日(土)・13日(日)各10:00～17:30, 国際学術研究会『交響する古代IX』, 於: グローバルホール
- ・基調講演: 石川日出志（明治大学）「複眼的日本古代学研究—金印をめぐる実践—」
 - ・吉村武彦（明治大学名誉教授）「歌木簡と旧辞論の再構築」
 - ・ヨーゼフ・クライナー氏（ドイツ・ボン大学名誉教授/Josef Kreiner）「岡正雄—20世紀における日本の民族学の形成と展開」
 - ・小笠原好彦（滋賀大学名誉教授）「聖武天皇が造営した紫香楽宮と甲賀宮」
 - ・荒木志伸（山形大学）「政庁機能の再検討—古代城柵官衙遺跡を中心に—」
 - ・志村佳名子（信州大学）「古代・中世除目書研究の可能性—三条西家の除目書を中心として—」
 - ・中井真木（明治大学）「下襲（したがさね）のひろがり—院政期の故実を中心に—」
 - ・山崎健司（明治大学）「萬葉集仙覚本データベースの概要と可能性」
 - ・ローベルト・ヴィットカンプ（関西大学/Robert Wittkamp）「古事記は翻訳できるか—英・独訳における音仮名表記の扱い—」
 - ・木下綾子（聖学院大学）「『和漢朗詠集』における菅原道真の詩と本文系統」
 - ・沈慶昊（大韓民国・高麗大学校）「高麗李朝の碑誌文体について」
 - ・日向一雅（明治大学名誉教授）「文学論の時代—10世紀の詩論・和歌論・物語論—」
 - ・井上亘（常葉大学）「日本最初の書物: 聖徳太子『法華義疏』の成立」
 - ・加藤友康（明治大学大学院）「文化資源の研究資源化と統合型検索システムの開発」
- *88:** (2) 2019年2月23日(土)10:00～18:00, 日本古代学研究所シンポジウム『社会変化とユーラシア東西交易—考古学と分析科学からのアプローチ—』, (主催/明治大学日本古代学研究所), 於: リバティタワー1011教室, [中村大介（編）『社会変化とユーラシア東西交

易：考古学と分析科学からのアプローチ』(明治大学日本古代学研究所国際シンポジウム予稿集), 全60頁]

- ・中村大介(埼玉大学)「青銅器時代から匈奴時代における遊牧社会の長距離交易」
- ・ダニエル・シュタイニガー(ドイツ考古学研究所)「ラピスラズリ原産地と流通パターンに関する新視点」
- ・向井佑介(京都大学人文社会科学研究所)「胡漢の文化交流と交易」
- ・田村朋美(奈良文化財研究所)「ユーラシア東西交易とガラスの道」
- ・金奎虎(大韓民国・公州大学校)「科学的分析からみた韓半島のガラス製玉類の交易」
- ・山本孝文(日本大学)「ユーラシアの中継長距離交易と朝鮮三国」
- ・石川日出志(明治大学)「漢委奴國王」金印からみた東アジア社会」
- ・総合討論：コメント／朴天秀(大韓民国・慶北大学校)

5. 関連事業

【2014年度】

(1) 科学研究費補助金 基盤研究(A) 日本墨書土器データベースの構築 公開研究会『中国の文化遺産学—文字資料を中心として—』(於:明治大学グローバルフロント1階・グローバルホール), 2014年7月25日

- ・賀雲翹(南京大学歴史学系)「中国の文化遺産学—出土文字資料を中心に」
- ・向井佑介(京都府立大学文学部)「出土文字資料からみた漢魏晋南北朝の工匠」

(2) 主催:熊本県・熊本県教育委員会, 共催:明治大学日本古代学研究所 後援:明治大学博物館・熊本県文化財保護協会・朝日新聞社『鞠智城東京シンポジウム 律令国家の確立と鞠智城～698年「繕治」の実像を探る～』, (於:明治大学アカデミーホール), 2014年7月27日.

□最新調査報告

- ・矢野裕介(熊本県教育委員会:歴史公園鞠智城・温故創造館)

□講演

- ・吉村武彦(明治大学文学部教授)「律令国家の成立と鞠智城」
- ・小田和利(九州歴史資料館学芸調査室長)「大宰府防衛体制と鞠智城」
- ・森 公章(東洋大学文学部教授)「鞠智城「繕治」の歴史的背景」

□パネルディスカッション: コーディネーター;佐藤 信(東京大学大学院人文社会系研究科教授), パネラー;吉村武彦・小田和利・森 公章・矢野裕介

(3) 明治大学日本古代学研究所主催『明治大学・熊本県連携 古代史シンポジウム 熊本の古墳文化と鞠智城—菊池川流域の古代文化—』, (於:明治大学グローバルホール), 2014年11月29日

- ・吉村武彦(明治大学日本古代学研究所所長・文学部教授)「開会挨拶・趣旨説明」
- ・木村龍生(熊本県立歴史公園鞠智城温故創造館・主任学芸員)「江田船山古墳」
- ・木崎康弘(熊本県立装飾古墳館・館長)「装飾古墳」

- ・能登原孝道（熊本県立歴史公園鞠智城温故創生館・主任学芸員）「鞠智城」
 - ・シンポジウム パネラー：講演者および矢野裕介（熊本県立歴史公園鞠智城温故創生館・文化財整備交流課長）
- (4) 明治大学日本古代学研究所・世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会主催，読売新聞社共催，明治大学社会連携機構後援『世界に伝えたい飛鳥・藤原の魅力』，（於：明治大学リバティホール），2015年3月14日。

□記念講演

- ・居駒永幸（明治大学経営学部教授）「飛鳥万葉とは何か」
- ・田辺征夫（世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会専門委員会委員）「日本国誕生の地”飛鳥・藤原”-考古学の発掘調査から-」

□トークセッション

- ・パネリスト：里中満智子氏（マンガ家）・吉村武彦（明治大学文学部教授）・居駒永幸・田辺征夫，コーディネーター：関口和哉氏（読売新聞大阪本社編集委員）
- (5) 科学研究費助成事業基盤研究（B）「気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究」市民向け報告会『歴史・考古・民俗学から 気仙地域の魅力を語る』，（於：岩手県陸前高田市立横田基幹集落センター），2015年2月15日。
- ・挨拶・趣旨説明：石川日出志（研究代表・明治大学文学部教授）
 - ・平川南（大学共同利用法人人間文化研究機構常勤理事）「躍動する古代の気仙地域」
 - ・七海雅人（東北学院大学文学部教授）「鎌倉・南北朝時代の気仙・本吉地域」
 - ・羽柴直人（岩手県立博物館主任専門学芸員）「考古学からみた奥州藤原氏時代の気仙」
 - ・石川日出志「縄文・弥生時代の気仙地域-北と南をつなぐ-」
 - ・八木光則（陸前高田市文化財調査委員会委員）「陸前高田の石碑」
 - ・小谷竜介（東北歴史博物館学芸部副主任研究員）「地域社会の繋がりを考える-神社の祭礼と七夕行事から-」

【2015年度】

- (1) 中国社会科学院国際合作局・日本明治大学『中日交流與中日關係的歴史考察學術研討解（第5届）』（於：中国社会科学院近代史研究所學術報告庁），2015年11月2・3日。「
- ・石川日出志（明治大学文学部）「漢魏晋代四夷印と「漢委奴國王」金印」
 - ・朱来穎（中国社会科学院歴史研究所）「時間法と唐の日常生活—『天聖令』中心に—」
 - ・李卓（南開大学歴史系）「「正朔を奉ず」と「正朔を易う」—日本の曆法変更から見る日中關係の变化—」
 - ・井上和人（明治大学大学院文学研究科）「唐長安城（隋大興城）の設定規格」
 - ・韓建華（中国社会科学院考古研究所）「隋唐東都宮城御苑九洲池に関する初歩的研究」
 - ・石黒ひさ子（明治大学日本古代学研究所）「墓誌罐と経筒」
 - ・龔国強（中国社会科学院考古研究所）「唐長安東西両市遺跡の考古新発見」
 - ・吉村武彦（明治大学文学部）「東アジアにおける日本古代国家の形成の諸問題（覚書）」
 - ・徐建新（中国社会科学院世界歴史研究所）「最近の東アジア学界における好太王碑初期拓本の

調査と研究」

- ・加藤友康（明治大学大学院文学研究科）「平安時代史をどう捉えてきたか—通史叙述にみる平安時代像—」
 - ・劉萍（中国社会科学院近代史研究所）「連合国戦争犯罪委員会の設立及び戦後裁判」
 - ・伊勢弘志（明治大学文学部）「日中戦争における日本陸軍の鹵獲と略奪」
 - ・王健（中国社会科学院近代史研究所）「東アジアの朝貢体制と琉球研究の歴史的意味と現実的価値」
- (2) 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange（於：南カリフォルニア大学），2016年3月17日。
- ・吉村武彦「蘇我氏の盛衰と藤原氏」
 - ・佐々木憲一：Archaeological Investigations into Sixth-Century History of the Old Province of Hitachi, Eastern Japan
- (3) 高麗大学校・明治大学大学院文学研究科<第8回高麗大学校・明治大学学術交流行事 韓日文学歴史学の諸問題（IV）>（於：高麗大学校民族文化研究員大会議室B203），2015年9月10日
- ・石川日出志（基調講演）「漢委奴國王」金印と四夷印」。
- (4) 第六回明治大学文学研究科・高麗大学校文科大学国際学術會議，（於：明治大学），2015年10月23日
- ・湯浅幸代（研究発表）「源氏物語の皇統について」
- (5) 熊本県・熊本県教育委員会・明治大学古代学研究所主催（明治大学博物館・明治大学社会連携機構後援）公開研究会『鞠智城東京シンポジウム』，（於：明治大学アカデミーホール），2015年9月6日。
- ・加藤友康（講演）「平安期における鞠智城—九世紀～一〇世紀の対外関係と「菊池城院」「菊池郡城院」—」
- (6) 古代武蔵国研究会・日本古代学研究所主催<第3回古代武蔵国シンポジウム>，（於：明治大学グローバルホール），2015年11月15日
- ・吉村武彦「古代武蔵の時空間—東山道武蔵国の成立—」
 - ・山路直充「コメント」
- (7) 明治大学日本古代学研究所・世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会主催（共催：読売新聞社，後援：明治大学社会連携機構）<世界に伝えたい「飛鳥・藤原」の魅力—考古学・古代史からみた 飛鳥・藤原京の時代>，（於：明治大学アカデミーホール），2016年3月16日
- ・井上和人（講演）「7世紀—都が語る日本国家構築の真実」

【2016年度】

- (1) 2016年11月3日（木）10：00～17：00，『火の国・熊本の古代を語る』，（主催：明治大学国際日本古代学研究所，共催：熊本県教育委員会，後援：熊本日日新聞社・明治大学校友会熊本県支部・明治大学熊本県父母会，くまもと県民カレッジ特別企画事業「く

- まもと教育の日」関連イベント), 於: 熊本県民交流館パレア 10 階 パレアホール
- ・石川日出志「弥生時代青銅器と熊本」
 - ・佐々木憲一「古墳時代の熊本一周縁から見た古墳文化」
 - ・吉村 武彦「江田船山古墳出土大刀銘と 5 世紀の社会—クマソタケル伝承に触れて—」
 - ・井上 和人「古代山城・鞠智城と都城—激動する東アジア情勢と日本古代国家の構築—」
 - ・加藤 友康「平安時代の肥後国—摂関時代を中心とした地域社会と中央とのネットワークを受領の活動からみる—」
- (2) 2016 年 11 月 12 日 10:00~17:00, 公開シンポジウム「『播磨国風土記』研究の言代的意義」, (主催/明治大学日本古代学研究所 共催/兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室, 兵庫県立考古博物館), 於: グローバルフロント 1 階多目的室
- ・吉村武彦: 趣旨説明
 - ・Edwina Palmer (ニュージーランド・前ウェリントンビクトリア大学) 「海外の日本文学からみた播磨国風土記の魅力—口承文学—」
 - ・坂江 渉 (兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室) 「歴史学から読み解く播磨国風土記の神話—口頭の祭祀儀礼—」
 - ・古市 晃 (神戸大学大学院人文学研究科・教授) 「『播磨国風土記』からみた倭王権の地域編成」
 - ・吉村武彦 「『播磨国風土記』とクニ・国土」
 - ・和田晴吾 (兵庫県立考古博物館館長) 「『播磨国風土記』と考古学」
 - ・討論
- (3) 2016 年 11 月 19 日 (土) 13:00~17:00, 市川市史講演会『古代下総のまつりごと』, (主催: 市川市, 共催: 明治大学国際日本古代学研究クラスター), 於: メディアパーク市川 2 階 グリーンスタジオ
- ・白井久美子 (千葉県立房総のむら主任上席研究員) 「葛飾の古墳と総の豪族」
 - ・吉村武彦 (明治大学名誉教授) 「市川のいにしえ—下総国葛飾郡の成立」
 - ・加藤友康 (明治大学大学院文学研究科特任教授) 「下総国府をとりまく人々の活動」
 - ・山路直充 (市立市川考古博物館学芸員) 「下総国分寺と七重塔」
 - ・川尻秋生 (早稲田大学文学学術院教授) 「下総国府にやって来た源頼政」
- (4) 2017 年 1 月 28 日 (土) 13:00~17:30, 鞠智城・東京シンポジウム『鞠智城の終焉と平安社会—古代山城の退場—』 (主催: 熊本県・熊本県教育委員会, 共催: 日本古代学研究所, 後援: 明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会), 於: アカデミーホール
- ・西住欣一郎 (熊本県教育委員会) 「平安時代の鞠智城」
 - ・井上和人 (明治大学大学院文学研究科特任教授) 「古代山城の真実—鞠智城はなんのためにつくられたのか—」
 - ・榎本淳一 (大正大学文学部教授) 「東アジア世界の変貌と山城」
 - ・松川博一 (九州歴史資料館学芸員) 「平安時代の大宰府と古代山城」
 - ・ディスカッション: コーディネーター: 佐藤信 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

□パネル展同時開催（1月23日～2月3日）「熊本地震と文化財」，於：アカデミーコモン1F
展示スペース

(5) 2017年2月11日(土)13:00～17:00, 科研費市民向け報告会「歴史・考古・民俗から気仙地域の魅力を語るⅢ」(主催：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B) 26284100 「気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究」(研究代表：石川日出志), 後援：住田町・住田町教育委員会・陸前高田市教育委員会・大船渡市教育委員会), 於：岩手県住田町農林会館・大ホール

- ・挨拶：平川南（人間文化研究機構理事）
- ・挨拶：多田欣一（住田町町長）
- ・石川日出志（明治大学文学部教授）「北上山地の洞穴遺跡—縄文・弥生時代の三陸海岸と北上山地—」
- ・八木光則（陸前高田市文化財調査委員）「古代三陸の蝦夷社会」
- ・室野秀文（盛岡市教育委員会文化財主査）「気仙川流域の中世城館調査報告」
- ・蝦名裕一（東北大学災害科学国際研究所准教授）「伊達政宗の気仙郡統治」
- ・川島秀一（東北大学災害科学国際研究所教授）「津波が通った集落の漁業と信仰」

(6) 2017年3月4日(土)13:00～16:30, 日本遺産飛鳥シンポジウム「東京講演」：『日本国創成のとき～飛鳥を翔た女性たち～』(主催：日本遺産「飛鳥」魅力発信事業推進協議会（橿原市・高取町・明日香村), 共催：読売新聞社・明治大学社会連携機構), 於：アカデミーホール

□オープニングムービー： 「日本国創成のとき～飛鳥を翔た女性たち～（推古女帝編）」

□第一部講演

- ・里中満智子（マンガ家）「母としての斉明天皇」
- ・吉村武彦（明治大学名誉教授）「斉明女帝のまつりごと」
- ・明日香村教育委員会文化財課「調査報告」

□第二部 パネルディスカッション： 「斉明天皇と皇極天皇」

- ・パネリスト：里中満智子，吉村武彦，コーディネーター：関口和哉（読売新聞大阪本社編集委員）

(7) 2017年3月5日(日)13:00～17:00, 世界遺産登録をめざす東京講演会『世界に伝えたい「飛鳥・藤原」の魅力—「外〔海外〕からみた「飛鳥・藤原」—』, (主催：大学日本古代学研究所, 世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会, 共催：読売新聞社, 後援：明治大学社会連携機構, 明治大学博物館), 於：アカデミーホール

- ・基調講演：木下正史（東京学芸大学名誉教授, 世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会専門）「飛鳥・藤原の都—「日本国」誕生の舞台—」
- ・忽那敬三（明治大学博物館学芸員）「お雇い外国人技師・ガウランドが見た飛鳥の古墳—大英博物館に残された記録から—」
- ・佐々木憲一（明治大学文学部教授）「世界の都市史からみた飛鳥」
- ・トークセッション： コーディネーター：関口和哉（読売新聞大阪本社編集委員）

【2017年度】

(1)・(2) 2017年6月14日(水) 15:20~17:00・2017年6月18日(日)14:00~16:00

『孫慰祖先生特別講義』, (主催: 国際交流基金, 後援: 明治大学国際日本古代学研究所
スター・明治大学アジア資料学研究所), 於: リバティタワー1階 1011 教室 () グローバル
フロント1階 多目的室

・孫慰祖 (中華人民共和国・上海博物館) 「三十年来の古璽印研究における新認識—曖昧から明
晰へマクロからミクロへ, 印の中から印の外へ—」

・孫慰祖 「秦漢南北朝璽印の断代研究」

(『古代学研究所紀要』第25号: (講演録20176月14日・18日, 石川日出志「孫慰祖先生
の講演招聘について」135 - 138 ページ, 孫慰祖「三十年来古璽印研究の新認識」139 - 161
ページ, 孫慰祖「秦漢南北朝璽印の断代(編年)研究—封泥の類型分類の断代意義, も併
せて—」pp. 163 - 182)

(3) 2018年1月28日(日)13:00~17:30, 鞠智城・東京シンポジウム『鞠智城跡—その歴史的価
値を再考する—』, (主催: 熊本県・熊本県教育委員会・日本古代学研究所, 後援: 明治大
学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会), 於: アカデミーホール

・佐藤正知 (文化庁文化財部記念物課主任調査官) 「古代山城の保存と活用」

・吉村武彦 (明治大学名誉教授) 「列島古代史における鞠智城」

・館野和己 (奈良女子大学特任教授) 「文化遺産としての鞠智城」

・ディスカッション: コーディネーター: 佐藤信 (東京大学大学院人文社会系研究科教

(4) 2018年2月18日(日)13:00~16:30, 科研費市民向け報告会『歴史・考古学から気仙地域の
魅力を語る IV』, (主催/ : 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B) 「東北太平洋沿岸地
域の歴史学・考古学的研究」, 共催: 気仙歴史文化研究会, 後援: 大船渡市教育委員会・陸
前高田市教育委員会・住田町教育委員会・明治大学日本古代学研究所), 於: 大船渡市市民
交流館・カメラホール

・高橋憲太郎 (宮古市教育委員会) 「岩手県内の古代貝塚」

・永田英明 (東北学院大学文学部) 「古代蝦夷と「海の道」」

・高橋和孝 (奥州市教育委員会) 「閉伊氏について」

・蝦名裕一 (東北大学災害科学国際研究所) 「旧気仙郡の古文書調査—3.11 後の所在調査・保
全活動から—」

(5) 2018年3月18日(日)13:00~17:00, 世界遺産登録をめざす東京講演会『世界に伝えたい
「飛鳥・藤原」の魅力 「アジアの宮と都 ~周礼を中心に~』, 於: アカデミーホール

・基調講演: 木下正史 (東京学芸大学名誉教授, 世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会専門委
員長) 「『日本国』誕生の中心舞台を探る—飛鳥の宮都から藤原宮・京へ—」

・吉村武彦 (明治大学名誉教授) 「飛鳥の時代の国づくり」

・村元健一 (大阪歴史博物館学芸員) 「中国都城の日本への影響について—『周礼』との関
わりを中心に—」

・トークセッション: コーディネーター: 関口和哉 (読売新聞大阪本社編集委員)

- (6) 2018年3月21日(水)9:30~17:15, 明治大学・中国社会科学院学術交流会『古代における日中交流』, (主催: 明治大学大学院・文学部), 於: グローバルホール
- ・石川日出志(明治大学)「漢委奴國王」金印駝鈕再加工説を評価する」
 - ・劉振来(中国社会科学院)「考古新発見からみた魏晉墓制の変化」
 - ・佐々木憲一(明治大学)「古墳時代における文字の受容」
 - ・銭国祥(中国社会科学院)「漢魏洛陽城大極殿の考古学的発見」
 - ・若狭徹(明治大学)「上野三碑と古墳分布からみた古代豪族」
 - ・朱岩石(中国社会科学院)「東アジア地域6世紀仏教遺跡の考古学研究」
 - ・吉村武彦(明治大学)「大化改新と社会生活の改革—愚俗の改廃—」
 - ・陳志遠(中国社会科学院)「常星之夜落を弁ず—仏暦推算からみる中古仏教詳説—」
 - ・新井崇之(明治大学)「日本が注文した中国陶磁に関する研究とその課題」
 - ・黄正建(中国社会科学院)「日本古写本《群書法要》選文浅析—以《尚書》中的法律資料為例—(節略稿)」.

【2018年度】

- (1) 2018年7月26日(木)16:00~18:00, 公開講演会『中国における日中交渉史上の考古学的新発見!?!』, (主催/明治大学国際日本古代学研究クラスター・日本古代学研究所), 於: グローバルホール
- ・賀雲翱(中華人民共和國・南京大学歴史学院教授)「中国南通市如東県掘港における古国清寺の考古学的発見と関連問題の検討」
- (2) 2018年8月26日(日)13:00~16:35, 明日香村まると博物館フォーラム 飛鳥学講演会 テーマ『蘇我氏の古墳』, (主催: (公財) 古都飛鳥保存財団・奈良県明日香村・明治大学日本古代学研究所・読売新聞社, 後援: 近畿日本鉄道(株)・国営飛鳥歴史公園飛鳥管理センター・(一財) 明日香村地域振興公社), 於: アカデミーホール
- ・高橋幸治(明日香村教育委員会文化財課主査)「近年の飛鳥における発掘調査成果」
 - ・今尾文昭(関西大学非常勤講師)「舒明大王(天皇)の古墳と蘇我氏の葬地」
 - ・吉村武彦(明治大学名誉教授)「日本の黎明」
 - ・パネル討論: パネリスト: 吉村武彦・今尾文昭・若狭徹(明治大学准教授), コーディネーター: 関口和哉(読売新聞大阪本社地方部次長)
- (3) 2018年9月29日(土)11:00~17:30, 公開シンポジウム『今, 難波宮から都城を考える』, (主催: 明治大学日本古代学研究所), 於: アカデミーコモン2階・A1・2・3会議室
- ・吉村武彦(明治大学名誉教授)「大化改新と難波遷都」
 - ・積山洋(大阪文化財研究所)「前期難波宮の発掘の成果と課題」
 - ・磐下徹(大阪市立大学)「7世紀史のなかの前期難波宮」
 - ・村元健一(大阪歴史博物館)「中国からみた前期難波宮」
 - ・網伸也(近畿大学)「後期難波宮と長岡遷都」
 - ・金在弘(大韓民国・国民大学校)「日本と朝鮮半島の都城」
 - ・シンポジウム: 司会: 川尻秋生(早稲田大学文学学術院)

- (4) 2018年10月14日(日)10:30~17:10, 鞠智城・古代山城シンポジウム『古代山城の成立と変容』, (主催: 熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所, 後援: 明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会), 於: アカデミーホール
- ・基調講演: 亀田修一 (岡山理科大学教授)「古代山城の成立と変容」
 - ・仁藤敦史 (国立歴史民俗博物館教授)「七世紀後半の国際関係と古代山城」
 - ・赤司善彦 (大野城心のふるさと館館長)「朝鮮式山城の特徴ー主に兵站と備蓄についてー」
 - ・向井一雄 (古代山城研究会代表)「神籠石系山城の捉え方~築城年代・築城主体論の克服」
 - ・パネルディスカッション: コーディネーター: 佐藤信 (人間文化研究機構理事),
コメント: 中村友一 (明治大学准教授), 五十嵐基善 (明治大学講師), 熊本県教育委員会職員
- (5) 2019年2月24日(日)13:00~16:50, 科研費市民向け報告会『歴史・考古学から本吉・気仙地域の魅力を語る』, (主催: 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的研究」, 後援: 気仙沼市教育委員会・陸前高田市教育委員会・明治大学日本古代学研究所), 於: 気仙沼市中央公民館
- ・森千可子・鈴木志穂 (気仙沼市教育委員会生涯学習課)「気仙沼市の文化財について」
 - ・石川日出志 (明治大学文学部)「三陸の考古学ー縄文から弥生へー」
 - ・平川南 (大学共同利用研究機関法人人間文化研究機構)「大伴氏と気仙地方 黄金と矢羽根を求めてー甲斐国一宮浅間神社蔵「古屋家家譜」からー」
 - ・蝦名裕一 (東北大学災害科学国際研究所)「旧本吉郡に残る災害伝承」
 - ・七海雅人 (東北学院大学文学部)「『更地の向こう側 解散する集落「宿」の記憶地図』の紹介」
- (6) 2019年3月10日(日)13:00~17:00, 世界遺産登録をめざす東京講演会『世界に伝えたい「飛鳥・藤原」の魅力ー「古代寺院から読み解く東アジアの国際交流」』, (主催: 明治大学日本古代学研究所・世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会, 共催: 読売新聞社, 後援: 明治大学社会連携機構), 於: アカデミーホール
- ・記念講演1: 吉村武彦 (明治大学名誉教授)「飛鳥寺・斑鳩寺建立とその時代」
 - ・記念講演2: 清水昭博 (帝塚山大学文学部教授)「瓦から読み解く朝鮮半島と飛鳥の古代寺院」
 - ・記念講演3: 黄曉芬氏 (東亜大学人間科学部教授)「最新の中国考古学からみた飛鳥」
 - ・トークセッション: コーディネーター: 関口和哉氏 (読売新聞大阪本社地方部次長)

6. 明治大学日本古代学研究所ホームページ

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/>

日本古代学研究の世界的拠点形成
平成26年度（2014）～平成30年度（2018）
私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
（課題番号 S1411022）
研究成果報告書

発行日 令和元（2019）年5月17日

発行者 明治大学

日本古代学研究所

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/>

研究代表者 石川 日出志（文学部教授）